女の子になったら修羅場だった件 - 第七十三話　ありすの成長がとてもよくわかった件

「ありすはどうせバカだもん……」

俺に抱き着き、俺の胸に顔を埋めてえぐえぐと嗚咽を漏らしているありす。

そんなありすの華奢な背中に左手を添え、右手で優しく頭を撫でる。

生徒会室での一件のあと、ありすは落ち込んでしまった。

理由は百合園さんだ。

犬猿の仲だったありすと百合園さんだけど、ケンカをしても負けるのはいつも百合園さんだった。

お騒がせなおバカさん。それが百合園さんのイメージだった。

でも百合園さんは変わりつつある。

変わり始めたのはキャンプから帰って来た辺りからだろう。

夏休みに入る前、色々と予定を立てていた時、姉であるイリスさんのことを口にした百合園さん。

あの時は百合園さんとイリスさんの関係を知らなかったから、百合園さんの姉とかまた厄介なのが増えてしまう、なんて思っていた。

それからイリスさんに会ってキャンプに行き、二人の関係を知った。

そしてキャンプが打ち解けるきっかけとなり、二人の仲が徐々に良好になっていった。

それと比例するかのように、百合園さんは騒ぎを起こさなくなっていき、同時に妙に優秀な一面を見せるようになった。

そんな百合園さんに大きな変化が起きた。

百合園さんがありすとデートをした時、お漏らしをしてしまった。あの時ありすは全力で百合園さんを守った。

イリスさんのこともあるけど、百合園さんが大きく変わったのは、あの時が境目になっているように思う。

要するに、百合園さんを変えたのはイリスさんであり、ありすでもあるんだ。

生徒会室で会長と対等に渡り合った百合園さん。

俺に恩を売るとか、その恩を売りっぱなしにするとか言っていたけど、あれはたぶん照れ隠しだと思う。

百合園さんは俺に協力してくれているけど、もしかしたらありすの力になりたいという想いの方が強いかもしれない。

百合園さんにとって、ありすはずっと自分にかまってくれた人だ。

周りがどれだけ呆れても、ありすだけはロうるさく百合園さんに絡んでいた。

そしてデートでの一件。

イリスさんとの仲が良好になり、舞い上がってしまっていた百合園さんは、ちょっとミスってしまった。

その時百合園さんを守ったのはありすだ。

百合園さんにしてみれば、どれだけ嬉しかったことか。

だから百合園さんは、俺に協力することで、ありすの力になろうとしているんだと思う。

皮肉な話だ。

　ありすの存在が百合園さんの隠れた才能を引き出し始めているのに、それを目の当たりにしたありすが落ち込んでいるのだから。

　ありすは愛らしい見た目を持って生まれてきただけで、平凡な俺の妹だ。

　これといった才能は特に無く、勉学では俺より劣っている。

　でもね、ありす。ありすは特別だ。特別なんだ。少なくとも俺にとっては特別な存在だ。

　世界でたった一人の、俺の双子の妹なんだよ。

「ありすがいないとお姉ちゃんはダメだって言ったでしょ？」

　俺の胸に顔を埋めて嗚咽を漏らしているありすに、そう問いかけた俺は、ありすの頭に頬擦りをした。

「……うん」

　嗚咽交じりに頷くありす。

　とまあそんなわけで、学校から帰るなり甘えん坊になってしまったありすは、今現在、俺の部屋のベッドで、座っている俺に抱き着いて甘えまくっている。

　俺としても今日は甘やかすって決めたからな。とことん甘やかそうと思う。

　ありすの華奢な両肩に手を添えた俺は、抱き着いているありすを引き離した。

「うー！　うー！」

　引き離されたありすは、うーうーと声を上げながら俺にしがみ付き、俺の胸に顔を埋めようとしている。

「ありすは特別」

　そう言って、ありすの頬にチュッとキスをした。

　ピタッと動きを止めたありすは、一瞬で顔を真っ赤にするとへらりと笑った。でもすぐにふて腐れた顔になった。

落ち込んではいるようだけど、俺のことで悩んでいた時ほどではないようだ。

「ありすは一番」

そう言って、今度は反対の頬にチュッとキスをした。

さらに顔を真っ赤にして、にへらと笑うありす。

「ありすの代えなんて、存在しないんだからね」

そう言って、ありすの頬にチュッチュッと何度もキスをした。

「え、えへ、えへへ、えへへへへ」

燃えるような真っ赤な顔で、まるで子供のように笑うありす。

俺がキスをしてもふて腐れたフリをしていたありすだけど、連続キスを喰らってふて腐れるフリを忘れてしまったようだ。

はぁ、可愛い。

◆

「あーん」

俺に向かって口を開けるありす。

夕ご飯になり、食卓に着いているんだけど、ありすは自分で食べようとせず、まるで雛鳥が親鳥に餌をせがむように俺に向かって口を開けている。

「はい、ぱっくん」

そう言いながら、甘えるありすにご飯を食べさせる。

「あむあむ」

口を閉じたありすが、嬉しそうにもぐもぐしている。

そんなありすの頭をよしよしと撫でると、コクンと喉を鳴らしたありすがえへっと笑

い、あーんと口を開いた。

「……どうなのこれ」

　テーブルを挟んで俺達と対面に座っている母さんが、呆れたようなジト目で呟いた。

「はい、ぱっくん」

　気にせずありすにご飯を食べさせる。

「あむあむ」

　口を閉じて嬉しそうにもぐもぐするありす。

　ジト目のままの母さんが、やれやれと言った様子で溜息を漏らした。

　◆

　食事が終わり、風呂に入ることになったけど――。

「ぬぎぬぎして」

　脱衣所の床にペタンと女の子座りをしているありすが、万歳をするように両手を上げ、なぜかムッとしたような顔で声を上げた。

　服を脱がせて欲しいようだけど、なぜムッとしているんだ。

「ぬぎぬぎ！」

　ジト目でありすを見ていたら、怒ったように声を張り上げるありす。

　子供化と言うより幼児化しているような気が……。

「はいはい」

　溜息交じりに笑った俺は、ありすの前にしゃがむと、着ている服を脱がせにかかった。

だいぶ慣れたとはいえ、裸を見るのはまだ抵抗がある。

でも俺には奥義ピントずらしがあるからな。

ありすを見ているようで、その実焦点をずらし、視界を強制的にボカしてしまう技だ。

欠点は視界がボヤけているから――。

「あん、くすぐったいよぉ」

俺の指先が柔らかいモノをぷにっとつつき、ありすが甘い笑い声を上げた。

これが欠点だ。視界がボヤけているから手さぐりに頼らざるを得なくなり、触らなくてもいい所を触ってしまうのだ。

「ひゃんっ」

指先が何か硬いモノに触れ、ありすが甘い悲鳴を上げた。

俺は何を触ったんだ。ありすの体はどこを触ってもだいたい柔らかいはずなんだけど。

しかもありすがはぁはぁと熱い吐息を漏らしている。

奥義ピントずらしを使うと余計に危ないような気がしたため、仕方なく視界の焦点をありすに合わせた。

ありすの体を直視しないように気をつけつつ、どうにか服を脱がせ終わった俺は、自分の服を脱ぐことにした。

全裸になっても相変わらず床にペタンと女の子座りをしているありすは、指を咥えてジーッと俺を見上げている。

脱ぎづらいんですけど。そんなに見られたら脱ぎづらいんですけど。

でも見るなとも言えないし……。

仕方なくありすに凝視されながら服を脱いだ。

「だっこ」

服を脱ぎ終わると、ありすが両手を上げて抱っこをせがんできた。

服を着た状態ならまだいいけど、全裸で抱っこをすると肌が直接密着してしまう。

でもここまできてダメだとも言えず、ありすをお姫さま抱っこした。

肌が密着して変な汗が出ている俺と、俺に抱き着き、嬉しそうに俺の肩に頭を預けているありす。

浴室に入り、あすりを椅子に座らせてシャワーを出し、ありすの体をお湯で軽く流した。そして自分の体にもお湯をかけ、ありすを再びお姫さま抱っこすると、一緒に湯船に浸かった。

今日はとことん甘やかすって決めたからな。

俺の膝の上に座る形で湯船に浸かっているありすは、楽しそうに鼻歌を口ずさんでいる。

幼児化しているありすは、なんだか夜乃宮さんみたいだな。

それとどうやら完全に機嫌が直ったようだ。

しばらくして湯船から上がろうとしたけど、ありすを抱っこして立ち上がるのは無理だった。

そこは察したのか、自分で湯船から出てありすは、ちょこんと椅子に座った。

何も言わず、スポンジにボディーソープをつけ、ありすの背中を洗う。

昔はよくこうやってありすの背中を洗ったもんだ。

そうしみじみ思っていたら、ありすが座ったままクルンと回り、俺に正面を向けた。

「前も洗って」

　そして両手を上げ、そんなことを言った。

　前もって……。

　いくら甘えてもらってもいいけど、こう言うのはちょっと困るんだけど。

「スポンジ使っちゃだめ」

「え？」

　スポンジを使うなって、じゃあどうやって洗えって言うんだ。

「手で洗って」

「え？　て？　てって、手？」

「おててで洗って」

「そ、それは……」

　手で直接洗えって言うのか。さすがにそれは無理だ。

「あ、ありすちゃん、手で洗うのはちょっと……」

「おててがいいの」

「あ、ありすちゃん……」

「おててがいいの！」

「あ、あり……」

「おててじゃなきゃやーの！」

　どうにかありすの説得を試みようとしたけど、顔を真っ赤にさせて涙目になっているありすが、頬をプックリと膨らませてプルプルと震えている。

　これはダメだ。これ以上抵抗すると確実に泣く。

　仕方がない。

結局俺は手にボディーソープをつけ、その手でありすの全身を洗った。

ありすがどのくらい成長したか、とてもよくわかりました。

女の子になったら修羅場だった件 - 第七十四話　今度はちゃんと見ている件

カリカリと聞こえる音。

薄暗い部屋に立っている俺は制服を着ていた。

あれ、俺はいつの間に着替えたんだ。

ありすと一緒に寝て、それから……。

おかしい。着替えた記憶がまるで無い。

寝惚けながら着替えたのか。

「ありすは……」

そう思って室内を見回し、ギクッとした。

机に取り付けられたスタンドに灯りが点いていて、そして……。

男が机に向かっている。

カリカリという音は、男がノートにペンを走らせている音だった。

とそこで違和感を覚えた。

いや、違和感が無かったのだ。

違和感が無かったことに、今違和感を覚えている。

「こ、ここは……俺の部屋だ」

辺りを見回しながら呟いた。

俺の部屋。女版の俺の部屋ではなく、男だった俺が使っていた部屋だ。

これはいったいどう言うことだ。

ふぅ、と吐息が聞こえ、ドキッとして男を見た。

机に向かっていた男は、ペンを置くと、指を組んで両手を上げ、ググッと背伸びをした。

「困ったなぁ。男の子の私の成績がこんなに良いなんて……」

伸びをやめ、机の上に置いてあった紙を手に取った男は、困ったように呟くと溜息を漏らした。

「料理の腕も私より格段に上みたいだけど、レシピを残しておいてくれて助かった。ていうか、勉強にしても料理にしても要点を纏める力が凄い。私よりだいぶスペックが高いのかも……」

紙を見つめながらブツブツと呟いている男。

ていうか、男の割に話し方がなんだかキモい。自分のことを私とか言ってるし。

とそこでハッとした。

ちょっと待て。おいちょっと待て。

俺が今いるのは男だった頃の俺の部屋。そして机に向かっている男。

まさかアイツは……。

男の俺？

「おい」

声を上げてみたけど、男は反応しない。

「おい！」

声を強めてみたけど、やはり反応しない。

これは夢なのか。男だった頃の夢を見ているのか。

いや、でも、さっきアイツは自分を私と言っていた。

女版の俺の現在を想像し、それを夢に見ているだけなのか。

それとも……。

バンッと音が響き、思わずビクッとしてしまった。

次いでパッと部屋の照明が点き、辺りが明るくなった。

「ああ、ありすちゃ、じゃなくてありす」

椅子に座ったまま振り返った男が、部屋の入口の方を見て声を上げ、にっこりと笑った。

視界に映る男の顔。

俺……なのか。

俺ってこんな顔だっけ。

男だった頃の自分の顔を思い出せない。

俺って写真があまり好きじゃなかったし、鏡もあまり見なかったし、正直よく覚えていない。

でも平凡な感じが俺っぽい。

「なに笑ってんのよ！」

室内に響き渡った怒声に驚きつつも、懐かしさを覚えた。

振り返って部屋の入り口を見ると、怒りに満ちた表情を浮かべたありすが立っていた。

こめかみに血管が浮き出ているから、かなりご立腹なのがわかる。

「ありす……」

　ありすだ。俺と一緒に生まれ、俺と一緒に生きてきたありすだ。

「ありす！」

　声を張り上げたけど、ありすは反応しなかった。

　これはやっぱり夢なのか。

「ありすは今日も可愛いね」

　椅子に座っている男の俺が、にっこりと笑ったまま声を上げた。

　ビキッとありすのこめかみに極太の血管が浮き上がり、ギリギリと歯を食い縛りながら射殺すような目で男の俺を睨むありす。

「私をバカにしてるんでしょ！」

「してないよ」

　殺気みなぎるありすの怒声に、椅子に座っている男の俺がしれっと答える。

「なんなのよいったい！　私を可愛いだなんて一度も言ったことが無かったクセに！　ここ最近おかしいのよ！　絶対変だよ！」

　怒り狂った叫びを上げたありすは、ぜぇぜぇと肩で息をしている。

「おかしい、変だ。そう言う割に、ここ最近ちょくちょくお兄ちゃんの部屋に来るよね？　もしかしてお兄ちゃんのことが心配なのかな？」

　にこにこと笑いながら話す男の俺に、ありすの顔がカーッと真っ赤になった。

「べ、べべべべ、べちゅに心配とかしてないし！」

　青い瞳を激しく揺らし、燃えるような真っ赤な顔で震える声を上げるありす。

　明らかに動揺している。べちゅに、とか噛んじゃってるし。

「お兄ちゃんはいつだってありすの心配をしてるけどね。だって可愛いありすのことが大好きだから」

恥ずかしいセリフを平然と吐く男の俺に、俺まで恥ずかしくなってくる。

でも女になった俺も、ここ最近ありすを可愛い可愛い言っているから、人のことは言えないような気もするけど。

一方俺から可愛いと言われたありすは、燃えるような真っ赤な顔で白目を剥いていた。

ありすよ、大丈夫か。

ハッとしたありすは、ダッと駆け出して部屋から出て行ってしまった。

部屋の入り口を見ている男の俺は、楽しそうにクスッと笑っている。

おい男の俺。あ、いや、中身は女だから女の俺か？　でも女は俺だし、ああ、もう、ややこしい。

今の俺は女なんだから、アイツは男の俺と呼ぶ。

おい男の俺よ、お前は男なんだからクスッとか笑うな。そう言うのやめろ。もっと男らしくしろ。

そんなことを思っていたら、ダダダダッと廊下を走る音が聞こえた。次いで勢いよく部屋の中に駆け込んで来たありすは、大量のぬいぐるみを抱きかかえていた。

「うがー！」

そして怪獣のように吠えながら、抱きかかえているぬいぐるみを男の俺に向かって投げ始めた。

投げられたぬいぐるみが、男の俺にポコンポコンと当たる。

必死にぬいぐるみを投げつけるありすと、にこにこと笑っている男の俺。

投げるぬいぐるみが無くなったありすは、ぜぇぜぇと肩で息をしている。

そんなありすを、男の俺は何も言わずに優しい瞳で見つめている。

「……クセに」

ポツリと呟くありす。

「今まで私が言って欲しいことを何も言ってくれなかったクセに！」

そう叫んだありすは、青い瞳からポロポロと涙をこぼしていた。

「髪型を変えても、グロスを塗ってみても、一度も気付いてくれなかった！　私が悪さをしてもお兄ちゃんは私を許すだけで、一度だって私を見てくれなかった！　いつも笑って私を許すだけ！　それだけ！　それなのにどうして急に私を見てくれるようになったの！？　急に変わられても困るんだよ！」

ありすの叫びが胸に突き刺さる。

私を見てくれなかった。その言葉が両肩に重くのしかかった。

俺はありすを見ているつもりだった。ありすのためを思い、ありすの世話をしてきたつもりだった。

だけど世話をしていただけ。

ありすの言う通り、俺はありすを見ていなかったのかもしれない。

だからありすは俺の気を惹こうと、悪さばっかりしていたのか。そして俺を縛りつけようとしていたのか。

ごめん、ごめんなありす。お兄ちゃんはほんとダメなお兄ちゃんだな。

「ありすはお兄ちゃんのことが大好きなんだね」

聞こえた声にドキッとした。

おいバカ男の俺。ありすは泣いているんだぞ。それなのにそんな挑発的なことを言ってどうするんだ。

案の定、目を見開いたありすは、ビキッとこめかみに血管を浮き上がらせた。

「ふざけ――」

「好きだよ、ありす。お兄ちゃんはありすが大好き。ずっと言えなくてごめんね」

　叫ぼうとしたありすだけど、男の俺の言葉にタイミングを失ってしまったのか、口を開けたまま固まっている。

　そんなありすを見てクスッと笑った男の俺は、ギシッと音を立てて椅子から立ち上がった。そしてありすに向かってゆっくりと歩を進める。

「く、来るな……」

　燃えるような真っ赤な顔で、震えながら声を上げたありすが、カクカクと膝を揺らしながら後退する。

「こ、来ないで……」

　震える声を上げて後退するありすは、でもすぐにトンと背中が壁に当たり、焦ったように左右を見た。

「怖がらなくていいよ。ただ抱き締めるだけだから」

　にこにこと笑いながらそんなことを言った男の俺が、ゆっくりとありすに迫ってゆく。

　おいバカやめろ。今のお前は男なんだぞ。たとえ兄でも男から迫られたら怖いに決まってる。しかも、怖がらなくていいよ、とか誘拐犯の常套句みたいで余計に怖いんだよ。

「ひゃあああああああああああ！」

　燃えるように真っ赤な顔で妙な声を上げたありすが、男の俺の足をゲシッと蹴った。

「あいたっ」

　普通に痛がる男の俺。

「お、お兄ちゃんの、お兄ちゃんの……ぶぁーか！」

　そう吐き捨てるように叫んだありすは、走って部屋から出て行ってしまった。

「な、なんで蹴られたんだろ。何かまずかったのかな？」

そんなとことを言った男の俺は、頭を掻いている。

何がまずかったかじゃない！　はた目から見たら妹を襲おうとしている変態な兄にしか見えなかったぞ！

「それにしても新鮮だなぁ。私に気を使わず、真っ向から体当たりで接してくるありすなんて。きっとお兄ちゃんから大切に大切に育てられたんだろうなぁ」

そう呟いた男の俺はクスッと笑った。

「でも男の子の私って、頭が良い割に私に輪をかけて不器用だったみたいだねぇ」

その男の俺の呟きに、余計なお世話だ、と内心で突っ込みを入れた。

お前だってありすと上手くいっていなかったんだろうが。

「可愛いありす、大好きだよ。お姉ちゃん、やっと心からそう言えるよ」

そう男の俺が呟くと、ガタンッと音がした。そしてダダダダッと廊下を走る音が聞こえた。

あれ、もしかして、ありすがまだいたのか？　そして今の呟きを聞かれた？

「ふふ、ほんとありすはお兄ちゃんのことが大好きなんだね。かーわいい」

開け放たれたままの扉の先を見つめながら、そう言ってクスッと笑う男の俺。

だからそのクス笑いをやめろって言ってんだろ。

でも――。

俺を困らせ、俺を縛りつけようとしていたあのありすが、自分を見て欲しかった、なんて口にするなんて。

「あーりす」

不意に男の俺が声を上げた。

ガタンと音が響き、ダダダダッと廊下を走る音がした。

まだいたのか！　ていうか気配を殺して戻って来ていたのか！

ありすは俺が変わったと思い、戸惑っているんだろうな。

でも本音を口にした辺り、良い方に向かっているように思える。

だけど――。

「おい男の俺、いや周（あまね）。お前な、もっと男らしく振る舞え。あとありすに迫るのはやめろ。自分が男だって自覚を持て。わかったか」

そう男の俺に言い聞かせたけど、男の俺は扉の先を見つめながらクスクスと笑っていて、俺の声には反応しなかった。

やっぱり夢か。

ほんと変な夢だ。

◆

「クスって笑うなあ！」

声を張り上げ、そこでハッとした。

カーテンの隙間から差し込む光と、聞こえる小鳥のさえずり。そしてベッドに寝ている俺。

急いで布団を捲り、パジャマを着ていることを確認した。

やっぱり夢だったか。

しかし変な夢だったな。

夢って目が覚めると忘れることが多いのに、妙にはっきりと覚えている。

「むにゃ？」

声が聞こえ、次いでムギュッと何かが抱き着いてきた。

俺に抱き着き、幸せそうな顔ですやすやと寝息を立てているありす。

「ありす……」

幸せそうなありすの寝顔を見てホッとした。

「今度はちゃんと見てるからな。ありすをちゃんと見てる」

そう言って、ありすの頬にチュッとキスをした。

女の子になったら修羅場だった件 - 第七十五話　保母さん姿が一番人気らしい件

　幼児化して俺に甘えまくっていたありすだけど、学校に行くために家から出た途端、キリリと表情を引き締めた。

　そして今現在、俺の隣を颯爽と歩いている。

　百合園さんの急成長を目の当たりにして落ち込んでいたありすだけど、俺に心置きなく甘えることで鋭気を養ったようだ。

「ありす」

　立ち止まった俺はありすを呼び止めた。

「ん？」

　俺に呼び止められて立ち止まり、首を傾げるありす。

「リボンが曲がってる」

　そう言ってありすの首元に両手を伸ばした俺は、リボンを直すフリをした。

　そう、フリだ。リボンは曲がってなんかいない。

　リボンを直すフリをしつつ、ありすの耳元に口を寄せた。

「家に帰ったら、お姉ちゃんはありすだけのものだからね」

　そう囁くと、ありすを見てにっこりと笑った。

「これでよし。はい可愛い」

そう言ってありすのリボンから手を離す。

頬を染めてぼーっとしているありすは、ハッとするとビシッと親指を立てた。

よしよし、気合いが入ったようだ。

◆

学校に到着すると、校門に人だかりができていた。

百合園さんが何かやっているのか。

そう思って人だかりに近寄った。

「あまねさんだ！」

「本物が来たよ！」

俺に気付いた生徒が声を上げ、人だかりが割れた。

人だかりが割れたことで現れた“それ”を目にし、白目を剥きそうになった。

俺が立っていたのだ。

正確に言うと、校門の横に俺の等身大パネルが立てられていたのだ。

制服を着ている俺がにっこりと笑っていて、吹き出しが付いている。

その拭き出しには、「おはよう。今日も一日頑張ろうね」と書かれていた。

百合園さんの仕業だろうけど、こんな物どうやって作ったんだ。無駄にクオリティーが高いぞ。

「あのパネル欲しいよね」

「あのパネルを部屋に置けば、毎朝あまねさんから元気をもらえる」

「欲しいけど、けっこう大きいから持って帰ろうとしたら見つかっちゃうよ」

「強硬手段に出る男子がいそう」

「それだけは阻止しないと。たとえパネルでもあまねさんを穢されるのはイヤだよね」

ヒソヒソと会話を交わす女子生徒たちと、耳まで真っ赤にしてビクッと震える男子達。

た、確かに、あのパネルを男子が持ち帰り、変なことに使われたらちょっと嫌だ。

「くっ、私もちょっと欲しい……」

俺の隣に立っているありすが悔しそうに呻きを上げて呟いている。

ありすよ、あんなパネルを家に置かれても困るぞ。

ていうか、お前は本物を独占できるんだから、あんなパネルを欲しがるんじゃない。

◆

等身大パネルを校門の横に放置し、ありすの手を引いて昇降口に向かう。

誰かに持っていかれて変なことに使われるのは嫌だけど、だからって持って帰りたくもない。

ありすはパネルを放置したくなかったようだけど、持って帰ると駄々を捏ね出す前に強引に連れて来てしまった。

家にあんなモノを置いていたら、とんだナルシストだと思われてしまう。

ていうか、放っておいても風紀委員辺りがどうにかしてくれるだろう。

「ん？」

昇降口のそばに人だかりができていて、嫌な予感がした。

その予感は見事に的中することになった。

昇降口の横に、また俺の等身大パネルがあったのだ。

しかも今度は保母さんのコスプレをした俺である。

そしてまたもや吹き出しがあり、「あまねお姉ちゃんママだよ。お姉ちゃんママと一緒に頑張ろうね」とか書かれている。

「ママ……」

「お姉ちゃんママ……」

「ああ、あああ、あああああああ……」

保母さんのコスプレをした俺のパネルを見つめる大勢の生徒達は、まるで熱にうなされているような声を上げている。

怖いよ。

ていうか本物がここにいるのに、みんなパネルにくびったけだ。

「あれは放置できない！　あれだけは絶対に放置できない！」

そう叫んで駆け出そうとしたありすを背後から抱き締めた。

だからあんなモノを持って帰るわけにはいかないんだってば。

「ダメ！　あれはダメ！　あれだけは持って帰る！」

叫びながらジタバタと暴れるありす。

校門の横にあったパネルの時と違い、今回のありすは我を失っている。

このままだとアレを持って帰ってしまう。

それだけは阻止しなければ。

仕方がない。こうなったら――。

「い、家に帰ったら保母さんのコスプレをしてあげるから。それで膝枕しながら耳掃除してあげる」

そうありすの耳元で囁いた。

ピタッと動きを止めたありすは、耳まで真っ赤にさせてへらりと笑った。

ふぅ、どうにかなったようだな。

しかし百合園さんも厄介なモノを作ってくれたもんだ。

早急に対処してもらえるよう、風紀委員長に直接お願いした方がいいかもしれない。

その前に、これ以上パネルが増えないよう、百合園さんを捕獲した方がいいか。

◆

へらへらと笑っているありすの手を引き、百合園さんのクラスに向かった。

スマホで電話をかけてみたけど、どうやら電源を切っているらしい。

俺がパネルを見たら電話をかけてくると予測し、あらかじめ電源を切っておいたのだろう。

教室にいればいいけど、いなかったらどこを探せばいいのやら。

そう思い、溜息を漏らしていたら——。

「……おいおい」

廊下を埋め尽くすほどの大勢の生徒。

二年生はおろか、一年生や三年生も集まっているようだ。

百合園さんがまたパネルを設置したのか。しかしこの騒ぎを見るに、今度はいったいどんなパネルを設置したのか。

とっても嫌な予感を覚えつつ、ありすの手を引きながら人混みの中を縫うように歩き、騒ぎの中心へと向かった。

騒ぎの中心とおぼしき場所は俺のクラスだった。

聞こえる鼻歌。

大勢の生徒でごった返している教室の中、ポッカリと開いた空間に百合園さんがいた。

鼻歌を口ずさみながらパネルを設置している百合園さん。

そんな百合園さんから一定の距離を置き、顔を真っ赤にして見守っている生徒達。

百合園さんが設置しているのは三つのパネル。

腕を組んでツンとした顔をしているありすと、満面の笑みを浮かべてピースをしている百合園さん。そしてにっこりと笑っている俺。そんな三人のパネルだった。

しかも、しかもだ。三人とも水着姿だった。

ありすは白いスクール水着で、百合園さんは紺色のスクール水着。そして俺はパレオ付きの水着。

海に行った時に撮影したのか。

でも俺はずっとパーカーを着ていたはずだ。

もしかして水着を買った時か。試着した時に撮影したんだろうか。

とにもかくにも水着姿のパネルはヤバいだろ。

周囲を見回したけど、高梨さん達の姿は無い。

まだ登校していないのか、登校はしているけど生徒が集まり過ぎて教室にたどり着けないでいるのか。

どちらにしろ見られなくてよかった。

俺の水着姿をパネルにして晒しているなんて知ったら、本気でキレそうだからな。

ていうか、ありすが真っ赤になってブルブルと震えている。そしてこめかみに浮き上がっている極太の血管。

まずい。ありすがキレかかっている。

「ちょ――」

「通してください」

百合園さんを止めようと思ったその時、柔らかいながらも凛とした響きを持つ声が聞こえた。

振り返ると――。

人混みを掻き分けて道を作っている副会長。その後ろを生徒会長が歩いて来る。

「百合園アリスさん。何をやっているんですか」

俺の隣で立ち止まった会長が、普段よりも低い声で百合園さんに問いかけた。

会長に声をかけられた百合園さんは、満面の笑みを浮かべて会長を見た。

「みんなに元気になってもらうために用意しました！」

そう無邪気に答える百合園さん。

溜息を漏らした会長は――。

「いい加減にしなさい」

普段の柔らかな印象とかけ離れた怒りに満ちた表情と声。

ビクッと震えた百合園さんは、顔を青ざめさせて引き攣った笑みを浮かべた。

「ほんといい加減に――むぐっ」

会長に続いて声を上げようとしたありすだけど、そのありすの口を手で押さえ

た。

　ありすは気付いていないようだけど、これは――。

「百合園アリスさん。これまであなたに再三注意してきましたが、どうやら注意だけでは意味が無いようですね」

　静かながらも怒りに満ちた会長の言葉を聞き、確信した。

　これは百合園さんの作戦だ。

　これまで騒ぎを起こしてきた罰として、生徒会の仕事を手伝うと言うのが作戦だった。

　百合園さんはその作戦をさらに完璧なものにするために、会長の堪忍袋の緒を切る理由を作ったんだ。

「あなたに罰を与えます。あなたの監視も兼ね、生徒会の仕事を手伝ってもらいます」

　その会長の言葉に、あわあわと慌てふためく百合園さん。そしてチラリと横目で俺を見る会長。

　会長からの合図だ。

「ありす、これは百合園さんの作戦だ」

　そうありすの耳元で囁くと、ありすがハッとした。

「ちょっと待ってください！」

　ありすの口から手を離し、百合園さんを背にして立った俺は、会長と向き合った。

　作戦を発動するなら前もって教えて欲しかったけど、こうなったらやるしかない。

「すみませんでした！　私がちゃんと言い聞かせておかなかったのが悪いんです！　今度からきちんと言い聞かせますので、今回だけは許してもらえません

か！？」

　そう会長に向かって声を張り上げると、会長は溜息を漏らした。

「これまで何度も注意してきました。ですが更生する気配がありません。彼女のためにも生徒会が責任を持って指導します」

　止めに入った俺を説得する会長。

「だったら私も一緒に罰を受けます！　私が甘すぎるのも原因です！　だから私にも指導してください！」

　その俺の言葉に会長は目を閉じた。そして溜息を漏らすと目を開けて俺を見た。

「わかりました。では後ほど百合園さんと一緒に生徒会室に来てください」

　そう言って踵を返す会長。

「それぞれの教室に戻ってください！」

　それまで黙っていた副会長が声を張り上げ、会長が歩き出した。その会長に続いて副会長が歩き出し、二人は教室から出て行った。

「ご、ごめんなさいです……」

　俺に近寄って来た百合園さんが、申し訳なさそうに謝った。

　そんな百合園さんの頭を撫でながらありすを見ると、プックリと頬を膨らませている。

　ありすがちょっと怒っているけど、どうにか上手くいった……のかな。

　そう思っていたら制服のポケットに入れておいたスマホが振動した。

　確認すると会長からのメッセージだった。

　――突然の作戦発動で驚きました。できれば事前に聞いておきたかったです。でも上手くいってよかったです。

　そのメッセージの内容を見て驚いた。

　てっきり会長と百合園さんで打ち合わせをしていたと思っていたけど、会長も知らなかったのか。

　とそこでハッとした。

　百合園さんは誰にも話さずに勝手に騒ぎを起こした。

　俺達は知らなかったんだ。

　百合園さんはもしもの時のことを考え、責任の全てを自分が被るつもりで騒ぎを起こしたんじゃないのか。

　もしそうだとしたら――。

「おバカさん」

　そう言って百合園さんの頭をコツンと叩いた。

　百合園さんなりにみんなを守ろうとしたんだろうな。

　たとえ隠しても、百合園さんだけに責任を負わせるはずがないだろ。

　知っていた方が色々と対処できるんだから、ちゃんと言いなさい、まったく。

　その後、パネルを撤収する際、制服姿の俺のパネルと保母さん姿の俺のパネル、それに水着姿の俺のパネルの盗難騒ぎが起きた。

　犯人はすぐに捕まり、パネルを無事回収できたようだけど、犯人が捕まってしまった原因は、俺のパネルを複数の男子生徒が奪い合い、ケンカになってしまったために見つかってしまったようだ。

　中でも保母さん姿の俺のパネルの奪い合いが熾烈だったらしい。

　ありすや百合園さんの水着姿のパネルもあったのに、なんで俺のパネルを奪い合うかな。

　理解に苦しむ。

女の子になったら修羅場だった件 - 第七十六話　見えそうで見えないのは裸よりもエッチだと思う件

「また百合園さんが騒ぎを起こしたみたいだね」

　朝のホームルームが終わり、俺の席へとやって来た高梨さんが溜息交じりに呟いた。

「凛ちゃんね、昇降口の横にあったあまねお姉ちゃんママのパネルを見て動かなくな――」

「わー！　わー！　わー！」

　高梨さんの隣に立っている砂庭さんがにこにこと笑いながら声を上げ、焦った高梨さんが砂庭さんの声を掻き消そうとしている。

　朝、高梨さん達の姿が無かったけど、昇降口の横のパネルで足止めを食らっていたらしい。

「べ、別にやましい思いは無いし！　親友の等身大パネルがあったら気になって見るのは普通だし！」

　開き直ったのか、腕を組んで声を上げた高梨さんは、ふんっと鼻を鳴らした。

　そんな高梨さんの耳は真っ赤だ。

　とても可愛い。

　それはそうと、昇降口の横にあったパネルだけど、今現在、教室の後ろに置いてある。

　教室に自分の等身大パネルが置いてあるって、けっこうな罰ゲームだよなぁって思う。

　それはともかく、生徒会が回収したパネルの一つであり、もっとも熾烈な奪い合いを起こさせた曰く付きのパネルが、なぜ教室の後ろに置いてあるのか。

　それは――。

「良い物をもらったなあ！」

　俺の膝の上に座り、足をパタパタさせている夜乃宮さんが嬉しそうに声を上げた。

　そう、夜乃宮さんがパネルを持って来てしまったのだ。

　生徒会が回収したはずなのに、どうやって持って来たのか。

「そ、ソラ、本当にあのパネルを持って帰るの？」

　ソワソワした様子で夜乃宮さんに問いかける高梨さん。

「うん！　気に入ったからな！」

　屈託の無い笑みを浮かべて大きく頷く夜乃宮さん。

「そ、そっかぁ……」

　夜乃宮さんの答えを聞き、残念そうに呟く高梨さん。

　高梨さんも欲しいのか。

　俺はむしろ高梨さんのパネルが欲しい。

　百合園さんにお願いすれば作ってくれそうだけど、高梨さんが俺の家に遊びに来て、もしパネルを見られたらと思うと躊躇してしまう。

「それはそうと、百合園さんと一緒にあまねも生徒会長から呼び出しを受けたんだって？」

　高梨さんの問いかけに、来た、と思った。

　大騒ぎになったから、情報がスムーズに高梨さんに伝わったようだ。

「百合園さんが起こした騒ぎなのに、なんであまねも呼び出されるのよ」

　納得できないと言った様子で呟く高梨さん。

「私が一緒に行くって言ったんだよ。百合園さんの面倒を見るのは私の役目だし、百合園さんが騒ぎを起こしたら私にも責任があるから」

　胸に痛みを覚えながら高梨さんに説明した。

　百合園さんが望んだこととはいえ、友達を利用するのはやっぱり気が引ける。

「あまねが責任を負う必要は無いじゃない」

　そう言った高梨さんは、少しムッとしているようだ。

「と言ってもあまねの性格を考えると放っておけないよね。まったく、百合園さんも困った子だね。最近少しマシになったと思ってたのに」

　顔をしかめて呟く高梨さん。俺を巻き込んだ百合園さんに呆れつつ、怒っているようだ。

　作戦通りなんだけど、俺達のために頑張ってくれた百合園さんのことを考えると胸が痛くなる。

　百合園さんは恩を売りっぱなしにするって言っていたけど、やっぱり何かお礼をしないとなぁ。

「あまね、私も一緒に会長の所に行こうか？」

　高梨さんに問いかけられてドキッとした。

　今高梨さんを会長に会わせるのはよろしくない。

　高梨さんは、百合園さんの起こした問題なのに俺まで呼び付けた会長に不服を申し立てるつもりだろう。

　会長なら上手く立ち回ってくれると思うけど、肝心の高梨さんが怒っていると話が纏まらないだろうし、しかも会長も引くことができない。

会長が引いてしまうと、生徒会と俺の繋がりが切れてしまうからな。

そうなると高梨さんと会長の関係が悪い方に転んでしまうかもしれない。

高梨さんを会長に会わせるのは、俺がある程度生徒会で活動してからだ。

俺を手伝うために会長に会う形になってくれればベストなんだけど。

「私も一緒に行ってやる！　そして会長にあまねを怒るのはおかしいってビシッと言ってやる！」

そう声を張り上げた夜乃宮さんに、これはまずい、と思って焦った。

本人が言っている通り、夜乃宮さんなら会長に向かって直球ストレートをブン投げるだろう。

どこまでも真っ直ぐだからこそ、会長も困ってしまうと思う。

「大丈夫。今回は百合園さんと二人で行くよ。大人数で行ったら会長もかまえちゃうかもしれないし」

ドキドキしながらそう高梨さんと夜乃宮さんに伝えると、二人とも「そっか」と声を上げた。

納得できない様子の二人だけど、俺の意見を優先してくれるようで助かった。

とそこで、砂庭さんが黙っていることに気が付いた。

砂庭さんを見ると、にこっと笑って首を傾げている。

この人は要注意だ。俺の心を読むからな。

◆

昼休みになり、会長に会うために百合園さんと一緒に生徒会室に向かった。

ちなみにありすは高梨さん達と弁当を食べることになっている。

高梨さん達が俺を心配して生徒会室に来てしまうと困るからな。

　そうならないよう、ありすが高梨さん達を安心させるために残ってくれたのだ。

「職員室で一時間正座させられました……」

　俺の隣を歩いている百合園さんが、溜息交じりに呟いている。

　騒ぎを起こした百合園さんは、先生からお説教を受け、正座させられていたようだ。

「ご、ごめんね。大変だったね」

　心が痛むのを感じながら百合園さんに問いかけた。

「はい、とてもとても大変でした……」

　そう言って、ふぅと大きな溜息を漏らす百合園さん。

　うう、ほんとごめんねぇ。

「くっ」

　突然顔をしかめた百合園さんが、呻きを上げながら中腰になった。

「ど、どうしたの！？　大丈夫！？」

　百合園さんの手を取り、その手を肩に回して百合園さんを支えながら問いかけた。

「せ、正座しすぎて……右の膝が……」

　顔をしかめ、息を荒らげながら呟く百合園さん。

「ほ、保健室に行こう！」

　そう言ったものの、膝が痛い百合園さんを歩かせるわけにはいかない。

「お、おんぶ！　おんぶするよ！」

　おんぶすれば百合園さんは歩かなくて済む。そう思い、百合園さんの手を離

し、前に回り込んでしゃがもうとした。

「保健室には行きません。痛いの痛いの飛んで行け、をしてもらうと治りますから」

　顔をしかめて痛そうにしていた百合園さんが、キリッと表情を引き締めて流暢に喋っている。

　しかも痛いの痛いの飛んで行けをすれば治るとか。

　……嘘か。

　いや、たとえ嘘でも百合園さんには大きな借りがあるんだ。

「痛いの痛いの飛んでいけをすれば治るの？」

「はい、治ります」

　俺の問いかけにキリリと表情を引き締めて迷い無く頷く百合園さん。

　それで百合園さんの気が済むなら、痛いの痛いの飛んで行けくらいいくらでもやるよ。

　そう思い、百合園さんの前にしゃがんだ俺はハッとした。

　目の前に見える雪のように白い太もも。

　焦って顔をそらした。

　撫でなきゃならないのか、百合園さんの膝を。

「どうしたのですか？」

　聞こえた声に百合園さんを見上げ、焦って顔をそらした。

　胸が。下から見上げると百合園さんの胸はけっこう凄い。

　イリスさんの登場で胸の大きさランキングは二位から三位に降格してしまった百合園さんだけど、上の二人が別格なだけで、百合園さんも十分凄いんだ。

「あまねさん？　顔がまっかっかですよ？」

百合園さんの問いかけにドキッとした。

確かに顔が熱い。

どうしよう。どうしたらいいかわかんない。

「もしかして……私に興奮しているのですか？」

どこか挑発的な百合園さんの問いかけに、心臓が破裂しそうなほど脈打った。

否定しないと。じゃないと変態だと思われてしまうかもしれない。

「ち、ちが――っ！？」

否定しようと百合園さんを見上げようとしたら、目の前のスカートがスススッと持ち上がった。

百合園さんが自分のスカートを持ち上げているのだ。

スカートが持ち上がるほどに、雪のように白い太ももが露わになってゆく。

見ちゃダメだ。そう必死に自分に言い聞かせても、視線をそらすことができない。

ゴクリと唾を呑み込み、その音がやけに大きく感じ、耳が燃えるように熱くなった。

キャンプに行った時、温泉で百合園さんの裸を見たのに。それなのに、ギリギリまでスカートを持ち上げている百合園さんの姿に、俺は興奮してしまっている。

「もっと上を見ますか？　あまねさんが見たいと言うのなら、私はかまいませんよ？」

聞こえる百合園さんの声。

これ以上はダメだ。本当にダメだ。

「なにやってんのよ」

　突然聞き慣れた声が響いた。

　次いで――。

「あいたっ」

　スッパーンッと何かを叩くような音が響き、百合園さんが持ち上げていたスカートがファサッと降りた。

「廊下の真ん中でスカート持ち上げてなにやってんのよ。バカなの？　変態なの？　ああ、バカで変態だったね、そう言えば」

　腕を組み、ジト目で百合園さんを見ながら呆れたように声を上げるありす。

　思わず泣きそうになってしまった。

　ありす、来てくれてお兄ちゃんほんと助かったよ。

「私の太ももを見たあまねさんがまっかっかになったのです。もしかして私に興奮しているのかと思い、なら下着でも見せてみようかと思ったのです」

　自分の後頭部を撫でながらありすに答える百合園さん。その言葉を聞き、恥ずかしくて死にそうになった。

　百合園さんが言っていることは事実だ。

　俺は百合園さんの太ももを見て、そしてスカートを持ち上げる姿を見て、興奮しました。

「お姉ちゃんがあんたに興奮するわけないでしょ。あんたのバカな行動を見て恥ずかしくて顔が赤くなっただけだよ」

「ああ、なるほど」

　ありすの言葉に納得したように頷く百合園さん。

「私はあまねさんの下着を見たら興奮しますけどね。というか、あまねさんを見た

だけで興奮します。あ、いえ、あまねさんを想像しただけで興奮しますね」

「これだからお姉ちゃんとあんたを二人きりにさせたくないんだよ」

とんでもないことを平然と口にする百合園さんに、ジト目のありすが溜息交じりに突っ込みを入れている。

ありすのお陰でうやむやになって助かった。ありすが来てくれなかったらどうなっていたことか。

「た、高梨さん達は？」

その場に立ち上がり、そうありすに問いかけた。

ありすは高梨さん達を安心させるために残ってくれたんだ。でもこっちに来てしまった。

「くうちゃんがね、今日は教室でお弁当を食べるって言い出して、お姉ちゃんのパネルを席の近くに持って来たの。お姉ちゃんと一緒にご飯を食べるんだって。それで凛ちゃんはお姉ちゃんのパネルに釘付けで、これならこっちに来ても大丈夫かなって思ったの。で、来ちゃった」

俺に説明してくれたありすが、えへへと照れたように笑っている。

なるほど、パネルか。まさかあのパネルが役に立つとは。

そのパネルを教室に持って来た夜乃宮さんに感謝だな。

「パネルは私の物なのですが、一枚も返ってきません」

そう言ってしゅんとする百合園さん。

一枚は夜乃宮さんの手に渡ったけど、残り四枚はどこにあるんだろうか。

生徒会が回収したって言うのは聞いたけど、どこに保管したのかは聞いていない。

ありすが見たら家に持って帰るって言い出しそうだし、できればありすの目の届かない所に保管して欲しい。

そんなことを思いつつ、ありすと百合園さんと一緒に生徒会室に向かった。

女の子になったら修羅場だった件 - 第七十七話　筋肉は男の憧れな件

　生徒会室に到着すると、入り口の扉のそばに数人の男子生徒が立っていた。その男子生徒達の中に副会長もいる。

　何かあったんだろうか。

「こんにちは」

　男子生徒達に近寄って声をかけた。

「あまねさん。お疲れさまです」

　メガネを指でクイッと上げ、挨拶を返してくれた副会長が、相変わらず礼儀正しくスッとお辞儀をした。

「こ、こんにちは……」

　副会長の隣に立っている男子生徒が、耳まで赤くさせながら震える声を上げ、ぎこちない動きでお辞儀をした。

「ふわぁ」

　思わず声を上げてしまった。

　見上げなければ顔が見えないほど高い身長と、副会長三人分はあるんじゃないかと言う大きく逞しい体。

　話したことは一度も無いけど、顔は知っている。柔道部の主将で体育委員長の大山先輩だ。

　他にも男子生徒が数人いて、緊張した面持ちで俺にお辞儀をしている。

　話したことは無いけど見たことがある顔ばかり。

全員委員会の委員長だ。

どうして委員長達が集まっているのか。そしてどうして生徒会室の前に立っているのか。

委員長が集まっている割に、女子生徒が一人もいない。

風紀委員長と図書委員長と保健委員長は女子だけど、いないようだ。

「なにかあったんですか？」

そう副会長に問いかけた。

「会長が全委員長に召集をかけまして。ですが、その……」

メガネを指でクイクイと上げながら、困ったような顔で話す副会長は、言いづらそうに口ごもっている。

「そ、その……我らは中に入りづらいのです」

副会長と同様に、困り顔で声を上げる大山先輩。

中に入りづらい？　中で何かやっているのかな？

「会長に用があるんですけど、私もここで待っていた方がいいですか？」

「い、いえ、あまねさん達は入っても問題ありません」

俺の問いかけに答えてくれる大山先輩。

俺達は入ってもいいのか。

もしかして会長が着替えをしているとか？　俺は見た目は女だから問題無いってことだろうか。でも中身は男だから問題あるけど。

問題無いって言っているのにしつこく聞くと怪しまれそうだし、だからって中に入って会長が着替え中だったら困る。

着替えならすぐに終わるだろうし、不審に思われない程度にここで時間を潰す

か。

「あはは」

とりあえず大山先輩を見上げて笑ってみた。

しかし大きな人だ。こんなに近くで見たのは初めてだけど、凄い迫力だな。

百九十センチ以上ありそうな身長に加え、プロレスラーのように逞しい体つき。

俺なんか小指一本でぺしゃんこにされてしまいそうだ。

でも怖い感じは無い。顔つきはとても優しそうだ。

体育会系の人だから厳しいとは思うけど、大山先輩は自分に厳しく人に優しくを体現したような人だ、という噂話を何度も聞いたことがある。

「柔道の練習って大変ですよね」

そう大山先輩に問いかけると、耳まで真っ赤にしている大山先輩が、困り顔で頭を掻いた。

「そ、そうですね。大変だとは思いますが、自分は柔道が好きですので……」

頭を掻きながら困り顔で話す大山先輩は、声が震えている。

緊張しているようだ。

あまり話しかけると困らせちゃいそうだな。でも色々と聞いてみたい。

「ち、力こぶが凄そうですよね」

好奇心に負け、問いかけてしまった。

「ち、力こぶですか？」

困惑したような顔で問い返してくる大山先輩。

「あ、あの、これ、これです」

　そう言って右手の肘を曲げ、二の腕を指さした。

「あ、あはは。私は無いですけどね」

　男だった頃はちょっとあったんだけど、今は力を込めてもあまり硬くならない。

「あ、ああ、上腕二頭筋のことですね」

　そう言った大山先輩は――。

「ふんっ」

　鼻息を荒らげた大山先輩が、顔を真っ赤にしながら右肘を曲げた。

「ふわあ！」

　メリメリッと音が聞こえてきそうなほど盛り上がる二の腕。制服が破れてしまいそうだ。

「す、凄い！　カッコいいですね！」

　あまりの凄さにテンションが上がってしまう。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

　顔を燃えるように真っ赤にさせた大山先輩が、咆哮を上げながらビキッとこめかみに極太の血管を浮き上がらせた。

　ただでさえ巨大だった大山先輩の体が、メキメキと膨張してゆく。

「ふわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

　凄い凄い。制服が弾け飛んでしまいそうだ。熊と戦えるんじゃないのかこの人。

「ちょ、ちょっと触ってみてもいいですか！？」

「ご、ご自由に！　お好きなようにしてください！」

俺の問いかけに真っ赤な顔で答える大山先輩。

そんな大山先輩の胸元に向かってそーっと手を伸ばした。

胸筋を触ってみたい。

ところが、伸ばしていた手をパシッと掴まれた。

見ると引き攣った笑みを浮かべているありすが俺の手を掴んでいる。

「お、お姉ちゃん、ちょっと落ち着こう」

そうありすに言われ、ハッとして周囲を見回した。

「せいっ！」

「ぬうっ！」

「うおおおおおおおおおおおおっ！」

他の男子生徒達が声を張り上げながらボディビルダーのようにポーズを決めている。

副会長も「ふんはっ！」とか言いながらポーズを取っている。

「お姉ちゃんが筋肉好きだなんて話が広まったら、学校中の男子生徒が筋トレを始めちゃうよ」

俺の耳元に唇を寄せてヒソヒソと話すありす。

「ご、ごめん……」

体は女だけど俺も男の端くれだし、逞しい体には憧れてしまう。それで大山先輩の規格外の筋肉を見てつい夢中になってしまった。

「私だって脱ぐと凄いのです！」

声が響き、嫌な予感を覚えながら視線を向けると、百合園さんが制服を脱ごうとしていた。

「うわあああああ！　ダメダメダメダメ！」

　焦って百合園さんに駆け寄ると、百合園さんを押さえ付ける。

「離してください！　あの大男より私の胸の方が肉厚です！　それをあまねさんに見せるのです！」

　ジタバタと暴れながら叫ぶ百合園さん。

　脱ぐと凄いのは知ってるし、脱がなくても十分凄いから。

「落ち着け」

　スッパーンッと百合園さんの頭を叩いたありすがジト目で呟いた。

「うるさいです！　貧乳は黙ってください！　飛び跳ねても碌に揺れないクセに！」

　その百合園さんの叫びに、ありすのこめかみにビキッと血管が浮き上がった。

　ゆ、百合園さん。それ絶対に言っちゃダメなヤツだよ。

「ケンカ売ってんのかお前ええええええええええええええ！」

　廊下に響き渡るありすの怒声。

　ボディビルダーのようにポーズを決めていた男子生徒達が青ざめた顔で項垂れる中、百合園さんはありすからフルボッコにされました。

　◆

　両頬を腫らして涙目になりながらプルプルと震えている百合園さん。

　ほんとごめんなさい。俺が余計なことをしたばっかりに。

　ありすはと言うと、がるるるるっと唸りながら百合園さんを睨んでいる。

　まだ怒っているようだ。

ありすの唸りに怯えるように、俺の背後に隠れてプルプル震えている百合園さんが俺のお尻を撫でている。

怯えたフリをして俺にセクハラしているけど、やめろなんて言えない。

なにせ百合園さんは俺のせいでフルボッコにされたんだし。

百合園さん、ありすに知られたらまたフルボッコにされるから、見つからないようにね。

それはそうと、もし会長が着替えをしていたとしても、けっこう時間を潰したし、さすがにもう大丈夫だろう。

そう思いながら生徒会室の扉を開け、視界に映った光景に白目を剥きそうになった。

「ああ、あまねちゃん、いらっしゃい」

自分の席に着いてお茶を飲んでいた会長が、俺を見てにっこりと笑いながら声を上げた。

そんな会長を挟むように設置された制服姿の俺のパネルと水着姿の俺のパネル。

そして長テーブルの所にあるパイプ椅子に座っている女子生徒達。そのそばには水着姿のありすと百合園さんのパネルが置いてあった。

なんだこれは。なんなんだいったい。

大山先輩が中に入りづらいって言っていたけど、俺達の水着姿のパネルがあるからだったのか。

「あ、あの、そのパネル――」

「あまねちゃんも来たので、話し合いを始めましょうか」

俺の問いかけを遮るように声を上げる会長。

「あの、パネル――」

「そうですね会長」

　パイプ椅子に座っている女子生徒の一人が、俺の問いかけを遮るように声を上げた。

「パネ――」

「ではあまねちゃん達も座ってください」

　俺の問いかけを遮るように会長が声を上げたことで確信した。

　パネルのことは知らんぷりするつもりだ、この人達。

「私とバカのパネルなんてどうだっていいけど、お姉ちゃんのパネルは持って帰る」

　そのありすの言葉に頭を抱えたくなった。

　こうなるからありすに見せたくなかったのに。

「ありすさん、腹を割って話し合いましょう」

　立ち上がった会長が、キリッと表情を引き締めながら声を上げた。

　俺の話は知らんぷりで通そうとしていたのに、なんでありすの話はちゃんと聞くんだ。

　ていうか、俺はここに何しに来たんだっけ。なんだかよくわからなくなってきた。

女の子になったら修羅場だった件 - 第七十八話　妹様のご機嫌を窺うのが肝心な件

　パネルのことで揉めに揉めると思ったら、すんなりと解決してしまった。

「パネルは百合園アリスさんに返却します」

　その会長の言葉に、ありすは不服そうな顔をしたものの、何も言わなかった。

　パネルはそもそも百合園さんが持って来た物だからな。

　持ち主に返すと言われてしまったら、そりゃあ何も言えないだろう。

「あは！」

　嬉しそうに笑う百合園さん。

　よかった、本当によかった。パネルを家に持って帰られたらどうしようと思って本気で困っていたんだ。

「つきまして、百合園さんにお願いしたいことがあるのですが」

「お願いですか？」

　会長の言葉に首を傾げる百合園さん。

「文化祭に向けて、水無月あまねと二大美少女の等身大パネルの制作を依頼したいのです」

　その会長の言葉に頭を抱えたくなった。

　やけにすんなりパネルを手放したと思ったら、百合園さんに新たなパネルの制作を依頼するとか。

しかも文化祭に向けてって……。

会長は俺らのパネルを客寄せパンダにでもするつもりなの――。

「あっ！」

思わず声を上げてしまった。

俺達を客寄せパンダにするとして、寄って来る客の中にあの人がいたら。

「ふふ、どうやらあまねちゃんは気付いたようですね」

楽しそうに笑った会長は、そう言って立ち上がった。

「この度の百合園さんが起こした騒動は、水無月あまねと生徒会による自作自演である、と言うことはすでに全委員長に伝えてあります。その目的も」

その会長の言葉に、パイプ椅子に座っていた女子生徒達が一斉に立ち上がった。

風紀委員長、図書委員長、保健委員長の三人だ。

「水無月あまねさんと手を組み、高梨凛花さんを次期生徒会長候補として生徒会に引き入れる。その考えにほとんどの委員長はすぐに同意してくれました」

そう言って、会長はチラリと風紀委員長を見た。

会長にチラ見され、やれやれといった様子で溜息を漏らす風紀委員長。

風紀委員長は高梨さんを生徒会に引き入れる作戦に反対していたのか。

「高梨凛花にはぜひとも風紀委員会に入ってもらいたいと思っていたんだが、仕方がないだろう。会長の考えに同意する」

溜息交じりにそう言った風紀委員長は、会長を見てフッと笑った。

風紀委員長の笑みを見て頷く会長。

風紀委員長は高梨さんの能力に疑問を持って反対していたわけではなく、

風紀委員会に入って欲しいと思っていたから反対していたのか。

　高梨さんはモテモテだなぁ。

　それがたまらなく嬉しい。

　ていうか、高梨さんは風紀委員も似合いそうだな。

　俺も高梨さんから風紀の乱れを正されたいかも。

　それはともかく――。

「風紀委員長、ありがとうございます」

　立ち上がった俺は、風紀委員長にお礼を言いながら頭を下げた。

「あ、いや、私以外、皆すぐに会長の話に同意したのです。私は駄々を捏ねて皆に迷惑をかけただけですから、礼を言われるようなことは――」

「そうではなくて」

「え？」

　俺の言葉に風紀委員長が首を傾げた。

「高梨さんのことを高く評価してくれて、ありがとうございます」

　そう言って再度頭を下げた。

「あ、いや、そんな……」

　耳まで真っ赤にさせながら、指で頬を掻く風紀委員長。

「図書委員長と保健委員長も、すぐに同意してくれてありがとうございます」

　続けて図書委員長と保健委員長にもお礼を言った。

　照れたように頬を染めてペコペコと何度も頭を下げる図書委員長と、にっこりと笑って俺に手を振っている保健委員長。

あとで男子の委員長達にもお礼を言っておかないとな。

「ふふ、どうですみなさん。これが水無月あまねです」

得意気に声を上げる会長。

「そうですね。会長が言っていた通り、あまねさんは生徒会長には向いていませんね」

にっこりと笑いながら声を上げる保健委員長。その言葉を聞きコクコクと何度も頷いている図書委員長。

会長が言っていた通り？

そう思って会長を見た。

「高梨さんが高く評価されていることを知り、まるで自分のことにように喜び、みんなにお礼を言う。そんなあまねさんを神輿として担ぎ上げても、きっと上手くいきませんよね」

その保健委員長の言葉に会長が大きく頷いた。

「高梨さんの話をするまで、あまねさんを次期生徒会長候補に、という意見が多かったんです。でも私はその意見に反対していました。水無月あまねは人の上に立つことで輝くタイプではなく、誰かを支えることでその真価を発揮するタイプです、と何度も説明していたんですよ」

へぇ、そうだったのか。俺を次期生徒会長にって意見が多かったんだな。でも会長が反対してくれていたのか。

助かった。俺は人の上に立てるような性格じゃないし、その能力も無いからな。

「そんなの私は最初から知ってたけどね。お姉ちゃんは誰かのためを思ってる時が一番輝いてるんだから。そんなお姉ちゃんは私を可愛がってる時が一番綺麗で可愛いの。だってお姉ちゃんは私のことが世界で一番好きだから」

偉そうに話したありすが得意気にふふんと鼻を鳴らした。

　そんなありすの話を聞き、会長や保健委員長がクスクスと笑っている。図書委員長はと言うと耳を真っ赤にさせてコクコクと何度も頷いている。

　ありすよ、そんな恥ずかしいことをよく偉そうに言えるな。

「いたっ」

　顔をしかめて痛がるありすと、プイッと顔をそらしてプクッと頬を膨らませる百合園さん。

「なんで太ももを抓るのよ！」

　百合園さんに向かって怒声を上げるありす。

　どうやら百合園さんがありすの太ももを抓ったようだ。

「知りません。きっと妖怪太もも抓りが現れたのです」

　顔をそらしたまま、犯人は妖怪太もも抓りだと言い張る百合園さん。

「はあ？　バッカじゃないの？」

　子供染みた言い訳をしている百合園さんに、呆れたような顔で声を上げるありす。

　ありすはわかってないなぁ。百合園さんはありすにかまってもらいたいんだよ。

　そんなことを思ってほっこりしつつ、ありすと百合園さんの頭を撫でた。

　百合園さんに呆れていたありすだけど、俺から頭を撫でられて一瞬で機嫌が直ったのか、えへへと嬉しそうに笑っている。

　百合園さんはと言うと、恥ずかしそうに頬を染めて俺をチラ見している。

　大丈夫だよ百合園さん。ありすに余計なことを言ったりしないから。

「素晴らしい。やはりこの三人は素晴らしい……」

　真っ赤になりながらも真顔で呟く会長。

「三人の後ろに白百合の花が咲き乱れているのが見えますね」

　続いて保健委員長が声を上げ、図書委員長がコクコクと何度も頷く。

「ふっ、たまらん」

　そしてカッコ良さげに呟く風紀委員長。

『な、中でどんな話をしているんだ』

『あまねさんとダブルアリスの後ろに白百合の花が咲き乱れているようです』

『し、白百合の花って……三人でイチャイチャしてるってことか？』

『でしょうね。それはもうイチャイチャであまあまなんでしょうね』

『み、見たい！』

『なら中に入って見ればいいでしょう。ただし中には三人の水着姿のパネルがありますから、それでも中に入れば大山さんが激怒するでしょうけどね』

『大山が怒ったら怖そうだよなぁ。怒ってるの見たこと無いけど』

『おい大山、赤くなってないでこっち来いよ。声だけでも聞こうぜ』

『大山さんは硬派ですからね。でもああいう人ほど実はムッツリだったりするものです』

『おい副会長、俺はお前を高く評価しているが、たまにブン殴りたくなる』

　扉の外から聞こえてくる複数の男の声。

　副会長達のようだけど、扉に耳でも当てて中の様子を探っているのかもしれない。

「話がそれてしまいましたが、本題に戻ります。百合園さんに制作を依頼したいパネルの件ですが……」

　スッと笑みを消して声を上げる会長。

「今年の文化祭は、あまねさんとダブルアリスの等身大パネルをナビゲーターにしたいと思っています。要所要所に設置して案内用の看板の役割を果たしてもらうのです」

その会長の言葉を聞き、偉そうに腕を組んだ百合園さんがふふんと得意気に鼻を鳴らした。

「そんなの楽勝ですね。最高のパネルを作ってみせます」

「楽勝では困るんですよ」

「え？」

会長の言葉に首を傾げる百合園さん。

「百合園さん、あなたには文化祭の実行委員長に就任してもらいます。副委員長はあまねさん。補佐としてありすさん」

「え？　実行委員長？　私がですか？」

会長の言葉を聞いた百合園さんが驚いたような顔で問い返す。

「文化祭の実行委員長と言うのが今回の騒動に対する罰です。罰と言うのはもちろん表向きの話ですけどね。そしてパネル製作ですが、楽勝では困るんです。制作するのが大変だから、他の生徒に協力してもらうんです。誰に協力してもらうかは、実行委員長である百合園さんに一任します」

「ああ、なるほど。そう言うことですか」

会長の言葉を聞き、その意図を理解した様子の百合園さんが頷いた。

さすが会長、パネルを客寄せパンダにするフリをして、高梨さんを釣るつもりなんだ。

百合園さんが罰として文化祭の実行委員長に就任し、文化祭に向けてパネルを制作する。

でも作るのが大変だから誰かに手伝ってもらわなければならない、と言うことにすれば、高梨さん達に手伝って欲しいとお願いしても違和感が無い。

しかも作るのはありすや百合園さんや俺のパネル。それなら手伝ってくれる可能性が非常に高い。ていうか確実に手伝ってくれると思う。

「文化祭の実行委員を手伝うことで生徒会と関わりを持ち、生徒会に興味を持ってもらう作戦ですね」

そう会長に問いかけると、会長が頷いた。

「興味を持ってもらうのもそうですが、今回の文化祭は特別なものとなるでしょう。なにせ水無月あまねとダブルアリスがナビゲーターになってくれるんですから。きっと過去に類を見ないほど盛り上がると思います。そして大盛況のまま幕を閉じることができれば、高梨さん達も大きな達成感を覚えるはずです」

その会長の言葉に思わず両手を握り締めた。

心の底から湧き上がってくるワクワク感。

ナビゲーターになるのは正直恥ずかしいけど、高梨さん達をその気にできるのなら安いものだ。

それ以上に、高梨さん達と一緒に大きな目的に向かって取り組むと言うのが楽しみでたまらない。

会長が言った通り、大盛況のまま幕を閉じることができれば、きっと一生の思い出になるだろう。

「やりましょう会長！」

そう会長に問いかけると、大きく頷いた会長がありすを見た。風紀委員長や保健委員長、そして図書委員長もありすを見た。

会長と委員長達に見つめられ、ジト目で溜息を漏らすありす。

「たとえパネルでもお姉ちゃんを見世物にするのは正直ちょっと嫌だけど、でもまあ、お姉ちゃんがやる気になってるし、特別に許可してあげる。ほんと特別だからね？　特例なんだから」

そのありすの言葉を聞いた会長がホッとしたように笑みを浮かべた。

委員長達も笑みを浮かべながら頷き合っている。

俺の同意を得るよりも、ありすの同意を得ることに緊張していた様子だ。

まあ、ありすが嫌だと言い張ったら、俺はありすの意志を優先しちゃうだろうからなぁ。

会長はそれを知っていたのかもしれない。

だから会長的には、将を射んと欲すればまず馬を射よ、って感じで、見事に馬を射ることに成功したって所かな。

ありすは馬じゃなくてちょっとわがままだけどとても可愛いお姫様だけどね。

そんなこんなで、パネル問題で一時はどうなることかと思ったけど、話し合いは無事終了した。

◆

生徒会室から出ると、副会長を筆頭とした男子の委員長達が廊下の壁際に整列していた。

みんな顔が赤い。

生徒会室の中の会話を盗み聞きしていたようだけど、別に変なことは何もしていないからね。

「今回の件、みなさんがすぐに同意してくれたと会長から聞きました。ありがとうございます」

男子の委員長達に向かってお礼を言い、頭を下げた。

「お礼を言うのはこちらですよ。会長はずいぶんと以前から高梨さんに惚れ込んでいましたからね。あの子は人の上に立つことで光り輝くタイプだ、と。ですから、あまねさん達の協力を得られるのは、こちらとしても願ったり叶ったりなんです」

メガネを指でクイッと上げながら話す副会長。

その副会長の言葉に頷く男子の委員長達。

とそこで、ありすが副会長の前に立った。

腕を組み、偉そうに踏ん反り返って副会長を見上げている。

焦ったようにメガネをクイクイと指で上げる副会長。

「お姉ちゃんから笑顔で話しかけられたからって、あんまり調子に乗るな」

「き、肝に銘じます」

ありすの言葉に頭を下げて答える副会長。

「でもまあ、あんたはまあまあだよ。そっちの大男もね」

そう言ってふんっと鼻を鳴らしたありすは、俺に近寄ると俺の腕にギュッと抱き着いた。

ふふ、このツンデレめ。

「そこのメガネと大男、お前らみりすに気に入られたみたいですよ。泣いて喜びなさい」

こめかみに血管を浮き上がらせている百合園さんが、副会長と大山先輩を睨みながら声を上げた。

「き、恐縮です」

「み、右に同じく」

青ざめた顔でそう言った副会長と大山先輩が百合園さんに頭を下げた。

百合園さんが珍しく怒っている。

百合園さんは本当にありすのことが大好きなんだなぁ。

「アリスちゃん、おいで」

そう百合園さんに言うと、うるうると瞳を潤ませた百合園さんが、俺に駆け寄ると腕にギュッと抱き着いてきた。そしてありすをチラチラと見ている。

ありすが男子生徒に声をかけたから気が気じゃないって様子だ。

うーん、可愛い。

百合園さんが怒ったことで怯えている副会長と大山先輩に、二人はとっても仲良しなんです、と説明したいけど、そんなことをしたらありすが怒るだろうからなぁ。

青ざめて俯いている二人にはあとで説明するか。

そう思いつつ、二人に向かって頭を下げると、ありすと百合園さんを連れて生徒会室を後にした。

女の子になったら修羅場だった件 - 第八十一話　つまらないモノがつまらなくなかった件

　ありすと一緒に家に帰ると、家の駐車場に車が停まっていた。

「可愛い車だね」

　車に近寄ったありすが、頬を染めながら呟いた。

　乗用車のようだけど軽自動車のように小さい。

　そして新しいようだけど、作りはレトロチックだ。

　俺は車のことに詳しくないけど、そんな俺でも知っている外国製の小型乗用車。

　ありすが言う通り確かに可愛らしい。しかもボディが黄色い。

　気に入りました。

「お母さんのお客さんかな？」

「たぶんそうだろうね」

　ありすに問いかけられ、頷いて答えた。

　◆

　リビングの扉を開け、視界に映った光景に固まってしまった。

　ソファに銀髪の美女が座っていたのだ。

　百合園さんより大人びている銀髪の美女が。

「あ、お邪魔してます」

　俺に気付いたイリスさんが、にっこりと笑って挨拶をした。

「ど、どうも」

　ハッとして挨拶を返す。

　なぜイリスさんが家(うち)に？

「駐車場にあった可愛い車、イリスさんのだったんだ」

　俺の背後からヒョコッと現れたありすが、イリスさんに話しかける。

「あ、はい。普段はあの車を使っているんです。小さいから小回りが利いて便利なんですよ」

　ありすの問いかけに笑顔で答えるイリスさん。

「今度乗せて欲しいな。あの車凄く可愛いし」

　声を上げながらトコトコと歩くありすが、イリスさんの隣に座った。

　ありすよ、なぜ驚かないんだ。

「ありすちゃんと一緒にドライブできたら嬉しいです。ぜひ遊びに行きましょう」

「わーい！　ソフトクリーム食べたーい！」

　イリスさんの答えを聞き、大喜びのありす。

　ありすはいつの間にイリスさんに懐いていたんだ。

「あら、帰って来たのね」

　キッチンから現れた母さんが俺を見て声を上げる。

「あ、うん、ただいま」

リビングの入り口で呆然と立ち尽くしていた俺は、母さんに向かって答えた。

「百合園さんの家に泊まり込むんだってね。学校の行事の関係なんでしょ？　生徒会にでも入るの？　あまねが人前に出ようとするなんて珍しいわね」

お茶が乗ったトレイを持っている母さんは、そう言うとイリスさんが座っているソファへと向かって歩いてゆく。

泊まり込み。学校の行事。生徒会。

母さんにはまだ何も話していないのに知っていて、イリスさんがここにいる。

と言うことは――。

百合園さんめ……。

百合園さんの家に泊まり込む話は今朝したばかりなのに、さっそく動き出したのか。

泊まり込むにはうちの母さんの許可が必要。

その許可を取るために、イリスさんを送り込んできたんだ。

高校生の百合園さんが説得するより、大学生のイリスさんが説得した方が効果があるだろうからな。

「本当に大丈夫なの？　あまねだけじゃなくありすまでお世話になって」

「うちは無駄に広いので大丈夫です。それとセキュリティも無駄に万全ですのでご安心ください」

イリスさんにお茶を出しながら話しかける母さんと、その母さんの問いかけに笑顔で答えるイリスさん。

説得どころか、泊まり込むことがほぼ決定しているかのような会話だ。

「ああ、セキュリティと言えばうちにはワンちゃんもいますよ」

「え！？　犬がいるの！？　名前は！？」

「チビ助って言います。とっても大人しくて可愛いですよ。悪い人には凄く怖いですけど」

「わあ！　見てみたい！」

　犬がいると聞いて大はしゃぎのありす。

　うちは犬や猫を飼ったことが無いからな。

「あまねも座りなさいよ」

　母さんに問いかけられてハッとした俺は、母さんの隣に座った。

「そう言えば、これ、つまらないモノですけど」

　思い出したように声を上げたイリスさんが、包装された箱を取り出すとテーブルの上に置いた。

　出た、つまらないモノ。

　イリスさんだから大丈夫な気もするけど、なんだかんだで百合園さんに似ている所があるからな。

「あら、気を使っていただいて」

　笑顔で声を上げる母さん。

　つまらないモノが本当につまらないモノだったらどうしよう。

　まあ、母さんなら笑いそうだけど。

「あまねちゃん達が泊まりに来ると聞いて、本当に嬉しいです」

　そう満面の笑みを浮かべて話したイリスさんは、スッと右手を持ち上げると、その右手で口元を押さえた。

「あまねちゃん達の夏休みが終わって、うちのアリスちゃんも学校があるので、私、やることが無くて一人家にいて、あまねちゃん達と一緒に撮った写真を見ながら、毎日ひたすら押し花を作る日々……」

口元を押さえながら震える声を上げるイリスさんは、目尻に涙を滲ませて嗚咽を漏らしている。

イリスさん、俺達が学校に行っている間、毎日押し花を作っていたんだ。

泣いているイリスさんには悪いけど、ちょっと可愛い。

「よしよし、私が遊びに行ってあげるからね」

泣いているイリスさんの頭を優しく撫でるありすは、まるでお姉さんのような口振りでイリスさんに言い聞かせている。

「うう、ありすちゃんありがとう。大好きぃ」

頭を撫でているありすに震える声でお礼を言うイリスさん。

ありすがやたらとイリスさんに懐いていると思ったけど、もしかしてありすは百合園さんの家に泊まりに行くのが楽しみでたまらないのか。

そしてイリスさんが母さんを説得しに来てくれたのが嬉しくて、テンションがちょっとおかしくなっているのかもしれない。

「イリスさんは驚くほどの美人さんなのに、家に一人でいるの？」

「はい。お友達はあまねちゃん達だけなんです……」

「あらそうなの。美人過ぎて周りが引いちゃうのかしらね」

イリスさんの話を聞いた母さんが、ありすと一緒にイリスさんの頭を撫で始めた。

「あまね、イリスさんの家に泊まりに行ってあげなさい」

イリスさんの頭を撫でながら、俺を見て声を上げる母さん。

こうして百合園家に泊まり込むことが決定してしまった。

ちなみにイリスさんが持って来たつまらないモノは、高そうで美味しそうなお菓子だった。そして押し花が付いた綺麗な和紙も何枚か入っていた。

イリスさんが一人でせっせと作った押し花だろう。

妹と違ってつまらなくはないな、うん。

女の子になったら修羅場だった件 - 第八十二話　夏の終わりのラムネ味な件

　イリスさんが家に来た翌日、再度イリスさんが来た。

　俺達を迎えに来てくれたのだ。

「アリスちゃんは家でおもてなしの用意をしてます」

　玄関先に立ち、にこにこと笑いながらそう言ったイリスさんは、本当に嬉しそうだ。

　イリスさんには悪いけど、ちょっと不安だ。

　百合園さんがおもてなしの用意とか、嫌な予感しかしない。

　それはともかく、今日から百合園さんの家に泊まり込み、百合園さんの家から学校に通うことになる。

　期間は未定。俺がパネル作りをある程度覚えるまでだ。

　百合園さん曰く、切って貼るだけだからけっこう簡単、とのことだった。

　百合園さんって割と器用そうだからな。あまり鵜呑みにしない方がいいかもしれない。

「可愛い車に乗れるんだ！　やったあ！」

　ドラムバッグを肩に提げたありすが二階から降りて来て、瞳を輝かせながら声を張り上げている。

「アリスちゃんも色々と用意したいようなので、少し遠回りして行きますか？　途中でソフトクリームを買いましょう」

「あは！」

イリスさんの言葉に満面の笑みを浮かべるありす。

そんなありすを見てふと思った。

そう言えばありすって、俺の前以外ではあんまり笑っていないような気がする。

学校ではだいたい俺か百合園さんと一緒にいるけど、百合園さんがそばにいるとツンツンしちゃうからな。

ありすと百合園さんの仲は以前よりずっと良くなったと思う。

でもありすはまだツンツンしちゃうんだよな。

本当は百合園さんに素直に接したいけど、ずっと犬猿の仲だったし、なかなか素直になれないんだと思う。

そんなありすは今現在、イリスさんに満面の笑みを向けている。

イリスさんは百合園さんと違って受け身な性格だからな。

百合園さんに素直になれないから、その反動がイリスさんに出ているのかもしれない。

「ありす、失礼の無いようにね」

リビングから出て来た母さんが、そうありすに言い聞かせた。

「わかってるよ。子供じゃないんだから」

子供扱いされて怒っているのか、それとも恥ずかしがっているのか、声を上げたありすは頬を染めて頬を膨らませている。

「あまね、ありすのことよろしくね」

俺に視線を向けた母さんが問いかけてきた。

それを見たありすがムッとしている。

「うん、任せて」

そう母さんに答えながら頷いた。

それから母さんはイリスさんに何か渡し、俺達のことをよろしくお願いしていた。

母さん、イリスさんからもらった押し花を見て喜んでいたからな。

何かお礼をしないとって言っていたし、イリスさんに渡したのはそのお礼の品だろう。

あと俺達がお世話になるから、そのお礼も兼ねてかな。

◆

街中をイリスさんの可愛らしい車が走る。

小さいのに馬力があるのか、三人乗っていてもその走りは軽やかだ。

それと外見はレトロチックだけど、中は綺麗で、しかも最新の機器が搭載されているようだ。

見た目と中身のギャップが凄い。

車体が黄色いから目立つのか、歩道を歩いている人がこっちを見ているのがわかる。

それと運転しているイリスさんがあまりに綺麗だからか、信号待ちのために停まったりすると、隣に並んだ車に乗っている人がこっちを見て驚愕の表情を浮かべる。

隣に可愛らしい車が停まり、どんな人が運転しているのだろう、と思って見たら、驚くほど綺麗な銀髪の美女だったら大概の人は驚くだろう。

ちなみにありすと俺は後部座席に乗っている。

後ろはそんなに広くないようだけど、俺は平均くらいだし、ありすはやや小さい方だし、そんな俺達なら十分な広さだ。

◆

イリスさんが運転する車は街から離れ、到着したのは自然公園。

公園と言ってもあるのは散策道くらいで、自然を眺めて楽しむような場所だ。

家からそこそこ遠いけど、小学校の時に遠足で来たから知っている。

そんな特に何も無い自然公園だけど、駐車場に売店があり、そこには――。

「ソフトクリームだ！」

赤地に白い文字でソフトクリームと書かれた“のぼり”を見て、瞳を輝かせながら声を張り上げるありす。

ソフトクリームが食べたいって言っていたからな。

「ふふ」

はしゃぐありすを見て嬉しそうに笑うイリスさん。

ありすはイリスさんの可愛い車でドライブもしたかったようだし、イリスさんはドライブができてソフトクリームを食べれられる場所を前もって探してくれていたようだ。

「綺麗だなぁ」

車から降り、駐車場から見える湖を眺めながら呟いた。

湖の外周には散策道があり、遠足でその散策道を歩いた記憶がよみがえる。

歩き出してすぐにありすが「もう歩けない」と言い出し、ありすをおんぶして歩いたんだよな。

「ん？」

日の光を浴びてキラキラと輝いている水面（みなも）を、白いモノがスイーッと横切った。

まさか――。

駐車場と湖の間にある柵に駆け寄る。

水面を泳ぐカルガモの団体の中に、白いのが一羽混ざっていた。

「あ！　アヒルだ！」

思わず声を張り上げてしまった。

まさかアヒルがいるとは。

どこかから逃げて来たのだろうか。

それともカモとの交雑種だろうか。

前に調べたことがあるけど、アヒルってカモと繁殖が可能らしいんだよな。

「グワッ」

俺の声に反応したのか、スイスイと泳ぎながらこっちを見たアヒルが、まるで「こんにちは」と言うかのように鳴き声を上げた。

奏くんみたいなアヒルだ。

「あは！　こんにちは！」

アヒルに向かって声をかけながら手を振ると、アヒルがグワグワと返事をしてくれた。

可愛いなあ。

「うちのお姉ちゃんって可愛いよね」

「はい、とっても」

背後から聞こえた声にドキッとして振り返ると、ソフトクリームを手に持ったありすとイリスさんが、頬を染めて俺を見ていた。

あ、アヒルが好きなんだから声をかけるくらい別にいいじゃないか。

あとどう考えても二人の方が可愛いし綺麗だろ。

◆

売店のそばにあるベンチに座り、ソフトクリームを食べることにした。

日差しが暖かいけど、真夏に比べるとずいぶんと涼しくなった。

夏が終わり、秋が近付いているんだな。

そうしみじみと思った。

今年の夏は楽しかった。みんなで一緒に海に行って、キャンプに行って、そして夏祭りと花火大会に行って。

これから秋が来て、冬が来て、春が来て、また夏が来る。

来年の夏も、俺は女のままなのだろうか。

女になって色々と困っていることもあるし、男に戻りたいと思う気持ちもある。

だけど、男に戻ったら、俺はまたぼっちに逆戻りか。

そう考えると複雑な気持ちになってしまう。

それはそうと、ありすはバニラ。イリスさんはバニラとチョコのミックス。そして俺のは――。

「水色だ」

なんだこのソフトクリームは。水色だぞ。水色のソフトクリームなんて初めて見た。

「ラムネ味だって。お姉ちゃんかき氷はブルーハワイが好きでしょ？　だから青いのにしてみたの」

ありすの説明を聞き、なるほど、と思った。

水色で驚いたけどラムネ味か。なら普通に美味しいかもしれない。

ためしにペロリと舐めてみると、口内にラムネの爽やかな味が広がった。

「思ったより美味しい」

　ソフトクリームと言うよりシャーベットとジェラートの中間って感じかな。

「あ！　アヒルが歩いてる！」

「え！？　どこどこ！？」

　ありすが声を張り上げ、急いで辺りを見回した。でもアヒルの姿は無い。

「ん？」

　サッと何かが動く気配を感じ、視線を下げた。

　まだちょっとしか舐めていないラムネ味のソフトクリーム。その俺が舐めた部分が大きく抉られていた。

　ジト目で隣を見ると、すまし顔のありすがソフトクリームをペロペロと舐めている。

　そんなありすの唇の端に青いのが付いていた。

　アヒルで俺の気をそらして、俺のソフトクリームを食べたのか。

　ちょうだいって言えばいくらでもあげるのに。

　そう思いつつ、ソフトクリームをペロペロと舐めた。

　んん、爽やかで冷たくて美味しい。

「あ、ああ、あひ、アヒルが歩いてる！」

　イリスさんが真っ赤な顔で声を張り上げた。

　二度目はちょっと……。

　ジト目でそう思ったけど、イリスさんが真っ赤な顔でこっちをチラチラと見ている。

　ソフトクリームを買ってもらったし、これからお世話になるし、ここは乗っておこう

か。

「え？　どこどこ？」

　ジト目のままアヒルを探すフリをした。

　そして気付かれないようにイリスさんを見た。

　パアッと笑みを浮かべたイリスさんは、身を乗り出して俺が持っているソフトクリームに顔を寄せた。そしてペロッと舌を出すと、俺が舐めた部分をペロペロと舐めた。

「あ、あまねさんの味は爽やかです」

　うっとりした顔で呟いたイリスさんは、ハッとすると手で口元を覆い、身を引いた。

　これ、気付かないフリをした方がいいんだよね。

　そんな俺の思いをよそに、ありすとイリスさんがお互いに親指を立て合っている。

　二人とも仲良いね。

「アヒルが歩いてる！」

　そう俺が声を張り上げたら、二人がキョトンとした。

「アヒルが歩いてるって言ってるの！」

　さらにそう声を張り上げると、二人が困惑した表情を浮かべた。

　ああ、もう、仕方がないなあ。

　そう思いながら、身を乗り出してありすのソフトクリームをパクッと食べた。

　うん、やっぱりバニラは美味しいね。

　次いでイリスさんの方に身を乗り出し、ソフトクリームをパクッと食べた。

　バニラの甘さの中にチョコのほろ苦さがあって、これも美味しい。

「お返しだよ」

　そう二人に言うと、目をパチクリさせた二人は――。

「あ、アヒル！　アヒルどこどこ！」

「アヒルさんどこですかー！」

　真っ赤になった二人がアヒルを探し始めた。

　遅いよ。

　そんなこんなでソフトクリームを食べ終わると、イリスさんの車に乗り込んで百合園さんの家に向かった。

女の子になったら修羅場だった件 - 第八十三話　人のおっぱいを勝手に貸し借りしないで欲しい件

　車が減速し、ゆっくりと停車した。

「着きました。ここがアリスちゃんの家です」

　運転席に座っているイリスさんが、後部座席に座っている俺達を見ながら声を上げ、車から降りた。

　俺もドアを開けると車から降り、続いてありすも車から降りた。

「わあ、可愛いお家(うち)だね、お姉ちゃん」

「うん、そうだね」

　ありすに問いかけられ、頷いて答える。

　駐車場は車が四台くらい停められそうなほど広く、石造りの門が見える。その門に見える百合園アリスという表札。

　ずいぶんと自己主張の強い表札だ。

　百合園家の表札なのに、百合園アリスという表札を掲げるとは。

　まあ、百合園さんだからな。

　それはともかく、門の奥には色とりどりの花が咲き誇る庭があり、そして女の子が喜びそうな可愛らしい家が見える。

　素敵な家だと思うけど、想像と違った。

　百合園家はかなりの富豪だと思っていたから、もっと凄い家を想像していたん

だけど。

　いや、十分凄いんだけどね。駐車場や庭は広いし、可愛らしい家も一般家庭に比べたら豪邸と言えるほど立派だし。

　でも百合園家のイメージは広大な敷地の中に建つ巨大な洋館って感じだったから。

　とそこで、キャンプの時に使った大きな車が無いことに気が付いた。

「どうかしましたか？」

　辺りを見回していたらイリスさんが問いかけてきた。

「あ、いえ、キャンプの時に使った車が無いなと思って」

「ああ」

　俺の言葉に頷くイリスさん。

「あの車は私の家に置いてあります」

「なるほど。普段はイリスさんの家に――ん？」

　イリスさんの言葉を聞いて納得しかけたけど、違和感を覚えて首を傾げた。

　私の家って、ここと は別に家があるのか？　ていうか、私の家って表現が引っかかる。

「こ、ここは誰の家なんですか？」

「ここはアリスちゃんの家ですよ」

　俺の問いに当然とばかりに答えるイリスさん。

　アリスちゃんの家？　その言い方だと、まるで百合園さん専用の家みたいに聞こえるんですけど。

「この家はアリスちゃんの高校入学のお祝いにお父様が買ってくれたんです。高

校に通いやすいようにと」

「え？」

　ちょ、ちょっと待って。アリスちゃんの入学祝いにお父様が買ってくれた？　高校に通いやすいように？

　家ってそんな気軽に買うものじゃないと思いますが。しかもパッと見ちょっとした豪邸クラスの家ですよ？

「この立派な家はイリスさんとアリスちゃん専用の家ってことですか？」

　確認のため、そうイリスさんに問いかけた。

　想像と違うと思っていたけど、姉妹のためにこんな立派な家を建てるとか。それが事実なら想像以上だぞ。

「いえいえ」

　にっこりと笑いながら首を横に振るイリスさん。

　姉妹の家じゃないの？　他にも誰かが住んでいるってことかな。

「ここはアリスちゃん専用の家で、私の家は別の場所にあります。でもアリスちゃんがこの家に住むようになってから、私もこの家に住んでいるので、自分の家にはあまり帰っていないんです」

「ふぇ？」

　ちょ、ちょちょちょ、ちょっと待ってください。話を整理させてください。

　ここは百合園さん専用の家で、イリスさん専用の家が別の場所にある？　てことは――。

「イリスさんとアリスちゃんの家の他に、ご両親の家もあったりするんですか？」

「あ、はい、ありますよ」

　俺の問いにすんなりと頷いたイリスさんを見てゾッとした。

百合園家は実家があり、その他に娘にそれぞれちょっとした豪邸クラスの家を買い与えているってこと？

やばいぞこれは。百合園家は俺が考えていたより遥かにやばい富豪なのかもしれない。

ありすを見ると、目を丸くして呆然としている。

イリスさんの話が理解できないのだろう。

「ありす、おいで」

両手を広げ、そうありすに問いかけた。

ハッとしたありすは、目を丸くしたまま俺を見ると、よたよたとした足取りで俺に近寄って来た。そしてキュッと俺に抱き着いた。

「お姉ちゃん、ありすよくわかんない……」

俺の胸に顔を埋めながらふがふがと声を上げるありす。

そんなありすを優しく抱き締めた。

ありすは見た目はお姫様だけど、中身は俺と同じ庶民だからな。

「お姉ちゃん、ありす怖いよぉぉぉぉぉ」

俺に抱き着いたことで安心し、それによってイリスさんの話をちょっと理解できてしまったのか、ありすが泣き出してしまった。

ありすも百合園さんがお金持ちなのは理解していたと思うけど、まさかここまで桁外れだとは夢にも思っていなかったのだろう。

「え？　あれ？　あ、あの……どうかしたんですか？」

怯える俺達を見たイリスさんが、困惑したような表情を浮かべて問いかけてきた。

イリスさんは自分がどれだけ常識から逸脱したことを言ったのか、まったくわかっ

ていないようだ。

　イリスさん、入学祝いに娘に専用の豪邸を与える親なんて、あんまりいないと思いますよ。

　◆

　泣き出してしまったありすだけど、根気よくあやしたことでどうにか落ち着いた。でもまだ怖いのだろう。俺の陰に隠れてビクビクしている。

「だ、大丈夫ですか？」

　困惑しているイリスさんが問いかけてきた。

「大丈夫です」

　イリスさんの問いかけに笑顔で頷く。

　百合園家が富豪なのはある程度わかっていたことだし、どんなに桁違いのお金持ちでもイリスさんや百合園さんは俺達が知っている二人で、それは変わらないからね。

　ありすはまだ怯えているけど、その内慣れるだろう。

「ふ、ふぇ、ふぇぇぇぇぇぇ」

　困惑していたイリスさんが泣き出してしまった。

　しまったと思った。

　怯える俺達を見て嫌われたと思ってしまったのかもしれない。

　イリスさんは俺達以外に遊ぶ相手がいなくて、一人でせっせと押し花を作るような人だからな。

「い、イリスちゃん、おいで」

　両手を広げてイリスさんを呼んだ。

「ふぇ、ふぇぇ、ふぇぇぇぇぇん」

　両手で口元を覆いながら泣いているイリスさんが、フルフルと首を横に振って後ずさりをした。

　呼んだら大喜びで駆け寄って来るイリスさんが後ずさりをするなんて。

　嫌われたと思って警戒してしまっているようだ。

　どうする？

　優しい態度で接しても、疑念を抱いてしまっているイリスさんは、余計に警戒してしまうかもしれない。

　イリスさんは俺にお姉ちゃんになって欲しいって言うような性格だし、ならここは、一か八か――。

「イリスちゃん、お姉ちゃんはこっちに来なさいって言ってるの」

　ドキドキしながら少し強めに言ってみた。

「ふぇう」

　ビクッと震えたイリスさんは後ずさりをするのをやめた。そして震えながらも足を踏み出し、トコトコと近寄って来た。

　よし、上手くいった。

　予想通りイリスさんにはちょっと強めに言った方が効くようだ。

　残る問題はありすだな。イリスさんを抱き締めてありすが怒ったら、イリスさんは間違い無く逃げてしまうだろう。

　そう思って背後のありすを見ようとしたら、隠れていたありすが俺の前に躍り出た。

　まずい。イリスさんに突っかかる気か。

　焦ってありすを止めようとしたら――。

「お、おいで……」

　なんとありすは怒るどころかイリスさんに向かって手招きをしたのだ。

　ありすに許されたイリスさんは、パアッと満面の笑みを浮かべると、ちょこちょこと小走りで近寄って来た。そして俺の前で立ち止まった。

「お姉ちゃんのおっぱいは、ほどよい大きさで、ほどよい柔らかさで、とても良い匂いがして、顔を埋めると安心できるの」

　そうイリスさんに説明したありすは、ボフッと俺の胸に顔を埋め、チラリとイリスさんを見た。

　やや俯き加減でモジモジしているイリスさんが、上目使いでありすを見ている。

「特別に片方貸してあげる」

　そう言って横にずれるありすと、パアッと満面の笑みを浮かべるイリスさん。

「か、片方借りてもいいんですか！？」

「イリスちゃんはなにも悪くないのに、私が泣いちゃったから。だから特別に貸してあげる」

　イリスさんの問いかけに答えるありす。

　ありすの答えを聞いたイリスさんは、耳まで真っ赤にさせながら俺に身を寄せ、そして少し屈むと俺の胸に顔を寄せた。

「こうするの。こうすると凄くいいの」

　そう言って俺の胸にムギュッと顔を埋めるありす。

　そんなありすをジーッと見ていたイリスさんは、コクリと喉を鳴らし、意を決したようにムギュッと俺の胸に顔を埋めた。

「どう？」

　俺の胸に顔を埋めたまま横目でイリスさんを見ながら問いかけるありす。

「す、凄く、凄く凄い……です」

俺の胸に顔を埋めながらはぁはぁを息を荒らげ、ふがふがと声を上げるイリスさん。

あ、あの……人のおっぱいを勝手に貸し借りするの、やめてもらえませんかね。

まあ、それで丸く治まるなら別にいいけど。

◆

俺のおっぱい効果で完全復活した二人は、俺の左右の腕に抱き着き、笑顔で会話を交わしながら石造りの門を潜り抜ける。

なんだろう。おっぱいから元気を吸い出されてしまったのだろうか。ドッと疲れたような気がする。

「わあ」

門を潜り抜けたことで庭の全容が視界に映り、ありすが瞳を輝かせて声を上げた。

色とりどりの花が咲き誇る花壇。そして広がる青々とした芝生。

花はとっても綺麗だし、芝生はきちんと手入れがなされていて、思わず寝転がりたくなってしまう。

そして――。

「なにあれ……」

瞳を輝かせていたありすが、一点を見つめて呟いた。

何かいる。白くてモフモフした巨大な何かがいる。その巨大な何かの背後に見えるさらに巨大な小屋。

見た感じ犬小屋のようだけど、普通の犬小屋の数倍は大きい。

あれが犬小屋だとしたら、その前に寝そべっている巨大な白いモフモフは……

犬？

「あの子はチビ助ですよ」

にこにこと笑いながら声を上げるイリスさん。

チビ助。それは俺の家でイリスさんが口にした犬の名前だ。

ならやはりあの巨大な白いモフモフは犬なのか。

「チビくない……」

思わず呟いてしまった。

だってデカいもの。どう考えたってデカいもの。全然チビくないもの。

「わう？」

それまで微動だにしなかった巨大なモフモフがモゾッと動いた。

「うわあ！」

モフモフの中に見えたつぶらな黒い瞳。そのあまりの愛らしさに心を撃ち抜かれ、声を上げずにはいられなかった。

「わふ」

ムクッと起き上がる巨大なモフモフ。

立ち上がったことでようやく犬らしい見た目になったモフモフは、大きなシッポをブンブンと振った。

「ひ、人が乗れそう……」

少し怖いのか、俺の背後に隠れながら呟くありすは、瞳を輝かせて頬を染めている。

俺が乗るのはちょっと厳しいかもしれないけど、ありすなら乗れそうだ。それくらい大きな犬だ。

「チビ助はグレートピレニーズという犬種なんです。ピレネー犬という名前の方が有名ですね。頭が良くてとっても優しい性格ですけど、お友達を守るためなら熊にも狼にも立ち向かう勇敢で強いワンちゃんなんですよ」

得意気に説明するイリスさん。そんなイリスさんの前までノシノシと歩いて来たチビ助は、お利口にお座りをした。

見るからに賢そうで大人しそうだ。でもその大人しそうな佇まいに反し、ブンブンと激しく振られているシッポがまたなんとも愛らしい。

イリスさんが帰って来たから嬉しいのだろう。

「チビ助は捨て子なんです。アリスちゃんが見つけて連れて来たんですよ。だから純潔のピレネー犬かどうかは実はよくわからないんです」

しゃがんだイリスさんが、チビ助の頭を撫でながら呟く。

イリスさんから頭を撫でられても吠えるどころか微動だにしないチビ助。ただしシッポはブンブンと振っている。

本当にお利口そうな犬だ。俺も頭を撫でてみたい。

「来たばかりの頃のチビ助は、片手に乗るくらい小さかったんです。あんなに小さかったのに、まさかこんなに大きくなるなんて」

「あ、ああ、なるほど」

イリスさんの呟きに頷いた。

拾って来たばかりの頃はとても小さくて、だからチビ助なんて名前を付けたのか。

「ち、チビ助は……噛まない？」

俺の背後に隠れているありすが、顔だけ出しながら声を上げた。

触りたいけど怖いのだろう。

「チビ助。アリスちゃんの親友のありすちゃんですよ。チビ助を撫でてみたいそうで

す」

　そうチビ助に語りかけるイリスさん。

「わう」

　ありすを見上げたチビ助は、優しい声で鳴くとその場にころんと寝転がり、お腹を見せた。

　僕は噛まないよ。大丈夫だよ。安心してね。

　そうありすに言っているようだ。

「わあ」

　瞳を輝かせたありすは、恐る恐る俺の背後から出ると、チビ助の横にしゃがんでそっと手を伸ばした。そしてチビ助のお腹を撫でた。

　ありすに触れられても無抵抗のチビ助だけど、相変わらずシッポだけはブンブンと激しく振っている。

「かわいー！　凄くおっきいぬいぐるみみたい！」

　触っても大丈夫だとわかり、安心した様子のありすが、声を張り上げながらチビ助を撫で回し始めた。

「ちっ」

　舌打ちのような音が聞こえ、驚いて視線を向けると――。

　玄関の扉が少しだけ開いていて、その隙間から赤い瞳がジーッとこっちを見ていた。

「ずっと待ってるのに、いつまで待たせるんですかね」

　そしてボソッと呟いた。

　あ、すっかり忘れてた。

　そう言えば色々と準備をしているってイリスさんが言ってたな。

「みりすは私とチビ助、どっちが大切なんです――」

「チビ助」

　百合園さんの呟きに即答するありす。

　怒って扉を閉めるかと思ったら、バンッと勢いよく扉を開いた百合園さんが、ズカズカと歩いてありすに近寄った。

　そしてありすの手を取り――。

「せっかく準備したんです！　早く見てくださいよ！」

「ちょ、引っ張らないでよ！　もうちょっとチビ助と遊びたいの！」

　ありすの手をグイグイと引っ張りながら声を張り上げる百合園さんと、そんな百合園さんに抵抗するありす。

「くぅーん」

　二人の争いを見て困ったように鳴くチビ助。

「チビ助とはあとで遊べばいいじゃないですか！　折り紙でチェーンをいっぱい作ったんです！　それを早く見て欲しいんです！」

「ちょ、痛いって！　わかったから引っ張らないでよ！」

　結局ありすは百合園さんからズルズルと引っ張られて家の中に連れ込まれてしまった。

「ふふ。二人はとっても仲良しですね」

　チビ助のお腹を撫でながら嬉しそうに呟くイリスさん。

　準備って、折り紙でチェーンを作っていたのか。

　姉は押し花だし、なんだかんだでやっぱり似ているんだな、この姉妹は。

イリスさんと一緒にチビ助のお腹を撫でながらそんなことを思った。

それはそうと、チビ助、お前本当に可愛いな。

女の子になったら修羅場だった件 - 第八十四話　お嬢さまが自由すぎて将来が不安になる件

　チビ助を散々撫で回して気が済んだ俺は、イリスさんと一緒に家の中へと入ることにした。

「わふ」

　大きなシッポをブンブンと振りながら付いて来るチビ助。

　撫でるのに夢中で気付かなかったけど、チビ助は放し飼いのようだ。

　門には鉄製の門扉が付いているから脱走はできないと思うけど、チビ助の存在を知らずに敷地内に入り、巨大なモフモフが駆け寄って来たら恐怖だろうな。

　そんなことを思いながら家の中に入ると、玄関にマットが敷いてあった。

「わふわふ」

　わふわふ言いながらマットの上に乗ったチビ助が、前足や後ろ足を器用に動かして足の裏を拭いている。

「か、賢い……」

　なんだこの子は。家に上がる前に自分で足裏を拭くとか。

　百合園さんが躾けたのか？　あの百合園さんが？

　百合園さんに躾とか無理な気がするんだけど。どっちかと言うと躾けられる側だし。

　ならイリスさんが躾けたのかも。

　でもなあ。優しすぎるイリスさんが、チビ助を厳しく躾けられるとも思えないんだよなぁ。

　イリスさんに躾けることができたら、妹があんなことになっていないと思うし。

「チビ助はお利口なんです。アリスちゃんが家に上がる前に靴を脱ぐのを見て、足を綺麗にしてから家に上がる、と言うことを勝手に覚えちゃったんですよ」

「え！？　勝手に！？」

　百合園姉妹に躾けられるだろうか、と疑問に思っていたけど、まさか勝手に覚えてしまうとは。

　飼い主がアレだから立派に成長したのだろうか。

「あれは雨が降る寒い日でした」

　玄関先に佇んでいるイリスさんが、遠くを見ながら呟いた。

「傘を持って登校したはずのアリスちゃんが、ズブ濡れて帰って来たんです。とても小さな白いワンちゃんを抱きかかえて」

　突然呟き出したイリスさんだけど、どうやら過去の回想をしているようだ。

「ワンちゃんも震えていましたが、アリスちゃんも震えていました。すぐに体を温めないとと思ってお風呂に入れようとしたのですが、ワンちゃんを病院に連れて行くと言って聞きませんでした」

　静かに語るイリスさん。

　足を拭き終ったチビ助が、お座りをしてイリスさんを見上げている。

「病院から戻ってから、アリスちゃんは小さなワンちゃんを温め続けました。あの時の温もりをチビ助は忘れないのだと思います。だからチビ助はとてもお利口なのだと思います」

「わふ」

　イリスさんの言葉に、まるで返事をするように吠えるチビ助。

「そっか」

百合園さんらしい話だと思った。

躾けるのは無理そうな性格だけど、自分も寒いのに寒さに震える仔犬を温め続けるとか、凄く百合園さんらしい。

だってずっとお姉ちゃんを守りたいと思っていたような子だからな、百合園さんは。

ただ不器用なだけで、根はとても優しい子なんだ。

「チビ助は素敵なご主人さまと巡り会えたね」

「わふん」

その場にしゃがみ、チビ助を見ながら問いかけると、嬉しそうに返事をしたチビ助がコクンと頷いた。

頷いた。今間違い無く頷いたぞ。

この子、冗談抜きに人の言葉を理解しているんじゃないか。

それはともかく——。

立ち上がって辺りを見回す。

イリスさんは俺の家で「セキュリティは無駄に万全」とか言っていた。

飼い主より賢いチビ助がいれば安心だろうけど、イリスさんの口振りからして、強固なセキュリティの設備が整っていると思っていた。でも割と普通に思える。

「セキュリティってチビ助のことだったんですね」

そうイリスさんに問いかけると、イリスさんがにっこりと笑った。

「はい」

そしてコクンと頷いた。

やっぱりそうだったのか。どうやら俺の考え過ぎだったようだ。

「あとこの家の両隣りの家は百合園家の所有物でして、特殊な訓練を積んだ警備員兼メイドさん達が常時五名ずつ駐在しています」

「んな！？」

りょ、両隣りの家が百合園家の所有物？　しかも特殊な訓練を積んだ警備員さんが常時五名待機しているのか？

特殊な訓練ってなんだ。怖いんだけど。

「あ！　だ、大丈夫ですよ！　警備員さん達は全員女性ですから！　表向きは普通のメイドさんですから！」

俺がドン引きしたのを見てイリスさんが必死に説明した。

警備員さんが男だと思って俺がドン引きしたとでも思ったのだろう。

違う、そうじゃない。イリスさん、そうじゃないよ。

娘に豪邸を買い与えるだけでは飽き足らず、その両隣の家まで購入し、しかも警備員を常時待機させていることにドン引いたんだよ。

しかし、特殊な訓練を積んだ女性って……。

戦闘メイドとかだったらちょっとカッコいいかも。

「本当は一緒に住んでもらった方が安心なんですけど、アリスちゃんが嫌がるので」

「あ、ああ、なるほど」

イリスさんの言葉に頷いた。

百合園さんが嫌がるから両隣の家を購入して……。

納得していいのかこれ。

「なので、アリスちゃんに気付かれないように家の中に潜入し、気付かれないように掃除をしたり洗濯をしたりお料理をして、気付かれないように去ってゆくんです」

「忍者か！？」

イリスさんの言葉に思わず突っ込みを入れてしまった。

戦闘メイドじゃなくて忍者メイドだった。

そう思いながら天井を見上げた。

気付かれないようにってことは、今も潜伏している可能性があるのか。

潜伏するだけならいいけど、アリスお嬢さまの友人として相応しくない、と判断されたら排除されそうで凄く怖いです。

「わふ」

まるで俺が不安がっていることを見抜いたように吠えるチビ助。

「チビ助……」

チビ助に抱き着くと、チビ助は俺の頬をペロッと舐めてくれた。

横目でイリスさんを見ると、笑ったまま首を傾げている。

イリスさんは綺麗で優しいけど、はっきり言って頼りにならない。

頼みの綱はチビ助だけだ。

チビ助、俺達が忍者メイドから排除されそうになったら助けてね。

◆

イリスさんに案内されて、チビ助と一緒にリビングに入った。

「ひっ」

パンッと破裂音が響き、思わずビクッとしてしまった。

「ひっ、ひぃぃぃぃぃぃっ」

　俺以上に悲鳴を上げたイリスさんが、ガクッと膝を折り、その場に尻餅をついてしまった。

　そんな俺達とは違い、平然としながらシッポをブンブンと振っているチビ助。

　さすがチビ助、頼りになる。

「いらっしゃいませー！」

　その声と同時にパンパンと連続で破裂音が響く。

　一度目は驚いたけど、二度目は大丈夫だ。

「ひぃぃぃぃぃぃぃぃっ」

　大丈夫じゃない人もいるようだけど。

「お姉ちゃんは驚きすぎです」

　怯えるイリスさんを見ながら声を上げる百合園さん。

　キラキラと輝くテープが巻かれた三角帽を被り、手にクラッカーを持っている。

　その百合園さんの隣に立ち、ゲッソリしてるありす。

　ありすよ、お疲れさま。

　ジト目でそんなことを思いつつ、床に座り込んで震えているイリスさんの隣にしゃがみ、そっと抱き寄せると、イリスさんの顔を胸にギュッと押し付けた。

　震えていたイリスさんだけど、俺の胸に顔を埋めたことでピタリと震えが止まり、ムギュッと強く抱き着いてきた。

　おっぱい効果恐るべし。

　おっぱいが好きなのは男だけかと思っていたけど、女の子も好きなんだな。

　それはそうと、綺麗で豪華なリビングの壁にベタベタと容赦なく貼り付けられた折り紙のチェーン。

　壁だけじゃなく、天井にも大量の折り紙チェーンがぶら下がっている。

　それと、折り紙を切って作ったのか、窓に「いらっしゃい！」という虹色の文字が描かれているけど、その文字を貼るためにガラスがシールでベタベタになっている。

　あれ剥がすの大変だな、とか思わず考えてしまい、苦笑いを浮かべた。

　まるで幼稚園児のお誕生会だ。

　だけど、全力で歓迎してくれていることは伝わってくる。

　だからありすも黙っているのだろう。

「さあ！　みんな集まった所でお食事にしますよ！」

　そう声を張り上げた百合園さんがテーブルを指さした。

　テーブルを見てジト目にならざるを得なかった。

　テーブルの上に置かれていたのは焼きそばパン。そしてメロン。

　焼きそばパンはいいとして、問題はメロンだ。

　人数分用意したのだろう。白い皿に乗ったメロンが四つ、そのままドンと置いてあるのだ。

　そう、そのまま。まったく加工されていないメロンがそのまま置いてある。

　その横に置かれた包丁。

　スプーンやフォークではなく、包丁が置いてあるのだ。

　自分で切って食えと言うことか。

　ワイルドなのにもほどがある。キャンプの時よりワイルドだぞ。

「さあ食べましょう！　メロンを丸ごと一個食べてみたかったのです！」

　一人でさっさと席に着いた百合園さんが、満面の笑みを浮かべてそう言うと包丁を構えた。

　食べてみたかった、とか言っているし、普段からこんなアホな食べ方をしているわけじゃないようだ。

　ちょっと安心した。

　それはともかく――。

「ちょっと待った！」

　包丁でメロンをザックリやろうとしている百合園さんに向かって声を張り上げた。

　包丁を今まさに振り降ろそうとしていた百合園さんが、俺を見て首を傾げている。

　なにか問題でも？　みたいな顔をしているけど、突っ込みきれないくらいおかしいから。ていうかそんな不安定な場所で包丁を使うのは危ないから。

　それもあるけど――。

「どうせならもっと楽しく食べよう」

　そう百合園さんに問いかけると、百合園さんがパアッと満面の笑みを浮かべた。

　料理のことならお兄ちゃんに任せなさい。

　◆

　百合園さんにちょっと待つように言い付け、キッチンを借りた。

「わふ」

　ご主人さまはリビングにいるのに、なぜか俺に付いて来たチビ助。

俺のことを心配してくれているのかな。

いつ忍者メイドから襲われるかわからないし、チビ助がそばにいてくれると心強い。

熊や狼にも立ち向かうってイリスさんが言っていたし、そんなチビ助なら忍者メイドにも勝てるかもしれないし。

しかし――。

「う、羨ましい……」

驚くほど広くて綺麗なキッチン。

しかも調理器具や調味料が揃っている。

冷蔵庫も大きいし、あらゆる意味で羨ましすぎる。

「さて、メロンを丸ごと一つ食べたいんだったな」

そう呟きながら冷蔵庫を開けた。

お目当ての生クリームとバニラアイスを見つけてニヤリと笑う。

メロンを丸ごと一個食べるなら、楽しい仕掛けをしようと思ったのだ。

まずはメロンの皮を剥く。丸いまま皮だけ剥いてゆく。

剥き終ったらメロンの芯に包丁を刺し、丸くくり抜く。そして柄が長めのスプーンで内部の種を掻き出し、全て掻き出し終ったら生クリームを注入。次いでバニラアイスを突っ込む。最後にくり抜いた部分を戻して、はい完成。

メロン丸ごと一個の生クリームバニラアイス仕立て。

こんな食べ方をしたことは無いけど、ケーキとメロンの相性は良いんだから、たぶん美味しいだろう。

ちなみに俺達が食べる分は普通に小さく切った。

◆

「あは！」

リビングに戻ると、皮を剥いた丸ごと一個のメロンを目にした百合園さんが瞳を輝かせた。

メロンは皿に乗せているけど、丸いから気を抜くと転がってしまう。

そんなメロンを百合園さんの前に置いた。

呆れたようなジト目で百合園さんを見ているありすと、嬉しそうにパチパチと拍手をしているイリスさん。

そして俺と一緒にリビングに戻ったチビ助は、寝そべっている。

「た、食べてもよいのですか！？」

頬を染め、輝く瞳で俺を見ながら問いかけてくる百合園さん。

「どうぞ」

本当に一人でこれを食べる気なのか、と内心で思いながら頷いた。

「いただきます！」

声を張り上げた百合園さんは、素手でメロンをガシッと掴み、ガブッと喰らい付いた。

「んー！」

美味しいのか、くぐもった声を上げながらガブガブとメロンを食べる百合園さん。

そんな百合園さんを尻目に、ありすとイリスさんの前に小さく切ったメロンを置いた。

「これ、凄く美味しいメロンだね」

メロンを丸ごと一個ガブガブと食べている百合園さんを見ながら、フォークでパ

クッとメロンを食べたありすが呟いている。

　そうなんだよ。俺もさっきちょっとだけ味見をしたけど、糖度が高くてとても美味しいメロンなんだよ。

　きっとお高いんだろうなぁ。

「うまうま！」

　そんなメロン丸ごと一個にかぶりついている百合園さん。

「あ！　生クリームが出てきまし――バニラアイスも！」

　中から生クリームとバニラアイスが出てきて大喜びの百合園さんは、食べる速度を上げた。

「アリスちゃんよかったね！」

　ひたすらメロンを食べ続ける妹を見て嬉しそうに声を上げる姉。

　さすがの百合園さんもメロン丸ごと一個を食べるのは無理なんじゃないかと思っていたけど、すでに終わりが見えてきている。

「うまうま！」

　生クリームとバニラアイスとメロンを一緒に食べてご満悦な百合園さんは、結局そのまま全部食べ切った。

　姉に言ってもたぶんどうにもならないから、潜伏している可能性がある忍者メイドさんに問いたい。

　このお嬢さま、このままでいいんですか？　と。

女の子になったら修羅場だった件 - 第八十五話　ぼやけた方がえっちな件

　誰かさんはメロンと焼きそばパンを夕飯にするつもりだったようだけど、そんなの俺が納得できない。

　それにメロンで満腹になったのは誰かさんだけだ。

　と言うことで夕ご飯を作ることにしたわけだけど――。

「百合園さんのペースに乗せられているような……」

　キャベツをみじん切りにしながら呟いた。

　俺はここに何をしに来たのか。百合園さんからパネル作りを学ぶために来たのである。

　それなのにメロンの皮を剥いたり夕ご飯を作ったり。

　夕ご飯を食べ終わったらお風呂に入ろうと言い出すのが目に見えている。

「まあ、初日だしな……」

　百合園さんに悪気が無いのはわかっている。友達が家に遊びに来てテンションが上がっているだけだろう。

　そう思いつつ、キャベツを切り終わると、豚肉を棍棒でベシベシと叩く。

　メロンを丸ごと一個食べて満腹になった誰かさんだけど、夕飯を作ると言ったらトンカツが食べたいと言い出したのだ。

　痩せの大食いって言うけど、百合園さんがまさにそれだな。

「しかも肉もちゃっかり用意してるし」

豚肉を棍棒でペシペシしながら呟いた。

メロンを包丁で叩き切ろうとしていた百合園さんは料理なんてできないだろうし、イリスさんも怪しい。

それなのに冷蔵庫にトンカツ用の豚肉があったと言うことは、俺に作らせる気満々だったと言うことだ。

まあ、料理は好きだし、美味しいって言ってもらえると嬉しいから別にいいけど。

それに百合園さんは本当に美味しそうにガツガツ食べてくれるからな。

「えーと、薄力粉とパン粉は……」

呟きながら辺りを見回した。

わからないから百合園さんに……いや、イリスさんに……。

あの二人に聞いてわかるだろうか？

ジト目でそう思いながらまな板に視線を戻すと――。

「え？」

まな板の横に薄力粉とパン粉が置いてあった。

元からここにあったのか？　いや、そんなはずは無い。

焦って辺りを見回したけど、足元にチビ助が寝そべっているだけで誰もいない。

「ち、チビ助、今ここに誰か来た？」

「わふ」

チビ助に声をかけると、顔を上げて俺を見上げたチビ助が返事をした。

忍者メイドか。忍者メイドが俺に気付かれないように薄力粉とパン粉を置き、音も無く姿を隠したのか。

　チビ助が警戒していないし、そもそも忍者メイドは百合園さんを警護するために雇われているのだろうから、悪者じゃないだろう。

　そして俺の手伝いをしてくれたと言うことは、俺達を認めてくれたと思ってもいいのかな。

　でも正直怖い。

「あ、ありがとうございます……」

　小声でお礼を言いつつ、トンカツ作りを再開した。

◆

「美味しいれふ！」

　サクサクのトンカツにかぶりつき、頬を染めて声を張り上げた百合園さんは、白米を頬張り、頬をハムスターのように膨らませている。

　百合園さんは本当に美味しそうに食べてくれるなあ。

「とても美味しいです！」

　百合園さんと違い、お嬢さまらしく上品にトンカツを食べているイリスさんが、口元に手を添えながら声を上げた。

「ふふん、当然よ！　お姉ちゃんのお料理は世界一なんだから！」

　鼻を鳴らしながら偉そうに声を上げるありす。

　ありすよ、お兄ちゃんより料理が上手な人なんて五万といるぞ。料理の世界は奥が深いのだ。

　でも褒めてくれてありがとう。

◆

　夕ご飯を食べ終わり、食器をキッチンに運んだ。

百合園さんはありすが引き受けてくれているから、落ち着いて洗い物ができて助かる。

百合園さんが「私も手伝います！」とか言い出したら食器を割られまくりそうだからな。

俺には判断できないけど、たぶんここにある食器は凄く高価だと思うし。

ちなみにチビ助は相変わらず俺の足元に寝そべっている。

可愛い。

◆

食器を洗い終ってリビングに戻ると、ありすと百合園さんが向かい合って座っていた。

「ささみ！　はいみりすの番です！」

楽しそうに声を上げた百合園さんがありすを促す。

「みかん」

ジト目で呟くありす。

「あー！　“ん”が付きましたよ！　みりすの負けでーす！」

ありすを指さして大喜びの百合園さん。

何をしているのかと思ったら、しりとりをしているようだ。

「じゃあもう一回です！　うちわ！」

人差し指を立てた百合園さんが、声を張り上げると手でありすをパタパタと扇いだ。

「わんたんめん」

ジト目でボソッと呟くありす。

明らかにワザと“ん”の付く単語を言っている。

ありすよ、しりとりくらい真面目にやってあげたらどうだ。

「あー！　また“ん”が付きました！　みりすの負けでーす！」

百合園さんは大喜びだから、まあいっか。

それはそうと、イリスさんの姿が無い。

別の部屋に行ったのかな。

ここは百合園さんの家だけど、一緒に住んでいるって言っていたし、イリスさんの部屋もあるだろう。

そう思っていたら、イリスさんがひょっこりとリビングに入って来た。

「うあ！？」

視界に映ったイリスさんの姿に一瞬で顔が熱くなった俺は、焦って顔をそらした。

白いブラウスを着ていたイリスさんは、白いブラウス“しか”着ていなかった。

イリスさんの雪のように白い太ももが、危険なほど丸見えだったのか。

ドクンドクンと激しく鼓動を刻む心臓。

裸よりえっちだった。

ていうか、百合園さんよりむっちりしていて本当にヤバい。

イリスさんを見ないようにしながらありすと百合園さんを見たけど、二人ともイリスさんの破廉恥すぎる格好を気にしていないようだ。

女の子同士だから気にならないのか。

俺も普通の女の子なら気にならないのかもしれないけど、普通じゃないんだな、これが。

「ど、どうかしましたか？」

　イリスさんの不安そうな声が聞こえ、ハッとした。

　このまま顔をそらし続けたら、イリスさんがまた嫌われたと思ってしまうかもしれない。

　いや、確実にそう思うだろう。

「な、なんでもないよ」

　奥義ピントずらしを使ってイリスさんを見ると、あはあはと笑いながら答えた。

　まずい。ピントをずらしても、むっちりとした太ももが脳裏に焼き付いてしまっていて、あんまり意味が無い。

　ていうか、ブラウス一枚の姿がぼやけていると、なんだか余計にえっちに感じる。

「顔が赤いですけど大丈夫ですか？」

　聞こえる心配そうな声と、近づいて来るぼやけたイリスさん。

　どうしよう。困った。

「うどん」

「あー！　また“ん”が付きましたよ！　みりすの負けでーす！」

　聞こえた声にドキッとした。

「アリスちゃんとありすちゃん。そろそろお風呂に入りませんか？」

　俺に近寄って来ていたイリスさんが、二人に意識を向けたようだ。

　助かった。

　二人に感謝しつつ、ホッと胸を撫で下ろす。

「みりす！　一緒にお風呂に入りましょう！」

「えー、まあいいけど……」

　ありすの手を取って立ち上がりながら声を上げる百合園さんと、やれやれと言った様子で立ち上がるありす。

「じゃあ行ってきまーす！」

　ありすの手を引きながら俺達に向かって声を上げる百合園さん。

「ちょ、引っ張らないでよ！　痛いってば！」

　百合園さんに手を引かれ、ぼやきながら歩くありすが俺を見た。

「じゃあお姉ちゃん、ちょっとお風呂に入ってくる」

　そう言って、ありすは百合園さんから引きずられるようにリビングから出て行った。

　ありすよ、大変だろうけど頑張ってくれ。

　そう思いながら手を振っていた俺は、視界の隅に映った“それ”にギクッとした。

「二人がお風呂から上がるまで、なにをしていましょうか？」

　俺に近寄りながら声を上げるイリスさん。

　ヤバい。もしかして凄くヤバい状況なのでは？

　ブラウス一枚のイリスさんと二人きり。しかも――。

「あまねさんと一緒にお風呂に入れて嬉しいです」

　嬉しそうに声を上げたイリスさんに、やっぱりそう来るか、と思って冷や汗が噴き出た。

　お風呂って一人で入るものなんじゃないですかね。

　そう言いたいけど言えるわけもない。

「わふ」

　追い詰められ、泣きそうになっていたらチビ助が吠えた。

　視線を下げるとチビ助が心配そうに俺を見上げていた。

　チビ助も一緒にお風呂に入る？　そうしてくれると助かるんだけど。

女の子になったら修羅場だった件 - 第八十六話　夢から覚めたら天国と地獄が待っていた件

「あれ？」

辺りを見回して首を傾げた。

なぜか道路に立っている。しかも制服を着て。

これはいったいどう言うことだ。

俺は百合園さんの家のリビングにいたはずだ。

ありすと百合園さんがお風呂に入りに行き、俺はイリスさんと一緒にリビングで待っていた。

二人が帰って来たら、イリスさんと一緒にお風呂に入ることになる。

追い詰められた俺は逃げることにした。

逃げると言っても百合園さんの家から逃走するわけじゃない。

イリスさんとお喋りをしつつ、あくびを噛み殺したり指で目元を擦ったりして眠気に襲われているフリをした。

そして座っていたソファにもたれかかり、寝たフリをしたのである。

要するに寝たフリをして逃げることにしたのだ。

そして……。

空を見上げると、夜だったはずなのに青空が広がっている。

　しかも制服を着て道路の真ん中に突っ立っていて、ここに至るまでの記憶がスッポリと抜け落ちているこの状況。

「以前もこんなことがあったな」

　男の俺の夢を見た時と似ている。

　ならこれは夢か。

　寝たフリをしていたはずなのに、どうやら本当に眠ってしまったようだ。

　だがおかしい。

　夢ってこんな感じじゃないだろ。

　夢を夢だと自覚し、寝る前のことも、前回の夢の内容までも明確に覚えているなんて。

　そんなの――。

「夢っぽくない」

　辺りを見回しながら呟いた。

　これが夢ではないのなら、いったいなんだ。

　とそこで、保母さんを先頭に幼稚園児が歩いて来るのが見えた。

　ほどなくして行列が俺の前に到達した。

「おはよう」

　にっこりと笑い、手を振りながら挨拶をしてみた。

「いちごたべたい」

「たべたいよね」

「うん、たべたい」

「ぼくはめろんがたべたい」

「りょうたくん、くうきよめないね」

　俺の挨拶にまるで反応せず、幼い声で可愛らしい会話を交わす幼稚園達と、その会話を聞いて楽しそうにクスクスと笑ってる保母さん。

　挨拶をした人を保母さんや幼稚園児が無視するなんて変だ。

　百歩譲って無視されたにしても、まるで反応しないなんてあり得ないだろう。

　これは無視したわけじゃない。俺が見えてないんだ。

　前回の夢もそうだったな。

　いや、そもそもこれは夢なのか。

　夢ではないのだとしたら。

「ここは男の俺がいた世界で、今の俺は魂だけの存在……とか？」

　うーん、そんなことがあるだろうか。

　魂なんてモノが本当に存在するのかもわからないし。

　でも男だったはずの俺が女になっちゃったわけで。

　それを思うと非現実的な現象を全否定する気にもなれないんだよなぁ。

　それはともかく――。

「前回は俺の部屋だったのに、今回はなぜ道路？」

　とそこで、あることに気が付いた。

　ここは俺がいつも通っている通学路だ。

　と言うことは、ここで待っていれば男の俺とありすが歩いて来るってことか。

「いや」

今さっき目の前を幼稚園児の行列が通過したからな。

スマホで時間を確認しようにもスマホが無い。

でも幼稚園児が登園する時間なのだから、男の俺とありすはすでに学校に登校しているはずだ。

この夢がいつまで続くかわからないけど、とにかく学校に行ってみるか。

そう思い、学校に向かって歩き出した。

◆

校内はとても静かだ。

すでに授業が始まっているんだろう。

俺の姿が見えないのならコソコソする必要は無いんだけど、身を隠しながら歩いている。

そうやって自分の教室に到着し、扉についているガラス窓から中を覗き込んだ。

「あ、いた」

俺の席にちゃっかり座り、真面目に授業を受けている俺。

こうして自分を見るって言うのも変な気分だ。

「で、どうしろと？」

授業を受けている男の俺を眺め続けても意味が無いと思う。

「あ、そうだ」

そう呟くと扉から離れ、ある場所に向かった。

到着したのは百合園さんのクラス。

女の俺の世界の百合園さんはトラブルメーカーだけど、男だった頃、そういう話を聞いたことなんて無かったんだよな。

二大美少女の一人で、通り名は深窓姫(しんそうき)。

いくら抜きん出た美少女でも、トラブルメーカーに深窓姫なんて淑やかな通り名が定着するのは変だ。

現に女の俺の世界の百合園さんには、深窓姫なんて通り名は付いていないし。

と言うことは、向こうの百合園さんとこっちの百合園さんには違いがあるのかもしれない。

そう思い、こっちの百合園さんを見に来たのだ。

「あ、いた」

扉に付いているガラス窓から中を覗き込み、すぐに見つけた。

黒髪だらけの中に銀髪だからよく目立つ。

やや俯き加減でノートにペンを走らせている百合園さんは、時折顔を上げて黒板を見ている。

「おお、真面目に勉強してるっぽい」

あの百合園さんがあんなに真面目な顔をしているなんて。

「百合園さんってあんなに綺麗だっけ」

真面目な顔をしている百合園さんは、息を飲むほど美しい。深窓姫と呼ばれるのも納得だ。

そう言えば……。

「こっちのありすと百合園さんって、どんな関係なんだ」

俺が男だった頃、ありすから百合園さんの話を聞いたことなんて一度も無い

し、ありすと百合園さんが話している姿なんて一度も見たことが無い。

「こっちの百合園さんは、ありすと関わりが無いのかな……」

ありすと百合園さんに関わりが無いのなら、百合園さんの置かれた環境って。

こっちの百合園さんは男の俺とは当然ながら関わりが無い。

ありすとも関わりが無い。

なら高梨さんとも砂庭さんとも夜乃宮さんとも関わりが無いことになる。

そしてみんなでキャンプに行かなければ、イリスさんと打ち解けることもできない。

つまりこっちの百合園さんは一人ぼっちだと言うことだ。

あんなに明るくて、元気で、いつも楽しそうな百合園さんが一人ぼっちだなんて。

ありすにちょっかいを出しまくって、ありすから怒られてフルボッコにされて、それなのにかまってもらえて大喜びで。

百合園さんは本当は寂しがり屋なんだ。

それなのに、このままだと百合園さんはイリスさんと打ち解けることができず、友達もできず、ずっと一人ぼっちのままだ。

余計なお世話かもしれないけど、このまま放っておけない。

だって俺は“本当の百合園さん”を知ってしまったのだから。

「そうだ」

アイツなら本当の百合園さんを知っている。

そう思い、急いで自分の教室に向かった。

◆

授業が終わり、廊下が騒がしくなった。

だがしかし――。

「どうしたらいいんだ……」

自分の席に着き、次の授業の準備をしている男の俺の横に立ち、両手を握り締めながら呟いた。

どんなに叫んでも俺の声は届かない。

コイツなら百合園さんを孤独な世界から救い出してあげることができるのに、それを伝えることができない。

俺も孤独だったけどありすがいた。百合園さんにもイリスさんっていう姉がいるけど、こっちの世界では仲違いしたまま。

今の百合園さんは本当に一人ぼっちなんだ。それがどれだけつらいことか。

「なあ、周（あまね）。お前は百合園さんを面倒な厄介者だと思っているのか。関係が切れてせいせいしているのか」

その俺の問いかけに、男の俺は反応しない。

「お前は知っているはずだ。本当の百合園さんを。寂しがり屋でかまってちゃんで、そしてとても優しい子だってことを。そんな子が暗闇の中で一人ぼっちで泣いているんだ。それを放っておくのか。もしそうするつもりなら、お兄ちゃん本気で怒るぞ」

そう言って、男の俺の胸ぐらを掴もうとした。

だけど俺の手は虚しくすり抜けてしまう。

クソ、どうすればいいんだ。

とそこで、それなりに騒がしかった教室が急に静まり返った。

何事かと思って辺りを見回し、あるモノが視界に映った。

「ふ、ふんっ」

教室の入り口に立ち、腕を組んで鼻を鳴らしているありす。

教室が静まり返ったのはありすが来たからか。

俺が男だった頃、ありすは学校では俺に関わろうとしなかった。

それなのにありすが俺の教室に来たから、みんな驚いているんだろう。

「ありすちゃんだ。やっほー」

ありすに気付いた男の俺が、にっこりと笑いながらありすに声をかける。

ザワつく教室。

やっほー、じゃねえよ。俺のキャラが完全に崩壊しちゃってるだろうが。ちょっとは俺っぽく振る舞おうとしろよ。

「くっ」

呻きを上げたありすがギロリと男の俺を睨む。そんなありすの顔がみるみる真っ赤になってゆく。

「何様なのよ！」

怒声を上げたありすがズカズカと教室の中に入って来た。

静まり返っている教室内に走る緊張。

こっちのありすは、学校では猫を被って理想の美少女を演じているはずだ。そのありすが激怒しているのだ。みんなが混乱するのも当然だ。

「なんで一人で登校したのよ！」

男の俺のそばまでズカズカと歩いて来たありすが、男の俺の机をバンッと叩きながら声を張り上げた。

「日直だったから」

そう言っててへっと笑う男の俺。

　それを見たありすのこめかみにビキッと血管が浮き上がった。

「なんで私に声をかけなかったのよ！」

　バンバンと机を叩きながら怒声を上げるありす。

「だって声をかけたらありすちゃん怒るかなと思って」

　怒り心頭のありすに対し、へらへらと笑いながら答える男の俺。

　その返答を聞いたありすのこめかみに、さらにビキビキと血管が浮き上がった。

「怒るわよ！　怒るけど声をかけなさいよ！　私に怒られるのを覚悟して声をかけなさいよ！」

　バンバンと机を叩くありすがわがままっぷりを発揮している。

　でも教室で、大勢の生徒の前で本性をさらけ出すなんて。

　向こうのありすは姉の中身が俺になったことで大きな変化が起きた。

　男の俺の中身が変わったことで、こっちのありすにも大きな変化が起きているのか。

「あはは。お兄ちゃんに置いていかれて寂しかったんだね。ありすちゃん可愛い」

　あはあはと笑っている男の俺が、一番言ってはいけないことを口にしてしまった。

「お、おま、お前……」

　男の俺が言ったことは当たっていると思う。

　ありすが激怒している理由。それは男の俺がありすに声をかけず、一人でさっさと登校してしまい、寂しかったんだろう。

　だがそれを言ったらダメだろ。ありすの性格を考えれば確実にキレるのがわかり切っている。

それなのに……。

「あ、謝れ。悪いことは言わないから謝れ。じゃないと本当に殺されるぞ」

冷や汗を噴き出しながら男の俺に言い聞かせたけど、残念ながら俺の声は届かない。

焦ってありすを見ると、燃えるような真っ赤な顔で男の俺を睨みながらブルブルと震えている。

男の俺よ、覚悟するんだな。

殺されるっていうのは大袈裟だけど、半殺しは確定だ。

「だったら……なんなのよ」

口を開いたありす。その声はか細く震えていた。

男の俺を睨み付ける青い瞳。その目尻に溜まった涙。

両手を上げたありすは、その両手で顔を覆う。

微かに聞こえる嗚咽。

「私のことを見てくれるようになったと思ったら、私を置いて行っちゃうし。お兄ちゃんがなにを考えてるのかわからないよ……」

両手で顔を覆ったまま、嗚咽交じりの震える声を上げたありすは、踵を返してトボトボと歩き出した。

そしてそのまま教室を出て行ってしまった。

キレると思ったらまさかの展開。

兄の態度が急に変わり、ありすは混乱しているんだ。でもきっと喜んでいたんだろう。だけど男の俺に置いていかれ、なにがなんだかわからなくなってしまったんだろうな。

男の俺を見るとポカーンとしていた。

　まさかありすが泣いてしまうとは思ってもいなかった、と言ったような顔だ。

「追いかけなくていいのか」

　そう男の俺に問いかけた。

　お前はありすを疎ましく思っているのかもしれない。

　だけど、泣いてしまった妹を放っておくのか？

　お前は俺と同一の存在なんだろ？

　だったら――。

「あ、ありすちゃん！」

　ポカーンとしていた男の俺は、ハッとすると一瞬で顔を青ざめさせて勢いよく立ち上がった。そして駆け出すと――。

「うわあ！」

　足がもつれたのか、勢いよく転んでしまった。

「ありすちゃん！　ありすちゃんごめんなさい！　泣かせるつもりは無かったの！」

　転んだ男の俺は、痛がる素振りも見せず、叫びながら立ち上がった。そしてありすの後を追って教室から駆け出した。

「それでいいんだよ」

　泣いたありすを放っておくようならブッ飛ばす所だった。

　まあ、ブッ飛ばしたくてもブッ飛ばせないけど。

　ジト目でそんなことを思いつつ、男の俺を追って教室から出ようとした。

「うわあ！」

「きゃあ！」

廊下の方から聞こえた二つの声。

一つは男の俺の声だと思う。

もう一つは――。

「百合園さん？」

聞こえた女の子の悲鳴は百合園さんの声に似ていた。

走って教室から出ると、男の俺が廊下に突っ伏していた。その男の俺のそばに尻餅を付いている百合園さん。

男の俺が教室から勢いよく飛び出し、ちょうど通りかかった百合園さんにぶつかってしまったようだ。

「だ、大丈夫ですか？」

尻餅を付いたお尻が痛いのか、顔をしかめながら男の俺に声をかける百合園さん。

状況から見て悪いのは男の俺だ。それなのに男の俺を心配するとは。

「根は良い子なんだよな、百合園さんは」

そう呟きながらうんうんと頷いた。

俺はこっちの百合園さんのことをよく知らないけど、どっちの百合園さんも根は良い子ってことだ。

「ありすちゃん！」

廊下に突っ伏していた男の俺が、叫びながらガバッと顔を上げた。

「は、はい！」

ビクッと震えた百合園さんが返事をする。

男の俺はありすの名前を叫んだんだろうけど、百合園さんの名前もアリスだか

らな。百合園さんにしてみれば、自分の名前を叫ばれたと思ったのだろう。

「え！？　アリスちゃん！？」

　百合園さんの返事を聞き、百合園さんを見た男の俺が驚いたように声を上げた。

「え？　あ、はい」

　赤い瞳を白黒させながらコクンと頷く百合園さん。

　自分の名前を呼ばれ、返事をしたら驚かれ、混乱しているようだ。

「ちょうどよかった！　ありすちゃんが大変なの！」

「え？　大変？　私がですか？　私は特に大変では……」

　男の俺の言葉に、混乱している様子の百合園さんが答える。

　男の俺よ、落ち着け。百合園さんが困っているぞ。

　ていうか、俺が百合園さんを困らせるって凄い状況だな。基本逆だから新鮮だ。

「アリスちゃんじゃなくてありすちゃんだよ！」

「ですからアリスは私ですが、なにか？」

　男の俺の言葉に首を傾げて問い返す百合園さん。

　男の俺が焦りまくっているせいで、言っていることが百合園さんにまったく伝わっていない。

「ああ、もう！」

　痺れを切らしたのか、男の俺が百合園さんの手をガシッと掴んだ。

「え！？　ちょ！」

　いきなり手を掴まれ、驚いたように目を見開いた百合園さんの顔がボンッと赤くなった。

　あの百合園さんが手を握られただけで赤くなるとは。

「アリスちゃんはありすちゃんの親友でしょ！　力を貸して！」

　そう言って百合園さんの手を引っ張りながら立ち上がる男の俺。

「ちょ！？　なにがなんだかさっぱり――ひゃあ！」

　混乱している百合園さんは、男の俺から強引に立たされて悲鳴を上げた。

「わからなくても大丈夫だよ！　ありすちゃんとアリスちゃんは相性が良いんだからすぐに仲良くなるって！　だから付いて来て！」

「ひゃあああああああああ！」

　叫びながら駆け出す男の俺と、悲鳴を上げながら引きずられてゆく百合園さん。

「大丈夫なのかあれは……」

　思わずジト目で呟いた。

　俺の姿は見えないし、声も届かない。だから何もできない。だけど心配だから二人を追いかけよう。

　そう思って駆け出そうとしたその時――。

「水無月くんがありすちゃんを泣かせて百合園さんを連れ去った……」

　聞こえた声にドキッとして視線を向けると、教室の入り口に高梨さんが立っていた。

「水無月くん、百合園さんの手を握ってたねぇ」

　高梨さんの隣に立った砂庭さんが、にこにこと笑いながら呟く。その呟きを聞いた高梨さんがピクンと震えた。

「凛ちゃん、水無月くんのこと、ちょっと気になってるんでしょ？」

「は、はあ！？」

　砂庭さんの言葉に頬を染めた高梨さんが、まるでごまかすように声を張り上げた。

　え？　高梨さんが男の俺のことを気にしていた？　マジで？

「水無月くんって優しそうだもんねぇ。素直じゃない凛ちゃんのすべてを受け入れてくれそうだもんねぇ」

「や、優しそうって言うのは否定しないけど、別に気にしてたわけじゃ……」

　ニヤニヤしている砂庭さんが肘で高梨さんをつつきながら声を上げ、つつかれている高梨さんは顔を真っ赤にさせながらモゴモゴと呟いている。

　高梨さんのこの反応……。

　まさか本当に俺のことを気にかけてくれていたのか。

　高梨さんの性格上、嫌ったりはしないと思っていたけど、俺なんか眼中に無いと思っていた。

　それがまさか――。

「うおおおおおおおおおお！　声をかけておけばよかったあああああああああ！」

　頭を抱えて叫ばずにはいられなかった。

「凛ちゃん、動くなら早い方がいいと思うよ。相手が百合園さんだとさすがに分が悪いし、早急になんとかしないと手遅れになるかもしれないよ」

　その砂庭さんの問いかけに、高梨さんは何も答えなかった。

　べ、別に手遅れになっても私と関係無いし！　とか言うと思ったのに、否定しないなんて。

「なんだか面白そうだな！」

立ち尽くしている高梨さんの横に、夜乃宮さんがひょっこり現れた。

はふぅ、夜乃宮さんは相変わらず可愛いなぁ。

「くうちゃん、おいでおいで。頭なでなでしてあげるよ」

その場にしゃがみ、両手を広げて呼んでみた。

だけど夜乃宮さんは反応してくれない。

いつもなら大喜びで駆け寄って来てパタパタしてくれるのに。

悲しい。

「ちょっと見に行ってくる！」

そう言って駆け出す夜乃宮さん。

「そ、ソラ！」

廊下を駆けてゆく夜乃宮さんに向かって声を張り上げた高梨さんは、真っ赤な顔で砂庭さんを見た。

「そ、ソラが迷惑をかけると悪いから私も行ってくる！」

そう砂庭さんに言った高梨さんが駆け出した。

「まさか百合園さんが関わってくるなんて。さすがに相手が悪いけど、でも凛ちゃんなら、きっと……」

駆け出した高梨さんの背中を見つめながら呟いた砂庭さんは、高梨さんを追いかけるように駆け出した。

「俺も高梨さんを応援したい」

俺にとって高梨さんは高嶺の華だった。

綺麗で可愛くて、ちょっと気が強そうだけど実際は凄く優しくて。

　高校に入学して、初めて高梨さんを目にした時からずっと気になっていた。でもぼっちの俺とは釣り合わないし、卒業まで関わることは無いだろうと思っていた。

「気付け男の俺！　あの高梨さんと仲良くなるチャンスなんだぞ！」

　そう叫んだ俺は全力で駆け出した。

　◆

「気付いてええええええええええ！」

「きゃあ！」

　全力で廊下を走りながら叫んだら、すぐそばで悲鳴が聞こえた。

「だ、大丈夫ですか！？」

　聞こえる声。

　ハッとして目を開けると、すぐそばに百合園さんの顔があった。

　いや、違う。百合園さんより大人びた顔だ。

「……イリスさん？」

　視界に映っているのはイリスさん。そしてここは……。

「気持ち良さそうに眠っていたのに、急にうなされ出して。怖い夢でも見たんですか？」

　イリスさんに問いかけられ、ようやく状況を理解した。

　俺は眠っていたようだ。その俺を、イリスさんが膝枕してくれていたようだ。

　てことは、さっきのはやっぱり夢？

　でも最初から最後まではっきりと覚えている。

　とても夢とは思えない。

　だけど俺は寝ていて、こうして目を覚まして、ならあれはやっぱり夢だったってことになるわけで。

　ただの夢だったとしても続きが気になる。

　あの後、男の俺とありすは仲直りできたのだろうか。百合園さんはどうなったのか。そして高梨さんは……。

　なんだか無性に高梨さんに会いたくなってしまった。

「落ち着きましたか？」

　聞こえた声にハッとしてイリスさんを見た。

「あ、はい、もう大丈夫です。心配をかけてしまってごめんなさい」

　イリスさんの膝を枕にしたまま謝った。するとムッとしたようなイリスさんが、俺の額を指でツンとつついた。

「二人きりの時はお姉ちゃんになってくれるって約束ですよ？」

　そのイリスさんの言葉を聞き、そう言えばありすや百合園さんの姿が無いことに気が付いた。

「二人は？」

　体を起こしながらイリスさんに問いかける。

「寝ちゃいましたよ」

　イリスさんの答えを聞きつつ、壁にかけられている時計を見た。

　夜中の一時半か。

　眠ってしまったのはたぶん八時頃だから、けっこう寝ていたようだ。

「あまねお姉ちゃんも起きたことですし、じゃあお風呂に入りましょうか」

「え？」

　お風呂？　お風呂って……。

「ま、まだ入ってなかったの？」

「はい！　もちろん！」

　俺の問いかけに、満面の笑みを浮かべて大きく頷くイリスさん。

　もちろんって……。

　上手く回避できたと思ったのに、できていなかった。

　ていうか、みんなが寝静まった夜中に二人きりでお風呂とか、状況が悪化しただけのような気が……。

　その後、真夜中にお風呂でイリスさんと体を洗いっこするという、天国のような地獄を味わうハメになった。

女の子になったら修羅場だった件 - 第八十七話　お兄ちゃん最大のピンチな件

　朝食を摂り終え、広いキッチンで食器を洗う。

「はぁ……」

　洗い物は割と好きなんだけど、溜息が漏れてしまう。

　原因はイリスさんと一緒にお風呂に入ったこと。

『明日も一緒にお風呂に入りましょうね、あまねお姉ちゃん』

　そう言って、イリスさんは満面の笑みを浮かべていた。

　あんな笑顔であんなことを言われてしまったら、断るなんて不可能だ。

　だけど……。

「はぁ……」

　考えると溜息が漏れてしまう。

　ありすと一緒にお風呂に入ることが日常化し、最強の砂庭さんとのお風呂を経験し、キャンプに行った時、温泉でみんなの裸を見てしまったことで、女の子の裸にだいぶ耐性が付いたと思う。

　だからイリスさんと一緒にお風呂に入り、体を洗いっこすると言う天国のような地獄を味わっても、鼻血を出したり気絶したりせずに済んだ。

　だけどまたあれを味わうのかと思うと、気絶した方が楽かもしれない。

「男だったら最高にハッピーな状況……いや」

女だからどうにかなっているわけで、男だったら最悪の状況に陥っていたかもしれない。

まあ、イリスさんが男の俺と一緒にお風呂に入るなんてあり得ないけど。

俺達を監視していると思われる忍者メイドさんが、どうにかしてくれないものか。

そんなことを思いながら再度溜息を漏らした。

「ん？」

カサッと微かな音が聞こえ、音が聞こえた方に視線を向けた。

シンクの上にちょこんと乗っている紙のような物。

小さく折り畳まれているその紙を手に取り、辺りを見回した。

リビングの方から百合園さんの笑い声が聞こえてくるだけで、キッチンには俺しかいない。

「わう？」

あ、いや、足元にチビ助がいる。

とにかく、俺とチビ助以外、キッチンに人影は無い。

洗い物を始める前、シンクにこんな物は乗っていなかった。

と言うことは、忍者メイドさんの仕業か。

ジト目でそう思いながら紙を広げた。

――あまねさま、ふぁいとです！

紙に書かれていた文章を読み、思わずその場に崩れ落ちそうになった。

応援している。忍者メイドは俺を応援している。

超が付くお嬢さまであり、忍者メイドの雇い主であるイリスさんが、俺のような有象無象の凡人に懐いていて、それを面白くないと思ってくれていたら、この天国のような地獄から逃げ出す口実になったのに。

それなのに、面白くないと思われるどころか応援されてしまっている。

口元に手を当て、声を押し殺して泣くしかなかった。

「わう」

俺の心中を察したのか、心配そうに声を上げたチビ助が、俺の足に顔を擦り付けた。

「チビ助……」

泣きながらその場にしゃがんだ俺は、チビ助を抱き締めた。

はぁ、モフモフが安らぎを与えてくれる。

「うう、チビ助がそばにいてくれるのが救いだよぉ……」

ありすは百合園さんに捕まっちゃってるし、頼れるのはチビ助だけだ。

◆

学校に登校するため、ありすと百合園さんと一緒に百合園さんの家を出た。

「いってらっしゃーい！　みんなが帰って来るのを待ってますよー！」

俺達に向かって手を振りながら声を張り上げるイリスさん。

大学生のイリスさんはまだ夏休みが終わっていないため、一人でお留守番だ。

たぶんせっせと押し花を作りながら俺達の帰りを待つのだろう。

それを思うとほっこりする反面、帰って来たらまたお風呂が待っているのかと思うと気が重い。

寝たフリ作戦は失敗したからな。他に良い手がないか考えないと

「行ってきますよー！」

手を振り返す百合園さんが満面の笑みを浮かべて声を張り上げた。

そんな百合園さんの両頬は赤く腫れ上がっている。

先ほどありすからフルボッコにされたのだ。

苦笑いを浮かべながらイリスさんに手を振り返し、ちらりとありすを見る。

「ふんっ」

こめかみに血管を浮き上がらせているありすは、鼻を鳴らすとゲシッと百合園さんの足を蹴った。

「痛いです！」

痛いと言いつつ嬉しそうな百合園さん。

なぜありすが怒っているのかと言うと、まあ、怒って当然と言うか。

朝リビングで百合園さんが手品を披露すると言い出した。

助手に選ばれたありすは、百合園さんから両手を後ろで縛られた。

ありすも手品を見たかったのか、特に抵抗しなかった。

そして――。

ありすをソファに押し倒した百合園さんは、ありすの脇腹をこちょこちょし始めたのだ。

笑うありす。

手品はいつ始まるのかと傍観している俺とイリスさん。

ありすをこちょこちょし続ける百合園さん。

待てど暮らせど手品は始まらず、ただただありすの笑い声がリビングに響き続けた。

手品と言うのは嘘で、百合園さんはありすをこちょこちょしたかっただけらしい。

と言うことで、ありすがキレたのは必然であり、百合園さんがフルボッコにされてしまったのも必然である。

怒られて当然だ。

擁護のしようがない。

ほんと、百合園さんには呆れてしまう。

でも――。

「そう言えば、みりすのおっぱいは小さくて可愛いで――へぎゅっ」

にっこりと笑って声を上げた百合園さんは、言い切る前にありすからスッパーンッとビンタを喰らった。

「お、大きければいいってものじゃないのよ！」

燃えるように真っ赤になっているありすは、両手で胸を隠しながら涙目で叫ぶ。

「ほ、褒めたのですが。私なんて小さくなりたくてもなれな――へぎゅっ」

言い訳をした百合園さんだけど、言い切る前にありすからスッパーンッとビンタを喰らった。

「自慢にしか聞こえないのよバカ！」

さらに涙目になって怒声を上げるありす。

「な、ナイスビンタです！」

頬を真っ赤に腫らしながら、グッと親指を立てて声を上げる百合園さん。

　そんな百合園さんをジト目で見ているありすは、呆れたように溜息を漏らし、スパンと軽く百合園さんの頭をはたいた。

　頭をはたかれて嬉しそうににひひと笑う百合園さん。

　ありすに出会う前の百合園さんはどんな生活を送っていたのか。

　夢で見た百合園さんのように、一人で学校に登校し、授業を受け、誰とも会話せずに一人で下校し、一人で過ごす。

　きっとそんな生活を送っていたんだろうな。

　一人ぼっちの百合園さんには退廃的な美しさがあったけど、俺はバカっぽい百合園さんの方が好きだ。

　こっちの百合園さんは本当に楽しそうで、眩しいほどに輝いている。

　フルボッコにされて輝くと言うのも変な話だけど。

「あ、そうだ！　あまねさん聞いてくださいよ！」

　そう言って百合園さんが俺の腕に抱き着いてきた。

「昨日みりすと一緒に寝たんですけど、寝る前までツンツンしていたのに、寝たらお姉ちゃーん、お姉ちゃーんって言いながら私に抱き着いてきて、ほっぺにちゅっちゅ――へぎゅうっ」

　昨日の出来事を俺に説明していた百合園さんは、言い切る前にありすからビンタを喰らった。

「ゆ、夢にお姉ちゃんが出てきたからだよ！　別にあんたにちゅうしたかったわけじゃない！」

　真っ赤な顔に涙目で必死に言い訳をするありす。

　なんだかんだ言って一緒のベッドに寝ている当たり、ありすもかなり百合園さんに気を許しているようだ。

「ほらほらみりす、いつだってちゅうしていいですよ！」

　真っ赤に腫れた頬を指でツンツンしながらありすを挑発する百合園さん。

「じゃあ遠慮なくビンタを喰らわせてあげるわよ！」

　百合園さんに挑発され、ビキッとこめかみに血管を浮き上がらせたありすが、怒声を上げながらビンタを繰り出した。

「へぎゅうっ」

　スッパーンッと乾いた音が響き、百合園さんの顔が跳ね上がる。

　ボコられている当人が挑発しているのだからどうしようもない。

「み、みりすの愛と言う名の鞭を全て受け切りたいですが、このままだと死にそうなので一時撤退です！」

　朝からビンタを喰らい続けてさすがに限界なのか、百合園さんが逃げ出した。

「ま、待ちなさい！」

　タッタカ走ってゆく百合園さんに向かって声を張り上げたありすが駆け出した。

「わーい！　みりす、こっちですよー！　愛する私を捕まえるので――へぎゃっ」

　走りながら振り返ってありすを挑発していた百合園さんが、ゴンッと電柱にぶつかってドサッと地面に倒れた。

「ちょ、バカ！」

　驚いた様子のありすが倒れている百合園さんに駆け寄った。そしてその場にひざまずいて百合園さんを抱き起こす。

「大丈夫！？　頭打ったんじゃないの！？」

　なんだかんだで百合園さんを心配するありす。

「み、みりす……」

　微かに声を上げた百合園さんは、震える手を伸ばした。

そして――。

伸ばされた百合園さんの手がガシッとありすの胸を掴んだ。

「揉むことすら不可能なほどに小さい。だがそれがいいのです」

キリッと表情を引き締めて声を上げる百合園さん。

ありすのこめかみにビキッと血管が浮き上がり、百合園さんの悲鳴が青空に響き渡った。

百合園さんはほんとアホだなぁ。

でも、うん、やっぱり俺はこっちの百合園さんの方が好きだ。

しかし、昨日見た夢。あれは夢なのか、それとも違うのか、よくわからない。

だけど男だったはずの俺がここにいるのだから、女だったはずの俺が男として生活を送っていてもおかしくない。

そしてその光景を夢として見たのなら……。

お前は本当の百合園さんを知っているのだから、そっちの百合園さんのこと、頼んだぞ。

「ちっぱいで悪いか！　ちっぱいで悪いのかあああああああ！」

「な、ナイスビンタ！　へぎゅっ、へぎゅうううううっ」

怒声を上げながら百合園さんに連続ビンタを喰らわせるありすと、グッと親指を立てながら悲鳴を上げる百合園さん。

そっちの百合園さんを孤独から救い出すのはいいとして、調子に乗らせると大変なことになるからほどほどにね。

そうジト目で思いつつ、さすがに百合園さんが死んじゃいそうだったから一応ありすを止めた。

◆

どうにか学校に到着し、内履きに履き替えるために靴箱を開けた。

百合園さんは、ありすが泊まりに来ているのが嬉しくて有頂天になっているのだろう。

でもあのままありすを挑発し続けてありすからボコられ続けたら、本当に死んでしまいそうでちょっと心配だ。

とはいえ、そうなるように百合園さんが誘っているのだから始末が悪い。

まあ、ありすも一応手加減しているだろうし、放っておいても大丈夫かな、たぶん。

そんなことを思いながら靴箱の中から内履きを取り出そうとした。

「ん？」

カサッと手に何かが当たり、首を傾げながら靴箱の中を覗き見た。

内履きの上に乗っている西洋封筒。

まさかラブレターか。

副会長に続き、またもや猛者が現れたのか。

ドキドキしながら周囲を見回す。

ありすや百合園さんに見つかったら確実に騒ぐだろうからな。

俺の心配をよそに、二人の姿は無かった。

追いかけっこでもしているのかもしれない。

ホッと胸を撫で下ろしつつ、封筒を取り出した。

「……え？」

差出人は誰かな、と思って封筒の裏を見て、思わず固まってしまった。

封筒の裏、その隅に書かれた差出人の名前は、俺がよく知っている人物だった。

――高梨凛花

確かにそう書かれている。

高梨さんがどうして？　伝えたいことがあるのなら言葉で伝えるはずだ。それなのにどうして手紙なんて。

まさかイタズラか？

そう思いつつ、急いで封筒を開け、中に入っていた便箋を取り出した。

――あまねへ。話したいことがあります。放課後中庭の東屋に一人で来てください。

便箋にはそんな丁寧で他人行儀な文章が綴られていた。

便箋を封筒に戻し、その封筒を鞄の中にしまう。

「イタズラ……じゃないと思う」

絶対とは言えないけど、この整った綺麗な字は高梨さんの字っぽい。

でも、イタズラじゃなかったとしたら、どうして……。

嫌な予感がした。

気軽に話せないこと。

こうして手順を踏まなければ伝えられないようなこと。

思い当たる節はある。

高梨さんを生徒会長にするために、俺が暗躍していること。

それを高梨さんに知られてしまったのだとしたら。

「まさか……」

　砂庭さんが話したのかもしれない。

　もし砂庭さんが話したのだとして、高梨さんが俺に手紙を書いて呼び出したのだとしたら。

「高梨さんは……怒っている」

　怒っていなければ、手紙なんて回りくどい方法を取らないはずだ。

　高梨さんは優しいから、怒りを鎮め、冷静になるためにこういった手順を踏むことにしたのかもしれない。

　そうだとしても、怒っていることに変わりはない。

　急に不安と恐怖が込み上げてきた。

　俺が勝手なことをしたから。

「ど、どうしよう……」

　鞄の取っ手を握る両手が勝手に震える。

　言うつもりだった。高梨さんにはいずれ言うつもりだったんだ。

　準備が整い、失敗しない状況を作り出してから言うつもりだったんだ。

　高梨さんにはトラウマがある。だから失敗しない状況を作り出したかった。

　表舞台に立つ高梨さんの姿が見たかった。

　ずっと憧れていた人が堂々と花道を歩く姿を見たかった。

　でもそれは俺の勝手な思い。

　高梨さんの気持ちを無視した自己中心的な押し付け。

　高梨さんに嫌われたらどうしよう。

やっとできた友達なのに。

ずっと欲しかった親友なのに。

来年も一緒にキャンプに行こうねって言ってくれたのに。

もし嫌われてしまったら……。

少し考えれば、いや、考えなくてもわかったことなのに、どうして俺は勝手なことをしてしまったんだ。

誰よりも先に、高梨さんに話すべきだったのに。

「どうしよう、どうしよう、どうしよう……」

ずっと憧れていた人が大勢の生徒の前に堂々と立ち、拍手喝采を浴びる姿を想像したら、夢中になってしまった。

高梨さんはもっと評価されるべきだと勝手に思い込み、その想いは正しいのだと自分に言い聞かせ、脇目も振らずに突っ走ってしまった。

その結果――。

「い、嫌だ。高梨さんから嫌われるのは嫌だ」

震える膝が折れそうになっている中で、そう呟いた俺は昇降口から駆け出した。

逃げちゃダメだ。逃げたら二度と高梨さんの顔を見ることができなくなってしまう。

だけど怖い。教室に行くのが怖い。

呼吸をするのも忘れて走った俺は、校舎裏に逃げ込み、震える手でスマホを取り出した。

逃げてはいけない。逃げること。それが最悪の選択だと言うことだけはわかっている。

でもどうしたらいいのかわからない。

なら――。

一縷の望みを賭けてスマホを耳に当てた。

「奏くんなら……」

奏くんなら教えてくれるかもしれない。

この窮地を脱するヒントを。

膝がガクガクと震えているのを感じながら、そう切に願った。

女の子になったら修羅場だった件 - 第八十八話　誰にでも欠点がある件

電話に出た奏くんに、俺は無我夢中で説明した。

奏くんは黙って俺の話を聞いてくれた。

不安や恐怖や焦りのせいで、上手く説明できた気がしない。

でも奏くんならわかってくれる。

その思いが安堵となり、体から力が抜け落ち、地面に膝を付いてしまった。

安堵も束の間、すぐに不安と恐怖が押し寄せ、スマホを握る手が震えてしまう。

心臓が破裂しそうなほど激しく鼓動を刻み、上手く呼吸することができない中、ただただ奏くんの答えを待った。

『そうか……』

スマホから聞こえてきたその声は、どこか寂しそうだった。

俺があまりにバカすぎて、呆れられてしまったのだろうか。

奏くんから見放されてしまったら……。

ジワッと涙が溢れるのを感じた。

泣いても何も解決しない。

そう自分に言い聞かせ、制服の袖で目元を拭った。

『あのあまねが暴走するなんてな。いつだって自分のことは二の次だったあのあまねがなぁ』

スマホから聞こえてくるしんみりしたような声。

『はぁ……お兄ちゃん嬉しいよ』

溜息が聞こえ、少し間を置いて奏くんはそんなことを言った。

嬉しいって……全然嬉しそうな声じゃない。

そう心の中で突っ込みを入れてしまった。

『まあ、お兄ちゃんはあまねと一年に一度くらいしか会えないし、そんなお兄ちゃんが知った風にあまねを語るのも滑稽かもしれないが』

どこか寂しそうに語る奏くん。

「ど、どうして寂しそうなの？」

恐る恐る聞いてみた。

『そんなことはない。お兄ちゃんはとっても喜んでいるんだ』

スマホから聞こえてくる声は、やっぱり寂しそうだ。

『ただ、はぁ……お兄ちゃんの知らない所であまねは成長してゆくんだな、と思ったら……はぁ』

今度はしょぼくれた声で溜息を吐きまくる奏くん。

『伊織もいつか彼氏を連れて来るのだろうか』

「え？　彼氏？」

なぜ伊織ちゃんの彼氏の話になっているんだ。俺の相談はどこに行ってしまったのか。

『くすん』

泣いているのか鼻を啜る音が聞こえ、思わずジト目になった。

　伊織ちゃんはなんだかんだ言ってブラコンだし、当分は彼氏の心配をする必要なんて無いと思うけど。

「あ、あの……私の相談についてなのですが」

『あ、ああ、そうだったな。伊織のウエディングドレス姿を想像してしまっていた』

　鼻を啜りながら答える奏くん。

　ウエディングドレスって……。

　妄想が彼氏から結婚式まで飛躍しちゃってる。

『先に言っておくが、お兄ちゃんは正解を知らない。人と人との交わりに正解なんて無いと思っているからな。結局は結果だ。しかもその結果も過程でしかなく、途中まで正しいと思っていたのに、最終的に誤りだったと気づくこともある。その逆、ずっと誤りだと思っていたことが、最終的に正解だったと気づくこともある』

　その奏くんの言葉に無言で頷いた。

　確かにその通りだと思う。

　よかれと思ってやったことが、その人を傷つけてしまう。

　俺が男だった頃のありすがそうだったように。そして今回の高梨さんのことも。

『だからお兄ちゃんは、あまねの暴走を誤りだったと断言できない。高梨さんがどう思っているのかも知らないしな』

「で、でも、怒ってるみたいだよ……」

『手紙だけで判断するのはどうかと思うぞ。まあ、今回のあまねの行動は少々身勝手だったとお兄ちゃんも思うが』

「うん……」

　そう、身勝手だった。

　俺は高梨さんのためを思って行動した。それは本心だ。だけど肝心の高梨さ

んの気持ちを無視してしまった。

『とにもかくにも、高梨さんは話し合いの場を設けようとしている。自分の気持ちをあまねに伝え、あまねの本心を知りたがっているんじゃないのかな』

「私の……本心を？」

『いや、まあ、お兄ちゃんは高梨さんに会ったことが無いし、断言はできないけどな。でも向こうから接触しようとしてくれているんだ。あまねの本心、つまりあまねの行動の理由を知りたがっているんだとお兄ちゃんは思うけどな』

俺の行動の理由を知りたがっている。もしそうなら……。

『高梨さんが怒っているからと言って、高梨さんの意見に合わせても、きっと問題は解決しないだろう。あまねがどうして行動したのか。それをきちんと高梨さんに伝えるべきだとお兄ちゃんは思う。だが伝えるだけではなく、高梨さんの意見にも耳を傾けるべきだろうな。お互いにお互いの思いを伝え合うのが肝心だ。一方通行ではなく相互通行だよ、あまね』

「はい」

優しい声で語る奏くん。その言葉を聞いて頷いた。

一方通行ではなく相互通行。最初からそれができていれば……。

後悔しても始まらない。それに奏くんが言った通り、高梨さんは話し合いの場を設けてくれようとしている。

なら俺の本心を、俺の想いを伝えるべきだ。

だけど……。

今回の一件、俺の暴走の根底にあるのは、たぶん恋愛感情だ。

それに気付いたのはあの夢が原因だと思う。

女になって高梨さん達と仲良くなり、毎日が楽しかった。でもそれは俺が女になったからで、男だったら相手にされないと思っていた。

でもあの夢を見て、高梨さんが男の俺を気にかけてくれていると知って。

いや、あれは夢だから、高梨さんが本当に男の俺を気にかけてくれていたかはわからない。

だけどそういう可能性もあったのかもしれない、と思ったら胸が苦しくなった。

その苦しみは、たぶん恋なのだと思った。

自分でも気付かない内に、俺は高梨さんに恋をしていたんだ。そしてその想いが暴走に繋がってしまったのだと思う。

でもそれを高梨さんに伝えることはできない。

だって今の俺は女なんだ。

暴走の原因は高梨さんのことが好きだから、なんて口が裂けても言えない。

そんなことを言ったら変態だと思われてしまう。

恋愛感情の部分は隠すしかない。

『あまね、人の心を完全に理解するなんて不可能だよ。長年連れ添ったおしどり夫婦だって、お互いの心を完全に理解することはできないだろう。だから人は言葉によって想いを伝える。しかし言葉も万能じゃない。だから勘違いをしたり言い争いになったりする。そうやってお互いの心を確かめ合い、心の距離を縮めてゆくんだよ』

その奏くんの言葉が心に沁み込んでゆく。

見つめ合うだけでは心を理解することはできない。だから言葉を使う。でも言葉も万能じゃないからケンカしてしまうこともある。だけどそれは悪いことではなくて、心の距離を縮めるのに必要なことなんだ。

『お兄ちゃんがあまねに会うのは年に一回。そんなお兄ちゃんが偉そうに言うのもどうかと思うが、あまねは人の心に足を踏み入れるのを怖がっていたように思う。だから自分の意志を殺して相手に合わせてしまう。そんなあまねが相手の意志を無視して行動するなんてな。それほど、あまねの心を狂わせてしまうほど、高梨さんは魅力的な人なんだろうな。お兄ちゃん少し妬けるよ』

人の心に足を踏み入れるのを怖がっていた。

確かにそうかもしれない。

自分の気持ちを抑え、相手に合わせていれば楽だから。

俺はそうやって逃げ続けていたんだ。

俺はいつからそうなってしまったのか。

ありすの性格が変わった頃から、俺はこうなってしまったように思える。

甘えん坊で笑顔がとても可愛かったありす。

そんなありすが急に反発するようになり、俺の行動を制限するようになった。

ありすが何を考えているのかわからなくなり、そして俺は、ありすの気持ちを確かめようともせず、楽な道を選んだ。

ありすに合わせていればいい。

そう思った。

あの時ありすと話し合っていれば。ありすの気持ちを理解しようとしていれば。

『あまね、確認しておくが、高梨さんは女の子なんだな？』

「え？　あ、うん」

突然質問され、とにかく頷いた。

『本当に女の子なんだな？　本当の本当に女の子なんだな？』

「う、うん、女の子だよ。黒髪のツインテールで、見た目はちょっと気が強そうに思えるけど、とっても優しくて、そして可愛い女の子だよ」

同じことを何度も聞いてくる奏くんに説明した。

『あまね、前々から言いたかったことを今言おうと思う』

「は、はい」

　前々から言いたかったこと？　なんだろう。

『あまね、お前は自分で思っているよりずっと可愛いんだ。ありすは、あの子は例外だ。水無月一族の誤算なだけで、お前も十分すぎるほど可愛いんだ。あと性格も良いしな』

　唐突に始まった奏くんの甘やかしに、ジト目にならざるを得なかった。

　それにありすが水無月一族の誤算なら、奏くんはどうなるんだ。

　ありすは見た目は可愛いけど、能力値はそれほど高くない。

　対して奏くんは見た目も能力もハイスペックだからな。

　超が付くシスコンって言う欠点があるけど。

『あまね、お前の自己評価が低いと、ありすも苦しい思いをすることになるんだぞ』

「え？」

『ありすにとってお前は、理想の姉の体現者であり、目指すべき目標であり、だが越えられない壁でもある。そんなお前の自己評価が低いと、それは同時にありすを貶めることになってしまうんだよ』

　俺の自己評価が低いと、ありすを貶めることになる。

　そうか、そうだな、そうかもしれない。

　ありすが俺を慕ってくれているのは間違い無いし、俺の後に続こうとしている思いも感じる。

　それなのに俺の自己評価が低いと、ありすの思いを踏み躙ることになってしまう。

　ありすのためにも、俺は目指すべき姉として堂々としなくては。

『あまね、お前はもっと自信を持つべきだ。高梨さんのことだってそうだ。身勝手な部分もあったかもしれないが、それはお前の強い想いから生まれたもの。時には突っ走るのもいいものだ。そのまま想いをぶつけてみろ。高梨さんはお前の心を狂わせてしまうほどの人だ。お前の想いにきっと答えてくれる。お兄ちゃんはそう思う』

その奏くんの言葉に思わず笑ってしまった。

奏くんは俺の評価が高すぎるんだよ。あと俺に甘すぎる。

それと、もし俺が男のままで、そして似たような相談をしたとしたら、きっと同じようなことを言われていただろうなぁって思う。

俺が男でも女でも奏くんは奏くんのまま。

そう思うとなんだかおかしくて……。

「うん、やってみるよ」

そう奏くんに答えた。

俺の暴走は明らかな失敗だ。高梨さんの気持ちを無視した愚かな行動だ。だけどそうせずにはいられないほど、俺は高梨さんを想っていた。

高梨さんのことはずっと好きだったけど、自分で思っている以上に大好きだったんだ。

その想いを伝えることはできないけど、でも男としてではなく女として、友人として、親友としての想いなら伝えられる。

『時にあまね、高梨さんは本当に女の子なんだな？　実は男の子で、お兄ちゃんが背中を押したから上手くいった、なんてことになったらお兄ちゃんは泣いちゃうぞ？』

また言ってるよ。

この様子だと、俺に彼氏ができた、なんてことになったら発狂しそうだな。

まあ、その心配は無いけどね。

なにせ体は女でも心は男ですし。

女の子になったら修羅場だった件 - 第八十九話　本当に大丈夫なのかわからない件

　静まり返った廊下を歩き、教室へと向かう。

　高梨さんは本当に女の子なのか、と奏くんにしつこく聞かれたせいですっかり遅くなってしまった。

　キャンプに行った時、みんなで撮った画像を送り、どうにか信じてもらったけど。

　まったく過保護なのにもほどがある。

　そんなこんなで教室に到着し、扉の前に立つと深呼吸をした。

　奏くんのお陰でだいぶ落ち着いたけど、やっぱりまだ怖い。

　だけどやるべきことはわかったからな。

　そう自分に言い聞かせ、教室の扉を開けた。

「すみません、遅くなりました」

　静まり返った教室に俺の声が響く。

　席に着いて正面を見ていた生徒達が一斉に俺を見た。

　砂庭さんや夜乃宮さんも俺を見たけど、ただ一人、正面を向いたままの生徒がいた。

　高梨さんだけは俺を見なかった。

「体調が悪いのですか？」

教壇に立っている先生が問いかけてきた。

体調が悪いわけじゃない。でも遅刻した理由をそのまま話すわけにもいかない。

教室の入り口に立ったまま困っていたら、自分の席に着くように先生が言ってくれた。それ以降、先生は遅刻した理由を聞こうとしなかった。

女の子には定期的に体調が悪くなる期間があるからな。

もしかしたら先生は、俺がそういった期間に入って体調を崩し、でも説明しづらくて困っている、と勘違いをして気を使ってくれたのかもしれない。

◆

授業が終わると、砂庭さんと夜乃宮さんが近寄って来た。

高梨さんは自分の席に着いたままだ。

休憩時間になると、高梨さんは真っ先に俺の席に来てくれていたのに。

それを思うと心が苦しくなるけど、でも高梨さんだってきっと居た堪れない心境のはずだ。

「ねえくうちゃん」

俺の膝の上によじ登ろうとしていた夜乃宮さんに、砂庭さんが声をかけた。

「あまねちゃんと二人きりで話したいことがあるの。だから、くうちゃんは凛ちゃんのそばにいてあげて欲しいの」

「凛のそばに？」

砂庭さんの問いかけに、首を傾げて問い返す夜乃宮さん。

「くうちゃんは無敵だし、頼りになるから」

その砂庭さんの言葉に、夜乃宮さんがパアッと満面の笑みを浮かべた。

「任せろ！」

　そう答えた夜乃宮さんは、俺の膝の上によじ登るのをやめると、高梨さんの席に向かって駆け出した。

「あまねちゃん、ちょっといいかな」

　いつものように笑っている砂庭さん。でもその笑顔はどこか影を感じた。

「は、はい」

　コクリと唾を呑み込んだ俺は、返事をすると席を立った。

　たぶん、いや、確実に高梨さんのことだ。

　予想はしていたけど、砂庭さんは高梨さんに全てを話したんだろう。そしてそのことを俺に伝えるつもりなんだと思う。

「ありがとう」

　にっこりと笑って俺にお礼を言った砂庭さんが歩き出し、その砂庭さんに続いて俺も歩き出した。

◆

　砂庭さんが向かったのは、校舎と体育館を繋いでいる渡り廊下だった。

　その渡り廊下からは、中庭やいつもみんなで弁当を食べている東屋が見える。

「ごめんね。凛ちゃんに全部言っちゃった」

　東屋を見つめている砂庭さんが、そうポツリと呟いた。

　やっぱりか。

　砂庭さんにはお礼を言わないとな。

　高梨さんから手紙をもらわなければ、俺はきっと突っ走っていた。そして取り返

しのつかないことになっていたかもしれない。

「秘密にするって約束したのに、あまねちゃんを裏切ってしまってごめんなさい」

そう言って俺を見た砂庭さんは、笑みを消して深々と頭を下げた。

「あまねちゃんから嫌われても仕方がないと思っています。だから何度でも謝ります。土下座でもなんでもします」

顔を上げた砂庭さんは、震える声でそう言った。

そんな砂庭さんの頬を涙が伝ってゆく。

「色々と考えたんだけど、やっぱり凛ちゃんに言った方が良いと思って。凛ちゃんに言う前にあまねちゃんに相談しようとも思ったんだけど、あまねちゃんや私以外の誰かから今回の一件のことを凛ちゃんが聞いたら。それでもし誤解でもしたら。そう思ったら急いだ方が良いと思って……」

頬に涙を伝わせながら震える声で説明した砂庭さんは、その場にひざまずこうとした。

土下座でもなんでもする。

その言葉通り、俺に土下座するつもりだ。

「ありがとう」

ひざまずこうとしていた砂庭さんの腕を掴み、お礼を言った。

「え？」

俺がお礼を言ったことが意外だったのか、首を傾げる砂庭さん。

俺は本当にバカだ。高梨さんの気持ちを無視していたばかりか、砂庭さんをも追い詰めてしまっていたんだな。

砂庭さんの言う通り、もし噂を聞いた第三者が高梨さんに話をしていたら。

自分の知らない所で勝手に話が進んでいて、それを第三者から聞くなんて最

悪だ。

　そうなる前に俺が高梨さんに話すべきだったのに、突っ走っていた。

　そんな俺を説得する時間も無かった。

　だから砂庭さんは高梨さんに全てを話したんだ。

　手遅れになる前に。

　自分のバカさ加減にほとほと呆れるけど、同時に痛感している。

　やっぱり砂庭さんは凄い。普段はのほほんとしているけど、高い洞察力と勘の鋭さ。何よりも仲間を想う優しさ。

　普段は目立たなくても無くてはならないモノ。

　まさに要石（かなめいし）のような人だ。

「本当にごめんなさい。心から反省しています」

　そう言って砂庭さんに向かって頭を下げた。

「反省した上で、凛ちゃんとしっかり話し合うつもりです。だから……」

　頭を下げたまま声を上げた俺は、顔を上げると――。

「これからも力を貸してください。砂庭江奈さん。あなたは絶対に必要な人です」

　そう言って砂庭さんに向かって右手を差し出した。

「私ね、実は……ちょっと怖かったんだよ」

　クスッと笑ってそう言った砂庭さんは、差し出した俺の右手を握ろうとしなかった。

　その代わり、俺に近寄るとそのまま抱き着いてきた。

　甘い香りがふわりと鼻を掠め、次いで俺の普通の胸に砂庭さんの大きな胸が押し付けられ、一瞬にして顔が燃えるように熱くなった。

　やっぱり砂庭さんは凄い。

「本気になって失敗したらつらいでしょ？　中学時代がまさにそれ。あんなつらい思いはもうしたくない。だから私はいつも余裕ぶって、失敗しても本気じゃないからって自分に言い訳をして……」

　俺に抱き着いたまま、耳元で囁く砂庭さん。

「ねえあまねちゃん。もう一度……本気になっていいかな？」

　そう囁いた砂庭さんは、ぎゅうっと強く俺を抱き締めた。

「私も見たい。見たいんだよ。凛ちゃんが堂々と花道を歩く姿を。凛ちゃんにはその力があるのに、私がダメだったから。凛ちゃんの力になってあげられなかったから。でも今度はあまねちゃんがいる。くうちゃんもいる。ありすちゃんも百合園さんもいる。みんなで力を合わせて、今度こそ……」

　俺を強く抱き締め、俺の肩に顔を埋める砂庭さんが、くぐもった震える声で語る。

　そんな砂庭さんを強く抱き返した。

　砂庭さんの言葉を聞き、俺はまた大きな過ちを犯す所だったと気が付いた。

　生徒会長の件を高梨さんに話し、高梨さんが嫌がったら素直に引こうと思っていたけど、それじゃダメだ。

　砂庭さんが言った通り、中学時代、二人は本気だった。だからこそ納得のゆく結果が出せなかったことがトラウマになってしまった。

　高梨さんが本気で嫌がったら引くしかないかもしれない。

　でも俺も本気であることを伝え、説得するべきだ。

　簡単に諦めたら、そんなの本気だなんて言えない。

勝手な行動について謝り、そのうえで説得するべきだ。

でも、任せて、なんて言えない。

高梨さんの気持ちを無視した俺には、そんなことを言う資格は無い。

だけど――。

「凛ちゃんと全力でぶつかってみる」

そう砂庭さんに答えた。

「言っておくけど、凛ちゃんは怒ってないからね」

「え？」

砂庭さんの言葉に驚いた。

怒っていない？　高梨さんが？

「詳しいことは凛ちゃんから聞いて」

「あ、はい」

砂庭さんの言葉に頷くしかなかった。

高梨さんは怒っていない。でも、ならどうして手紙なんて……。

俺が考えてもわからない。

高梨さんと話せばわかることだ。

「ね、ねえ、あれ見て……」

不意に聞こえた声にドキッとして視線を向けた。

体操服を着た数人の女の子が、真っ赤な顔でこっちを見ている。

幼い顔立ちを見るに一年生のようだ。

　真っ赤な顔で困惑しつつ、俺達を凝視している女の子達。

「あ、あまねお姉さま、じゃなくて水無月先輩と砂庭先輩が抱き合ってる……」

「も、もしかして、見ちゃいけないものを見ちゃったのかな……」

「わ、私たち……消されるかも」

　その呟きを聞き、マズい、と思った。

　俺と砂庭さんが抱き合っているのを見て勘違いしちゃっているように思える。

　これはそういうあれじゃなくて、友情のあれっていうか、要するにあれなわけで。

　と、とにかく誤解を解かないと大変なことになりそうだ。

「あ、あの――！？」

　女の子達に声をかけようとしたら、砂庭さんが俺からスッと離れ、スタスタと歩いて女の子達に近寄った。

　真っ赤だった女の子達は、まるで蛇に睨まれた蛙のように一瞬で青ざめて固まってしまった。

「私ねぇ、あまねちゃんと愛し合ってるの。でもみんなには内緒だよ？」

　固まっている女の子達に向かってそんなことを言った砂庭さんは、唇に人差し指を当ててパチッと片目を閉じた。

　ちょ、砂庭さん。何を言っているんですか。愛し合っているけどみんなには内緒って。

　そんなの言ってくれって言っているようなものだ。

「だ、誰にも言いません！」

　女の子の中の一人が涙目で声を張り上げた。

「実はぁ、あまねちゃんとキスしちゃったりもしてるんだけどぉ、それも内緒にして

ね？」

「ちょ！？」

うふふと笑いながら話す砂庭さんに、全身から冷や汗がブワッと噴き出した。

内緒にしたいならそもそも言わなければいい話で。

ていうかキスってなんですか。砂庭さんとキスしたことなんて――。

あ、いや、みんなが俺の家に泊まりに来た時、一緒に寝た高梨さんと砂庭さんが俺の頬にちゅっちゅしていたな、そう言えば。

でもあれは二人とも眠っていたし……いや待て。

もしかして砂庭さんは起きていたとか！？

きゃーきゃーと黄色い悲鳴が聞こえてハッとした。

焦って視線を向けると、走って逃げてゆく女の子達の後ろ姿が見えた。

「に、逃がしちゃまずい！」

誤解したまま逃げられたら、色々と言い触らされてしまう。しかも噂話には尾ひれが付くものだ。放置すると大変なことになりかねない。

そう思って女の子達を追いかけようとしたら、ガシッと腕を掴まれた。

見ると、にこにこと笑っている砂庭さんが俺の腕を掴んでいる。

「大丈夫だよ。放っておこうよ」

楽しそうにクスクスと笑いながら、そんな呑気なことを言う砂庭さん。

何が大丈夫なんだ。全然大丈夫じゃない。

「は、早くあの子たちを追いかけ――」

「私たちが愛し合っている、っていう軽いジョークを広められたら、なにかマズいこと

でもあるの？」

　俺の言葉を遮り、楽しそうに声を上げた砂庭さんが可愛らしく首を傾げる。

　軽いジョークって……。

　あの子たちは絶対にジョークだなんて思っていない！

「あれえ、あまねちゃん、もしかして男子と交際する予定でもあるのかなぁ？」

「へ？」

　男子と交際する予定？　そんな予定は無いけど。

「男子と交際する予定が無いのならぁ、女の子同士で愛し合ってるって噂が流れてもぉ、痛くもかゆくもないんじゃないのかなぁ？」

「あ、え、えーと……そ、それはそうだけど……」

　砂庭さんの言う通り、妙な噂が流れて男子達から白い目で見られても、俺的には特に問題は無いと言うか。

　男子と交際する気なんてまるで無い俺からしたら、むしろ都合が良いと言うか。

　あ、でも、女の子同士で愛し合ってるなんて噂が広まったら、男子達だけじゃなく、同性である女子達からも白い目で見られないだろうか。

「じょ、女子たちから変な目で見られたり……」

「あはは、大丈夫だよ。女の子同士でいちゃいちゃするなんて割と普通だから」

　ドキドキしながら砂庭さんに問いかけると、あははと笑った砂庭さんが俺の肩をポンポンと叩きながら答えた。

　割と普通のことなの？　そうなの？

　ま、まあ、女の子同士で手を繋いだりしているのは割とよく見るけど。

　男子同士よりも、女子同士の方が距離は近いと思う。

　でも、愛し合っているって言うのはちょっと違うような……。

「だ、大丈夫かな……」

「大丈夫だよ。ふつーだから」

　俺の呟きに楽しそうに答える砂庭さん。

　本当に大丈夫なのだろうか。

女の子になったら修羅場だった件 - 第九十一話　バカなようで実はバカな件

　砂庭さんと夜乃宮さんが待ってくれているであろう教室に向かい、高梨さんと一緒に廊下を歩く。

　窓から差し込むオレンジ色の光。

　下校時刻はとっくに過ぎているため、廊下を歩く生徒の姿は無く、とても静かだ。

　そんな廊下の壁に寄りかかり、一人佇んでいる銀髪の少女の姿が視界に映った。

「話し合いは終わったようですね」

　そう声を上げた百合園さんは、壁から背を離し、道を塞ぐように廊下の真ん中に立った。

　真っ直ぐ前を向いて歩いていた高梨さんは、そのまま百合園さんの目の前まで歩き、立ち止まる。

　見つめ合う高梨さんと百合園さん。

　百合園さんは俺と高梨さんが話し合いをしていたことを知っているようだけど、誰に聞いたんだろう。

　考えられるとしたら砂庭さんだけど。

　それと、ありすの姿は無い。てっきり百合園さんと一緒にいると思っていたのに。

「ありすは？」

　百合園さんに問いかけると、高梨さんを見つめていた百合園さんが俺を見

た。

「砂庭さん達と一緒にいると思います」

にっこりと笑って答える百合園さん。

ありすは砂庭さん達と一緒にいるのか。

百合園さんが話し合いのことを知っていたのは、やっぱり砂庭さんから聞いたんだな。

でもなんで百合園さんが一人で待っていたんだろ。

百合園さんを見ると、俺に笑顔を向けていたはずの百合園さんは、その笑みを消して高梨さんを見つめている。

いや、見つめていると言うより睨んでいるような瞳と表情だ。

なんだろう。雰囲気がいつもの百合園さんと違うような気が……。

「で、どうするんですか」

高梨さんに問いかける百合園さん。

「私は生徒会長になる」

迷わず答える高梨さん。

「そうですか」

そう言って溜息を漏らした百合園さんは目を閉じた。

「なら」

目を閉じたまま呟いた百合園さんは、目を開けて高梨さんを見るとニヤリと笑った。

ゾクリとした寒気が背筋を駆け上がり、思わず自分を抱き締めてしまった。

これまで見たことが無い百合園さんの表情。

笑っているけど怖い。

その瞳と表情からは寒気を覚えるほどの鋭さを感じた。

「私も生徒会長に立候補します」

百合園さんの言葉に耳を疑った。

立候補する？　百合園さんが？　生徒会長に？

どうして、どうして急にそんなことを言い出すんだ。

「高梨凛花、あなたは私に勝てますか。二大美少女の一人と呼ばれているこの私に」

ただでさえ近かった距離をさらに詰め、触れそうな距離で高梨さんに問いかける百合園さん。

浮かべた笑みとは裏腹に、異様な鋭さを感じる赤い瞳。

表情一つ変えず、その赤い瞳を真っ向から受け止める高梨さんの黒い瞳。

「勝てないだろうね。“私とあなた”の戦いなら」

ニヤリと笑って答える高梨さん。その言葉に百合園さんの細く整った眉がピクンと動いた。

「百合園アリス。圧倒的な美貌を持つあなたは、そのたぐい稀なる容姿に反し、まるで猫のように自由奔放で天真爛漫。そんなあなたには一種のカリスマ性がある。私程度が戦って勝てる相手じゃない」

勝てる相手じゃない。その気弱な言葉とは裏腹に、高梨さんの表情は自信に満ちている。

「でも残念だね。今回は相手が悪いよ。さすがのあなたも水無月あまねには遠く及ばない。そのあまねが私を支持してくれている」

その高梨さんの言葉に百合園さんの表情が曇った。

「あまねが私に付いた以上、ありすも私に付く。当然ながら江奈もソラも私に付く」

そう言って足を踏み出す高梨さん。

そんな高梨さんに気圧されるように足を退く百合園さん。

「百合園アリス。私一人ではあなたに敵わない。だけど私は一人じゃない。勝てるかって聞いたよね？　答えてあげる。みんなの力を借りて、私は絶対に勝つ」

自信に満ちた表情で、高梨さんは勝つと言い切った。

みんなの力を借りて、絶対に勝つと。

「どうやら謀反を起こしても失敗しそうですね。私は勝てない戦いは避ける主義です」

緊迫した雰囲気から一転し、肩をすくめた百合園さんが気怠そうに呟いた。

「権力にものを言わせて水無月姉妹を独占し、あんなことやこんなことをするつもりでしたが、勝てそうに無いのでやめておきます」

気の抜けたジト目で呟く百合園さんと、そんな百合園さんを見てクスッと笑う高梨さん。

おいおバカさん。生徒会長にそんな権力は無いぞ。

と言うのは冗談で、どうやら百合園さんは高梨さんが本気かどうかを確かめたかったようだ。

そうだよね？　高梨さんの気持ちを確かめたかったんだよね？　まさか本気で権力にものを言わせて俺やありすを独占する気だったとかじゃないよね？　さすがにそこまでバカじゃないよね？

「アリス、あなたの力を私に貸して欲しい」

そう言って、高梨さんは百合園さんに向かって右手を差し出した。

「いいでしょう！　力を貸してあげます！　代わりにあまねさんにセクハラできる権限をもらいます！」

　声を張り上げた百合園さんが高梨さんの手を握ろうとした。その百合園さんの手をパーンッとはたく高梨さん。

　ジト目で見つめ合う二人。

「ケチですね」

　百合園さんがボソッと呟き、高梨さんのこめかみにビキッと血管が浮き上がった。

「バカだバカだと思ってたけど、あんた本物のバカね！」

　声を張り上げた高梨さんが、百合園さんの両頬を指で摘まんで引っ張った。

「素直じゃないヤツですね！　お前だってあまねさんにセクハラしたいクセに！　お前みたいなむっつりが一番危険なんですよ！」

　負けじと高梨さんの両頬を指で摘まみ、引っ張りながら声を張り上げる百合園さん。

「ちょっとあまねさんから気に入られているからって図に乗るなってんですよ！　私が本気になればお前なんかちょちょいのちょいです！」

「言うだけなら誰だってできるのよ！　やってみなさいよ！　返り討ちにしてあげるから！」

「言ってくれますね！　吠え面かかせてやりますよ！　百合園ツインテールアリスにバージョンアップしてお前を叩きのめします！」

「ツインテールってなによ！　私の魅力はツインテールだけって言いたいの！？」

　お互いに頬を抓り合い、お互いに涙目で罵倒し合う二人。

　ツインテールは、まあ、うん、好きです。

　それはともかく、この二人が罵倒し合うのって新鮮だ。

　みんな一緒にいても、高梨さんは砂庭さん、百合園さんはありす、そして俺は夜乃宮さんって感じになる場合が多いからな。

「貧乳のクセに！」

「これでもありすよりは大きいわよ！」

「私より大きい？　どこがですか！　明らかに私の方が大きいですよ！」

「あんたじゃなくてあまねの妹のありすよ！」

「みりすはあのサイズだから可愛いんですよ！　それに引き替えお前は中途半端です！」

「ていうか、なんで胸のサイズの話になってるのよ！」

　頬を抓り合いながら張り合う二人。

　これまで高梨さんは百合園さんに気を使っていたと思う。百合園さんも俺やありす以外とは深く関わろうとしていなかったように思える。

　でも今の二人の距離はとても近い。

　お互いに歩み寄り、でも照れくさいから罵倒し合ってごまかしているように思える。

　殴り合いに発展する様子は無いし、ここは無理に止めずに静観していたほうが――。

「このお！」

「いたたたたたたたたた！」

　高梨さんがグイッと強く百合園さんの頬を抓り、拮抗していたバランスが崩れ、百合園さんが俺の方に倒れ込んできた。

　とっさに両手を広げて百合園さんを抱き留めようとしたら、同じくとっさに両手を前に出した百合園さんが、その両手で俺の胸をムギュと強く掴んだ。

　呆然とした様子の百合園さんは、俺の胸を掴んだまま顔を上げ、その顔がみるみる真っ赤になった。

　そして――。

「ご、ごめんなさい！」

　バッと勢いよく俺の胸から両手を離し、ババッと俺から距離を取った百合園さんが、燃えるような真っ赤な顔で謝った。

　あ、いや、別にいいけど。

　俺が女の子の胸を触るのは問題があると思うけど、俺の胸を触る分には特に問題は無い。

　減るものでもないし。

「あれえ？　セクハラしたいとか言ってた割に、なんで真っ赤になってるんですかね？」

　真っ赤になってオロオロしている百合園さんを見て、ここぞとばかりに攻める高梨さん。

「あ、あの！　わざとじゃないんです！　本当にごめんなさい！」

　高梨さんに攻められ、泣きそうになりながら何度も俺に頭を下げる百合園さん。

　独占したいだのセクハラしたいだの言っていたクセに、俺の胸を掴んだだけでこれだよ。

　ほんと、根は優しくて良い子なんだよな、百合園さんは。

　バカだけど。

　そんな百合園さんを見た高梨さんは、溜息を漏らすとにっこりと笑った。

「猫ってズルい生き物だよ。気位が高くて傲慢で、そうかと思うと急に甘えてきて。ほんとズルい生き物だよ」

　そう言って、高梨さんは百合園さんに向かって右手を差し出した。

「改めて、私に力を貸して欲しい。こうして真っ向からケンカを売ってくれるあなたの力を借りたいの」

　その高梨さんの言葉に目を見開いた百合園さんは、恥じらうように視線をそらした。

　あまりにも真っ直ぐな口説き文句に、さすがの百合園さんも面食らったようだ。

「し、仕方がないですね。特別に力を貸してあげますよ」

　最初から力を貸すつもりだったクセに、恥ずかしいのだろう。百合園さんはツンツンした態度で高梨さんの手を取った。

「やるからにはてっぺんを取れ、なんて甘いことは言いませんよ。あまねさんの名に傷を付けないためにも、歴代最高の生徒会長になりやがれです」

「当然よ。そのためにも、あんたにも頑張ってもらうわよ」

　お互いに声をかけ合い、お互いに笑い合う二人。そして強く握られた二人の手。

「ふっふっふ。お前が絶大な権力を手に入れれば、その権力を笠に着て、あまねさんにセクハラしまくるのです！　権力こそ正義なのですよ！」

　せっかく良い雰囲気だったのに、百合園さんがまたバカなことを言っている。

　まあ、照れ隠しなんだろうけど。

「へぇ、そんなにセクハラしたいんだ。だったら触りなさいよ。ほらほら」

　ジト目になった高梨さんが、百合園さんの手首を掴み、その手を俺に向けた。

「ちょ！　ま、待って！　ちょっと待ってください！　バカですかお前！　あまねさんに失礼なことをするなってんですよ！」

　セクハラしまくると言っていたのに、焦った様子の百合園さんがジタバタと暴れ

ている。

　百合園さんはほんとバカだなぁ。

　でもまあ――。

「ありがとうね、アリスちゃん」

　なんだかんだ言って、高梨さんの本心を確かめ、力を貸してくれると言ってくれた百合園さんは、やっぱり優しい良い子だ。

「あ」

　間の抜けた声を上げる高梨さん。

　高梨さんが押していた百合園さんの手が俺の胸にムニュリと押し当てられてしまったのだ。

「な、なに本当に触ってんのよ！　バカじゃないの！？」

　叫んだ高梨さんがパーンッと百合園さんの頬にビンタを喰らわせた。

「お、お前が押したからですよ！　なにやってんですかお前！」

　あわあわしながら高梨さんを批難する百合園さん。

「う、うるさい！　もっとちゃんと抵抗しなさいよ！」

「な！？　今のは私は悪くないですよ！　お前のせいじゃないですか！」

「普段のおこないが悪いからそうなるのよ！」

「意味わかんないです！　どう考えても悪いのはお前です！」

　お互いに罵倒し合い、またもや頬を抓り合う二人。

　高梨さん。今のは高梨さんが悪いと思いますよ。

女の子になったら修羅場だった件 - 第九十二話　小さな見た目に大きな器な件

　両頬を真っ赤に腫らした百合園さんが、ご機嫌そうに廊下を歩く。

　ありすから日々ボコられていた百合園さんは、高梨さんからもボコられるようになってしまった。

　それなのに嬉しそうだ。

「なんで嬉しそうなのよ、あの子」

　俺の隣を歩いている高梨さんがジト目で呟いた。

　高梨さんも俺と同じようなことを考えているようだ。

「あ、あはは」

　笑ってごまかしつつ、百合園さんってもしかしてマゾなんじゃあ、とか思った。

　まあ、かまってもらえて嬉しいだけだろうけど。

　教室に到着すると、ありすと砂庭さんと夜乃宮さんが待っていた。

　他に生徒はいない。

　部活動に所属している生徒はまだ学校に残っていると思うけど、それ以外の生徒は帰ってしまったのだろう。

　すっかり遅くなったし、俺達もさっさと帰らないとな。

　でもその前に――。

「江奈、ありす」

　声を上げようとしたら、高梨さんが砂庭さんとありすを呼んだ。

「うん」

　自分の席に座っていた砂庭さんは、高梨さんの呼びかけに頷くと、膝の上に座っていた夜乃宮さんを降ろした。そして席を立つと、夜乃宮さんを椅子に座らせてその場に屈み、夜乃宮さんと目線を合わせた。

「くうちゃん、あまねちゃんがくうちゃんに大切なお話があるんだって。私たちは外で待ってるから、あまねちゃんのお話を聞いてあげてね」

「わかった！」

　砂庭さんの問いかけに元気よく頷く夜乃宮さん

「校門の所で待ってるから」

　そう言って俺の肩をポンと叩いた高梨さんが片目を閉じた。そして砂庭さんとありすに目くばせをする。

　頷いた二人は歩き出し、高梨さんと一緒に教室から出て行った。

　三人とも、俺が夜乃宮さんと話をしたいと思っていることを見抜き、気を使ってくれたようだ。

「ふふん」

　俺の隣に立って腕を組み、なぜか得意気に鼻を鳴らしている百合園さん。

　空気を読めない子がいる。

「あんたも来るのよ！」

　スタスタと戻って来た高梨さんが、声を張り上げながら百合園さんの耳を引っ張った。

「いたたたたたたたた！　もげますもげます！　耳がもげます！」

　涙目で叫ぶ百合園さんは、高梨さんに耳を引っ張られながら教室を出て行った。

　痛がっていたけど、でもちょっと嬉しそうに見えたのは気のせいではないように思える。

　それはこの際置いておくとして――。

　夕暮れの優しい光が教室をオレンジ色に染める中、砂庭さんの席に座って足をパタパタさせている夜乃宮さん。

「くうちゃん」

「別にいいぞ」

　ごめんね。そう言おうとしたら、その言葉を言う前に夜乃宮さんが声を上げた。

「あまねには恩がある。その恩を必ず返すと言った。だからあまねは謝る必要なんて無い」

　そう言って、夜乃宮さんはぴょんと椅子から飛び降りた。

「上手くいったのならそれでいい。少しでもあまねの役に立ったのならそれでいいんだ」

　オレンジ色に染まっている教室に、幼くもどこか大人びた声が響く。

「もし私に恩を感じてくれているなら、これからも友達でいてくれ。それが何よりの恩返しだ」

　にっこりと笑って話す夜乃宮さんは、いつも通り幼くて、でも地面にしっかりと根を張った大木のように力強く感じて……。

「帰ろう、あまね」

　トコトコと歩いて近寄って来た夜乃宮さんは、そう言って俺に右手を差し出した。

「うん」

頷いた俺は、差し出されている夜乃宮さんの右手を取る。

小さくて柔らかくて可愛い夜乃宮さんの手。

夜乃宮さんはきっと、これからも俺に恩を返し続ける気だろう。

なら俺もお返しをすればいい。

「もうすぐ秋だね。秋はカマキリの季節だよ」

「おお！　カマキリか！　カマキリは最強のハンターなんだ！　カッコいいよなあ！」

俺の言葉にパアッと満面の笑みを浮かべた夜乃宮さんは、瞳を輝かせて弾んだ声を上げた。

「カマキリがいそうな場所を知ってるんだ。今度一緒に行こうか」

「行く！　行きたい！　ありがとうあまね！」

心底嬉しそうに声を上げ、そして俺にお礼を言う夜乃宮さん。

お礼を言いたいのはこっちなのにね。

ありがとう、夜乃宮さん。

◆

夜乃宮さんと手を繋いで校門に到着すると、みんなが待っていてくれた。

「その様子だと、上手くいったみたいだね」

手を繋いでいる俺と夜乃宮さんを見た高梨さんが、にっこりと笑って声を上げた。

「あまねちゃんとくうちゃんなら何も心配ない、って何度も言ったのに、ずっと心配してたんだよ、凛ちゃん」

「な！？」

　クスクスと笑いながら話す砂庭さんに、高梨さんの顔が一瞬で真っ赤になった。

「え、江奈！　そう言えばあまねと愛し合ってるって噂の真相はどうなのよ！」

　焦った様子の高梨さんがあからさまに話題を変えた。

「さあ？　噂はしょせん噂だよ。でも火の無い所に煙は立たないって言うし？」

　唇に人差し指を当て、とぼけながらも煽るようなことを言う砂庭さん。

「ど、どう言うことよそれ！　思い当たる節があるなら教えなさいよ！」

　まんまと煽られた高梨さんに、砂庭さんが楽しそうにクスクスと笑っている。

　砂庭さんが一年生達にあんなことを言ったのって、こうやって遊ぶためだったのか。

　とジト目で思った。

「くうちゃんなら手を繋いでも許してあげるけど、私とも手を繋いでよ」

　俺に近寄って来たありすが、そう言って俺に向かって右手を差し出した。

「はいはい」

　やれやれと溜息を漏らしつつ、ありすの手を握る。

「ありす、許してもらってありがとうな！」

　ありすから許された夜乃宮さんが元気にお礼を言った。

「くうちゃんは良い子だし可愛いから特別に許す！」

　夜乃宮さんからお礼を言われたありすは、そう言って笑うと親指を立てた。

「あー！　ちょっとありす！　あんたは家に帰ればあまねを独占できるんだから、ちょっとくらい貸しなさいよ！」

ありすが俺と手を繋いだのを見た高梨さんが批難の声を上げた。

正直な話、高梨さんに貸されたい。

「あまねちゃん、気合いで手をあと二つ増やせない？」

クスクスと笑いながら無茶な要求をしてくる砂庭さん。

苦笑いを浮かべて困っていたら、砂庭さんが夜乃宮さんの前に立った。

「じゃあくうちゃんと手を繋ごーっと」

そう言って夜乃宮さんに手を差し出す砂庭さん。

「いいぞ！」

二つ返事で了承した夜乃宮さんが、砂庭さんの手を取った。

「じゃあ私は絶世の美少女で我慢しておくか」

ありすの前に立った高梨さんは、残念そうに声を上げながら手を差し出す。

絶世の美少女で我慢する、って凄いワードだな。

「絶世とか言わないでよ」

恥ずかしそうに呟きながら高梨さんの手を取るありす。

五人で手を繋いでいるわけだけど、このまま歩いたらもの凄く邪魔になりそうだ。

「こほん」

とそこで咳払いが聞こえた。

見ると百合園さんが口元に拳を当てている。

あ、いたんだ。静かだったから気付かなかった。

「では私の家に行きますか！」

そう言って、カモーンとばかりに手を振り上げる百合園さん。

忘れていた。そう言えば百合園さんの家に泊まり込んでいるんだった。

「ただし、高梨凛花、てめーはダメです」

高梨さんの前に立った百合園さんが、そう言ってふふんと鼻を鳴らした。

ムッとする高梨さん。

「どうしても泊まりたければ、アリスさま泊めてくださいお願いします、って言えです」

偉そうに腕を組み、高梨さんをあからさまに見くだしながら声を上げる百合園さん。

そんな百合園さんを見た高梨さんのこめかみに、ビキッと血管が浮き上がった。

はぁ、また始まったよ。

まったく、このかまってちゃんは……。

「アリスさま泊めてくださいお願いします」

こめかみに血管を浮き上がらせながら、それでも百合園さんに言われた通りお願いをする高梨さん。

おお、さすが高梨さん、大人の対応だ。

「ぬぐっ」

まさか素直にお願いしてくるとは思っていなかったのか、百合園さんが呻きを上げた。

「もしもし、イリスちゃん」

聞こえた声に視線を向けると、ありすが耳にスマホを当てていた。

「キャンプに行ったメンバー全員でイリスちゃんの家に泊まりたいって話になってるんだけど、大丈夫？」

スマホに向かって話すありす。それを見た百合園さんの顔がサーッと青ざめた。

『きゃあああああああああ！　喜んで！　待ってます！　待ってますから絶対に来てくださいね！　はわあああああああああ！　みんなが来てくれるなんて幸せですううううう！』

みんなに聞こえるほどの声がありすのスマホから響いた。

通話を切ったありすは、百合園さんを見てニヤリと笑う。

青ざめた顔でビクッと震える百合園さん。

なんだかんだ言って、百合園さんは極度のシスコンだからな。

愛するお姉ちゃんが良いと言ってしまった以上、何も言えないだろう。

「ありす！」

声を張り上げた高梨さんは、ありすを見ながら親指を立てた。

「任せて！」

高梨さんを見て親指を立てるありす。

百合園さんと言う共通の敵ができたことで、ありすと高梨さんの結束力が上がってしまったようだ。

「み、みりす。みりすは私の味方では……？」

弱々しい声を上げ、泣きそうな顔でありすに縋り付こうとする百合園さん。

そんな百合園さんをジト目で見たありすは、ふんっと鼻を鳴らすとプイッとそっぽを向いてしまった。

それを見た百合園さんは、ダバーッと涙を流してえぐえぐと泣いている。

　そしてププッと笑っている砂庭さん。

「泣くなアリス！　アリスも一緒に泊まっていいぞ！」

　泣いている百合園さんを励ます夜乃宮さん。

　いや、あの、百合園さんの家なんですけどね。

「ちっこいの、お前は良いヤツです」

　泣きながら夜乃宮さんに近寄って来た百合園さんが、割と失礼なことを言いながら夜乃宮さんの頭を撫でている。

「良いヤツって言ってくれてありがとうな、アリス！」

　百合園さんから無礼極まりないことを言われたのに、気にするどころかお礼を言う夜乃宮さん。

　小さな見た目と違って器が大きい。

　それに引き替え百合園さんは……。

　とにもかくにも、みんなで百合園さんの家に行くことになった。

女の子になったら修羅場だった件 - 第九十三話　モフモフと幼女は最高の組み合わせな件

　俺は今、猛烈にドキドキしている。

「うわあ！　あのでっかいのはなんだ！？」

　百合園さんの家に到着し、庭の芝生の上に寝転がっているチビ助を見て声を上げる夜乃宮さん。

　巨大なモフモフを見て興奮しているようだけど、俺も興奮している。

　乗れる。夜乃宮さんならチビ助の背に乗れる。

　夜乃宮さんがチビ助の背に乗っている姿を想像したら……ヤバい、可愛すぎる。

「く、くうちゃんならチビ助に乗れそうです」

　俺達を出迎えるために家から出て来たイリスさんが、頬を染めながら呟いた。

「見たい」

「見たいね」

「うん、見たい」

　高梨さんと砂庭さんとありすも頬を染めて呟いている。

　どうやらみんな俺と同じ心境のようだ。

　小さな女の子が大きな犬の背に乗っている光景。

どう考えても可愛い。

「わう」

ムクッと起き上がったチビ助が、ノシノシと歩いて俺達の方に近寄って来た。

ビクッと震えた夜乃宮さんがサッと俺の背後に隠れる。

意外だ。好奇心旺盛な夜乃宮さんが怖がるなんて。

まあ、チビ助ほど大きな犬は滅多に見ないからな。

ピタリと立ち止まったチビ助は、やや後ろに下がるとお座りをした。

夜乃宮さんが怯えていることに気付き、安心させるために距離を取ったのかもしれない。

「でかい。でかい犬だ」

俺の背後に隠れている夜乃宮さんが、ひょこっと顔だけ出して呟いた。

チビ助を見る瞳はキラキラと輝いている。

そこまで怖がってはいないようだ。

「チビ助は怖くないですよ」

そう声を上げたのは百合園さんだった。

スタスタと歩いた百合園さんは、俺の背後に隠れている夜乃宮さんの頭をポンと軽く叩き、チビ助の前に立った。

お座りをしているチビ助は、心なしか背筋をピンと伸ばしたように見えた。

「お手」

その場にしゃがんだ百合園さんが、右手を差し出しながら声を上げる。

差し出された百合園さんの手のひらに、サッと右の前足を乗せるチビ助。

「おかわり」

　続いて声を上げる百合園さん。するとチビ助はサッと左の前足を手のひらに乗せる。

「伏せ」

　百合園さんの指示を受けたチビ助がサッと伏せをした。

「ころん」

　百合園さんのその言葉に、チビ助は伏せをした状態でコロンと転がる。

「ころんころん」

　声を上げながら右手の人差し指をクルクルと回す百合園さんと、芝生の上をコロコロと転がるチビ助。

「よくできました」

　そう言って百合園さんは両手を広げた。

　ムクッと起き上がったチビ助は、大きなシッポをバタバタと激しく振りながら百合園さんに駆け寄る。そして百合園さんの前にお座りをすると、百合園さんの頬をペロンと舐め、スッと頭を下げた。

「チビ助はお利口ですね」

　そう言いながらチビ助の頭を撫でる百合園さん。

　微動だにせずに頭を撫でられているチビ助だけど、シッポだけはバタバタと激しく振られていて、凄く喜んでいるのが見て取れた。

「ほら、怖くないですよ」

　チビ助の頭を撫でながら振り返った百合園さんが、そう夜乃宮さんに向かって声を上げた。

「お利口だな！」

　嬉しそうに声を上げた夜乃宮さんは、俺の背後から出るとチビ助に近寄ってゆく。

　チビ助の前に立つ夜乃宮さんと、お利口にお座りをしているチビ助。大きさで言えばチビ助は夜乃宮さんの倍以上ははある。

「か、噛まれたら痛そうだな」

　そう呟いた夜乃宮さんが、チビ助に向かって恐る恐る手を伸ばした。

　するとチビ助は、ゆっくりと頭を下げた。

　夜乃宮さんが驚かないように気を使っているような動き。

　チビ助の頭に夜乃宮さんの小さな手がポフッと乗る。

「あはは！」

　触っても大丈夫と思ってホッとしたのか、嬉しそうに笑った夜乃宮さんは、わしゃわしゃとチビ助の頭を撫で回す。そしてされるがままのチビ助。

「可愛いな！　チビ助は可愛い！」

　完全に気を許した様子の夜乃宮さんは、声を張り上げながらボフッとチビ助に抱き着いた。

　モフモフの大型犬とじゃれ合う幼女のなんと愛くるしいことか。

　夜乃宮さんは同級生だけど。

「こんなに大きいと背中に乗れそうだな！」

　その夜乃宮さんの言葉を聞き、来た、と思った。

　チビ助の背に乗ってはしゃぐ夜乃宮さんをぜひとも見たい。

「乗れますよ」

　声を上げた百合園さんが、夜乃宮さんをひょいっと持ち上げ、チビ助の背中に

トンと乗せた。

「わあ！　乗ってもビクともしない！」

　瞳を輝かせ、両手をパタパタさせてはしゃぐ夜乃宮さん。

「可愛い」

「可愛い」

「可愛い」

「可愛い」

　それまで夜乃宮さんとチビ助の様子を見守っていた高梨さんと砂庭さん、そしてありすとイリスさんが頬を染めて呟いた。

　これはヤバい。はっきり言ってヤバいくらい可愛い。

　とそこで、チビ助がノシノシと歩き出した。

「うわあ！」

　とてもゆっくり歩き出したチビ助だけど、驚いた様子の夜乃宮さんがチビ助の白い毛を両手で掴んだ。

　ゆっくりと、ゆっくりと歩くチビ助。

「あはははは！　凄い！　チビ助は凄いぞ！」

　慣れてきた様子の夜乃宮さんは、大喜びで声を上げ、両手をパタパタさせている。

　その様子を無言で撮影するみんな。

　俺もスマホを取り出して撮影した。

　額に入れて飾っておきたい。

　ゆっくりと庭を回ったチビ助は、出発した場所に戻ると伏せをした。

　ぴょんっとチビ助の背から飛び降りた夜乃宮さんが、ボフッとチビ助に抱き着く。

「ありがとうチビ助！　とても楽しかった！」

「わう」

　抱き着きながらお礼を言う夜乃宮さんに鳴いて返事をしたチビ助は、夜乃宮さんの頬をペロリと舐めた。

「チビ助って飼い主より頭が良さそうだね」

「ぬ？」

　高梨さんがボソッと呟き、百合園さんがピクンと反応した。

　ジト目でうんうんと頷いているありすと、プププッと笑っている砂庭さん。

「チビ助！　ヤツを八つ裂きにしてしまうのです！」

　ビシッと高梨さんを指さしながらチビ助に指令を出す百合園さん。

「チビ助！　ダメだぞ！　凛を八つ裂きにしたらダメだ！」

　声を張り上げた夜乃宮さんが、必死にチビ助を押さえ付けた。

「わふ」

　困ったように鳴いたチビ助は、夜乃宮さんがしがみ付いている状態のままノシノシと歩き、俺の背後に回った。

「ああ！　チビ助！　あまねさんの後ろに隠れるのは卑怯ですよ！」

　俺の背後に隠れたチビ助を見て批難の声を上げる百合園さん。

「あまねちゃんの後ろに隠れれば、誰も手が出せないもんねぇ」

「やっぱり飼い主より頭が良い」

　砂庭さんの言葉にうんうんと頷いた高梨さんが呟いている。

「ぬぐぐぐぐぐ！」

　悔しそうに呻きを上げる百合園さん。

「あ、アリスちゃん落ち着いて。せっかくみんなが来てくれたんだから仲良くしましょう、ね？」

　プルプルと震えながら呻きを上げている百合園さんの肩にそっと手を置き、困り顔でなだめるイリスさん。

「ペットは飼い主に似るって言うけど、あんたの場合は飼い主がペットに似て欲しいわね」

　ジト目でボソッと呟くありす。

　ペットは飼い主に似る、か。

「みりす！　よーするに私を愛していると言うことですね！」

　叫んだ百合園さんがありすに向かって跳びかかった。

「はあ！？　チビ助と違って飼い主はバカだって言ったのよ！　なんでそうなる――うみゃあ！」

　言い返したありすだけど、跳びかかって来た百合園さんに抱き着かれ、ジタバタと暴れている。

「さあみりす！　一緒にお風呂に入りましょう！」

「な、なんでまたあんたとお風呂に――」

「嬉しい！？　そうですか！　じゃあ体を洗ってあげますね！」

「言ってない！　言ってないわよ！　ちょ、引っ張らないで！　痛いってば！」

　批難の声を上げるありすの手を掴み、ズルズルと引きずる百合園さんは、そのまま家の中に入ってしまった。

「ところで、なんで百合園さんの家に泊まってるの？」

「え？」

　高梨さんに問いかけられ、首を傾げた。

　なんで？　なんで泊まってるんだっけ？

　何か理由があったような気がするんだけど、思い出せない。

「親睦を深めるためですよ！」

　パンッと手を叩いたイリスさんが、満面の笑みを浮かべて声を上げた。

　親睦を深めるため？　違うような気がするけど、まあいっか。

女の子になったら修羅場だった件 - 第九十五話　厄介なことになりそうな予感と言うか確信な件

トントントン、と包丁でまな板を叩く。

ついさっき、お風呂から上がった百合園さんがありすを連れてキッチンに来た。

そして――。

『トンカツが食べたいです！』

と言って行ってしまった。

トンカツは昨日食べただろ。

まったくあの子は。

以前昼食に焼きそばパンばかり食べていたけど、一度気に入るとそればかり食べるタイプの子なのかもしれない。

美味しいって言ってもらえるのは嬉しいけど、同じ物ばかり食べていたら栄養が偏ってしまう。

と言うことで、百合園さんの意見を無視してサラダパスタを作ることにした。

それはそうと――。

包丁を止め、指でそっと唇を触り、ふぅと溜息を漏らした。

高梨さんの唇の感触。

柔らかくて、潤っていて、そして高梨さんらしい清らかな甘さがあって……。

「うっ」

　思い出したらめまいを覚えた。

「あ、あまね！」

　背後から声が響き、次いでポフッと全身を柔らかな何かが包み込んだ。

「あまね、気分が悪いの？　顔が真っ赤だし熱があるんじゃないの？」

　背後から俺を抱き締め、心配そうに問いかけてくる高梨さん。

　熱があるのか、って高梨さんも真っ赤じゃないですか。

「熱……測ってみようか」

　そう呟いた高梨さんは、背後から俺を抱き締めたまま顔を寄せてきた。

　ドクンと鼓動が跳ね、息ができなくなった。

　コツンと当たる高梨さんのおでこ。

　少しでも、ほんの少しでも顔を前に出せば、唇が触れてしまう。

　そう思ったら高梨さんの唇の感触を思い出してしまい、ますます顔が熱くなった。

「目……閉じてよ。恥ずかしいじゃない」

　燃えるように真っ赤な顔で、不機嫌そうに呟く高梨さん。

「は、はい……」

　返事をした俺は、言われた通り目を閉じた。

　目を閉じたことで、高梨さんの感触や甘い香りがより強くなったような気がして、そして激しく鼓動を刻む自分の心臓の音がやけに大きく聞こえて……。

　いいのかな、このままで……。

悩むフリをして高梨さんに身を委ねてしまっている俺は、本当にズルい。

「また事故ですか！？」

聞こえた声に心臓が跳び出してしまいそうになり、目を開けた。

「そ、そそ、そうです！　事故です事故！」

バッと顔を離し、茹でダコのように真っ赤になりながら声を張り上げる高梨さん。

ホッとしつつ、ちょっと残念だと思っている自分が情けない。

「チャンスを逃しました！　私も事故を起こしたいです！」

悔しそうに声を上げるイリスさん。

あれな妹と違って静かでお淑やかな人だと思っていたけど、やっぱりこの人はあれの姉だな。

そうジト目で思った。

とそこでカサッと音が聞こえた。

見るとシンクの上に紙のような物が置かれていた。

忍者メイドか。

折られているその紙を手に取って広げてみた。

『イリスお嬢さまは事故と言う名のアクシデント的なラヴをお望みですよ、あまねさま！』

その文章を目にし、くしゃっと紙を丸めた。

駄メイドの臭いがプンプンする。

◆

料理が完成し、高梨さんとイリスさんと一緒に料理を持ってリビングに向かった。

「あはははははは！　それなー！」

リビングに入ると同時に笑い声が響いた。

チビ助を枕にして寝転がっている夜乃宮さんが、スマホを耳に当て、足をパタパタさせながら笑っている。

起きたのか。

誰かと電話をしているようだ。

夜乃宮さんは眠っても起きても可愛いなぁ。

ほっこりしつつ、運んで来た料理をテーブルに置いた。

「わぁ、美味しそうだねぇ」

ソファに座っている砂庭さんが、テーブルに置いた料理を見て嬉しそうに声を上げた。

ありすと百合園さんの姿は無い。

お風呂からは上がったはずだし、別の部屋にいるのかな？

「ふふ」

思わず笑ってしまった。

「あまね？」

俺が不意に笑ったのを不思議に思ったのか、高梨さんが首を傾げた。

「うちのありすと百合園さんちのアリスちゃん、ここ最近本当に仲が良いなと思って」

そう高梨さんに言うと、ああ、確かに、と声を上げた高梨さんが頷いた。

「じゃあ私たちも見習わないとね」

　にっこり笑った高梨さんが、そう言ってそっと俺の手に触れた。

　ドキドキと高鳴る鼓動。

　見習うってどういう意味ですか。

　高梨さんの爽やかな笑顔を見る限り、深い意味は無いように思える。

　それに引き替え不純なことを考えて期待しちゃってる俺って……。

「私、アリスちゃんとありすちゃんを呼んできます」

　持って来た料理をテーブルに置いたイリスさんが、そう言ってリビングから出て行った。

「ご飯ができたみたいだ！　あまね達が作ってくれたんだ！　とても美味しそう！」

　起き上がった夜乃宮さんがスマホに向かって話している。

　俺の名前を出しているってことは、うちの高校の生徒かな？　誰だろう。

「え？　うん！　そう！　凛は女の子だぞ！　立派な女の子だ！」

　夜乃宮さんの言葉に、あれ？　と思った。

　電話の相手がうちの高校の生徒なら、高梨さんの性別を知らないはずがない。

　違う学校の生徒なのだろうか。小学校や中学校が同じだったとか。

　夜乃宮さんは高梨さん達と中学が違うようだから、それもあり得るか。

「私の話をしてるの？」

　聞こえた声にドキッとした。

俺の手を軽く握っている高梨さんが、夜乃宮さんを見ながら首を傾げ、俺に身を寄せてきた。

触れてしまっている体。

あまりにも無警戒な高梨さんの行動に、俺の心臓が悲鳴を上げている。

「そうなぁ、パネルなぁ。作るのがむずかしそうだよなぁ」

誰かと話をしている夜乃宮さんが困り顔になった。

え？　パネル？　パネルって……。

あ！　そうだパネルだ！　百合園さんの家に泊まり込むことになったのは、パネルの作り方を教えてもらうためだった。

危うく目的を忘れる所だったと言うか、泊まり込みを始めて二日目なのに何も教えてもらっていない。

「パネル？」

不思議そうに首を傾げる高梨さん。

そう言えば高梨さんは文化祭で俺のパネルを展示することを知らないんだ。

高梨さんがやる気を出してくれたし、できればパネルの件は無かったことにしたいんだけど、生徒会長と約束しちゃったからなぁ。

「え！？　手伝ってくれるのか！？　本当か！？」

声を張り上げた夜乃宮さんが瞳を輝かせている。

夜乃宮さんの個人的な友達が手伝いに来るのか？

他校の生徒が手伝ってもいいものなのだろうか。

夜乃宮さんの友達なら確実に良い人だろうし、せっかくだから明日生徒会長に聞いてみようかな。

「え！？　缶バッチ！？　新しいのができたのか！？　え！？　ギラファとパプキン！？　凄い！　どっちも知ってるし大好きだ！」

　何やら大興奮の夜乃宮さん。

　缶バッチがどうのと言っているけど、ぎらふぁとぱぷきんってなんだろう。ゲームのキャラか何かかな？

「ギラファはカッコいいよなあ！　角が長くてカッコいい！　パプキンは可愛くて綺麗だ！」

　ぎらふぁは角が長くてカッコよくて、ぱぷきんは可愛くて綺麗。

　やっぱりゲームか何かの話のようだ。

「ありがとうオオクワ怪人！」

「ん？」

　ありがとうオオクワ怪人？　オオクワ怪人って……。

　ええ！？　オオクワ怪人！？

「こっちに来たらお礼をするからな！　じゃあご飯が冷めるからまたな！」

「ちょちょちょちょちょちょ！」

　夜乃宮さんのスマホを取ろうとしたら、夜乃宮さんが通話を切ってしまった。

　ちょ、ちょっと待ってくれ。電話の相手は奏くんだったのか？

「えええええええええええええええええ！？」

　叫びながら頭を抱えずにはいられなかった。

「ちょ、どうしたのあまね！？」

　俺が叫んで驚いたのか、高梨さんが問いかけてきた。

　どうしたって、夜乃宮さんの電話の相手が奏くんで、パネルの話をしていた。そして手伝うとか言っていた。

　ヤバい、これはヤバいぞ。

　あの無駄にスペックが高いシスコンにパネルなんて作らせたら、確実に大変なことになる。

「ど、どうして奏くん、じゃなくてオオクワ怪人にパネルのことを！」

　そう問いかけながら夜乃宮さんに詰め寄った。

「え？　江奈がオオクワ怪人に電話してみたらって言ったから」

　きょとんとした夜乃宮さんが呟いた。

　砂庭さんが？

　勢いよく砂庭さんを見たら、てへっと笑った砂庭さんがペロッと舌を出した。

　高梨さん達と一緒にキッチンに向かう時、最初は一緒に行くって言っていたのに、やけにあっさり引いておかしいとは思っていたけど……。

「あまねちゃんが凛ちゃんの件で走り回っていた頃、くうちゃんからオオクワ怪人の話を聞いてねぇ。電話番号も知ってるって言うから、ちょっと連絡を取ってもらったんだぁ」

　にこにこと笑いながら悪びれなく話す砂庭さん。

「え？　おおくわかいじんってなに？」

　話に付いてこれない様子の高梨さんが首を傾げている。

「オオクワ怪人とは、特に悪ではないけど秘密の結社によって作られた怪人であり、無駄に性能が高く、用事が済んだら山に帰ります」

　頭を抱えながら高梨さんに説明した。

「なにそれ？」

ジト目で呟く高梨さん。

以前高梨さんに奏くんの写真を見せた時、なんだか怒っていたからな。ちゃんと説明するのが怖い。

「超強力な助っ人だよぉ。百合園さんに任せていたら、終わるものも終わらなくなっちゃいそうだからねぇ」

ジト目の高梨さんを見ながら声を上げる砂庭さん。

くうっ、なんという正論。

確かに百合園さんに任せておくのは危険だ。現にパネルの件がまったく進んでいないし。

だからって奏くんに電話をするなんて……。

「助っ人ねぇ……」

ジト目のまま砂庭さんを見て呟く高梨さん。

明らかに怪しんでいる。

「あまね……」

聞こえた声にハッとして視線を下げると、俺の上着を掴んでいる夜乃宮さんが、瞳をうるうるさせながら俺を見上げていた。

「私……余計なことをしちゃったのか？」

震える声でそう言った夜乃宮さんは、今にも泣いてしまいそうだ。

「そ、そそ、そんなことないよ！　くうちゃんは何も悪くない！　むしろよかった！　そうよかったよ！　ありがとうくうちゃん！」

夜乃宮さんを泣かせるなんて絶対にあってはならない、と思いながら必死に声を上げた。

「本当か？」

涙目で首を傾げる夜乃宮さん。

「うんうんうんうん！　本当だよ！　さすがくうちゃん！　くうちゃんは頼りになるなあ！」

とにかく必死に頷きながら声を上げた。

涙目で俺をジーッと見つめていた夜乃宮さんは、くすん、と鼻を啜り、そして――。

「あは！」

俺の話を信じてくれたようで、パアッと満面の笑みを浮かべた。

はぁぁぁぁぁぁ、焦った。夜乃宮さんを泣かせるとか、一生モノのトラウマを作る所だった。

チラリと砂庭さんを見る。

「くうちゃんありがとう。あまねちゃんも喜んでるし、やっぱりくうちゃんは偉いねぇ」

ソファから立ち上がり、夜乃宮さんの前でしゃがんだ砂庭さんが、そんなことを言いながら夜乃宮さんの頭を撫でている。

「あはは！　江奈が電話しろって言ったからだ！　江奈のお陰だ！　ありがとう江奈！」

砂庭さんに頭を撫でられながら、嬉しそうに言葉を返してお礼を言う夜乃宮さん。

困ったことになった。まさか文化祭に奏くんが絡んでくるなんて。

まあ、奏くんなら悪い意味で問題を起こすことは無いと思うけど。

でもなぁ。

あの人は俺のことになるとちょっと暴走しちゃう所があるし。

不安だ。

女の子になったら修羅場だった件 - 第九十六話　やる気になった参謀が怖い件

「みりすぅ、膝枕して欲しいですぅ」

　ソファに座っているありすに抱き着き、頬をスリスリしながら甘えた声を上げている百合園さん。

「ビンタするのも疲れてきたよ……」

　色々と諦めてしまっているのか、百合園さんにされるがままになっているありすがジト目で呟いている。

「はぁ、みりすの太ももはスベスベで心地良いですぅ」

　ありすが抵抗しないことを同意と受け取ったのか、寝転がった百合園さんがありすの太ももに頬を摺り寄せ、えへえへと笑っている。

　ジト目のありすが溜息を漏らし、百合園さんの頭をポコンと叩いた。

　ありすよ、丸くなったな。

　そんな二人を真っ赤な顔でぼーっと眺めていたイリスさんは、ハッとすると両手で口元を覆い、チラチラと俺を見た。

　なんですか。私も膝枕して欲しい、とか思っているんですか。

　いや、膝枕くらい別にいいですけど、残念ながら――。

「九百四十七かける三百三十六は……三十二万千五百五十二くらいかなー」

　俺の膝の上にちょこんと座っている夜乃宮さんが、体を左右に揺らしながら愛

らしい声を上げている。

　愛らしいけど計算が凄い。

　桁が凄すぎて合っているのかどうか判断できないけど、たぶん合っているんだろうな。

　それはともかく、イリスさん、俺の膝の上は夜乃宮さんの定位置だから諦めてください。

「これは事故です！」

　俺をチラ見していたイリスさんが、ガバッと俺に跳びかかって来た。

「あ……」

　跳びかかってきたイリスさんの顔に、足をパタパタさせていた夜乃宮さんの足が、スッパーンッとカウンター気味に入ってしまった。

「ひぐうっ」

　呻きを上げたイリスさんが、両手で顔を覆ってうずくまる。

「ご、ごめんなイリス！　大丈夫か！？」

　悪いのはいきなり跳びかかって来たイリスさんで、夜乃宮さんは何も悪くないんだけど、驚きながらイリスさんに謝った。

「だ、大丈夫です。事故ですから。気にしないでください……」

　両手で顔を覆いながら鼻声で答えるイリスさん。

　擁護のしようが無い。

「な、なにやってるんですか……」

　ジト目で呆れたように声を上げた高梨さんが、俺とイリスさんの間に割って入るように座った。

「あんたのお姉さん、完璧そうに見えて、やっぱりあんたの姉なんだね」

　太ももに纏わり付いている百合園さんの頭をポカポカと叩きつつ、ありすも呆れたように呟いた。

　そしてププッと噴き出している砂庭さん。

　そんなこんなで今現在、夕食を済ませ、後片付けも終わり、リビングでくつろいでいる。

　いや、くつろげているかと言うと微妙だけど。

「ちょっといいかな」

　俺の隣に座っている高梨さんが右手を上げながら声を上げた。

「みんなに言っておきたいことがあります」

　そう言って高梨さんはその場に立ち上がった。

　ありすの太ももに纏わり付いている百合園さんを含めた全員が、高梨さんに注目した。

「みんなはもう知ってると思うけど、自分の口ではっきり言いたいから」

　全員を見回しながらそう言った高梨さんは、目を閉じると息を吸い込み、そして目を開けた。

　強く固い意志を感じる黒い瞳。まるで宝石のように深く輝いているその瞳に思わず見惚れてしまった。

「私は自分の意志で生徒会長になることを決めました」

　決して大声ではないけど、でも凛とした迷いの無い声がリビングに響く。

「私は一度失敗しています。みんな私を応援してくれたのに。みんな私に力を貸そうとしてくれたのに。私は周りが見えなくなっていて。そのせいで、たくさんの人の想いを無駄にし、傷つけました」

　両手を握り締めながら話す高梨さん。

「私は未熟でした。ううん、今も未熟です。みんなの力を借りなければ、夢を叶えることができません」

　そう言って、高梨さんは深々と頭を下げた。

「そう、夢。私はもう一度生徒会長になりたい。そして今度こそ納得できる成果を残したい。お願いします。力を貸してください。みんなの力が必要なんです。私に力を貸してください。私と一緒に夢に向かって走ってください。お願いします」

　頭を下げたまま声を上げる高梨さん。

「どこまで本気かわかりませんね。言うだけなら誰にだってできますから」

　寝転がってありすの太ももに頭を乗せている百合園さんが、高梨さんを挑発するように声を上げた。

　ふざけた態度の人からそんなことを言われたくない、と普通なら言いたくなると思うけど、高梨さんは無言で顔を上げ、百合園さんを見つめた。

　変わらず寝転がりながら、それでも高梨さんの瞳を真っ直ぐに見つめ返す百合園さん。そして妹の無礼な態度を見て焦っているのか、あわあわしているイリスさん。

「本気だよ。私は生徒会長になる。そしてみんなの力を借りて、最高の生徒会長になってみせる。必ずね」

　百合園さんを見つめていた高梨さんが、そう静かに声を上げた。

「もしなれなかったらどうする気ですか。みんなに迷惑をかけただけで終わったらどう責任を取る気ですか」

　食い下がる百合園さん。

「必ずなる」

　短く、そしてはっきりと言い切る高梨さん。その表情にも、その言葉にも、微塵の動揺も迷いも見えなかった。

　高梨さんを真っ直ぐに見つめていた百合園さんは、ジト目になると溜息を漏らした。

「煽ってもブレませんね。つまらないです」

　そう呟いた百合園さんは、まるで猫が主人に甘えるようにありすの太ももに頬を擦りつけ、えへえへと笑っている。

　百合園さんが煽っても、高梨さんは動じなかった。

　その姿を全員が見た。

　百合園さんが煽ったからこそ、高梨さんが本気であると言うことみんなに知らしめることができたんだ。

　まったく、頼んでもいないのに勝手にヒール役になって。

　ほんと不器用だなぁ、百合園さんは。

「あんたもたいがい不器用だよね」

　クスッと笑ったありすが、そう言って百合園さんの頭を撫でた。

　どうやらありすは百合園さんの真意に気付いているようだ。

　さすがだ、我が妹よ。

　ポッと頬を染めた百合園さんは、口をへの字にすると寝返りを打ち、ありすのお腹に顔を埋めた。

「アリスは良いヤツだぞ、凛」

　俺の膝の上に座っている夜乃宮さんが小声で囁いた。

「うん、わかってるよ、ソラ」

　夜乃宮さんの囁きに答える高梨さん。

　二人の囁きが聞こえたのか、ありすのお腹に顔を埋めている百合園さんの耳

がカーッと赤くなった。

「ふふ」

　恥ずかしがっている百合園さんを見て楽しそうに笑っている砂庭さん。

　そして、一人きょとんとしているイリスさん。

　妹の無礼な態度と言動で場が険悪な雰囲気になると思いきや、丸く治まってしまい、わけがわからなくなっているのだろう。

「イリスちゃん、こっちにおいで」

　なんだかイリスさんが可哀想になり、声をかけながら手招きをした。

「わんっ」

　パアッと満面の笑みを浮かべたイリスさんが、四つん這いになると、犬のように吠えながら近寄って来た。

「イリス……ちゃん？」

　ピクンと反応した高梨さんがジト目で俺を見た。

　ヤバ、思わずちゃん付けで呼んじゃった。

「あまね、仲が良いと言ってもイリスさんは年上なんだよ？　ちゃん付けで呼ぶのはどうかと思うなあ？」

　俺の腕に手を回し、胸をグイッと押し付ける高梨さんが、にっこりと笑って語りかけてきた。

「は、はい。ごめんなさい」

　こ、怖いけど、胸の感触が……。

「イリスさんも、最年長者としてしっかりしてくださいね？　と言うことで、そこに座ってください」

俺の腕に抱き着きながら、イリスさんを見て語りかける高梨さん。

四つん這いの状態でビクッと震えたイリスさんは、その場に女の子座りになると、叱られた犬のようにしゅんとしてしまった。

ああ、ダメだ。しゅんとされると甘やかしたくなる。

イリスさん、あとで膝枕してあげるからあんまり落ち込まないでね。

「凛ちゃんのカッコいい意志表明と百合園さんのツンデレを見れたことだし、じゃあパネルの話をしようか」

パンッと手を叩いて声を上げる砂庭さん。

「あ、そうそう。気になってたんだけど、パネルってなんなの？」

首を傾げた高梨さんが砂庭さんに問いかけた。

「順を追って説明するね」

右手の人差し指を立てた砂庭さんが、パチッと片目を閉じて声を上げる。

「百合園さんがあまねちゃん達のパネルを学校に持って来たのは覚えてるよね？」

「あ、ああ、うん。保母さんコスプレのあまね、可愛かったよね」

砂庭さんの言葉を聞き、頷きながら呟いた高梨さんは、ハッとすると頬を染め、口元に拳を当ててコホンと咳払いをした。

素で俺のコスプレ姿を可愛いと言ってしまい、恥ずかしがっているようだ。

高梨さんが見たいって言うなら、保母さんのコスプレくらい別にいいけど。

「あのパネルを生徒会長が気に入ってねぇ。文化祭の案内用の看板として、あまねちゃんのパネルを校内に設置することになったんだよ」

「え！？　あまねのパネルを！？」

砂庭さんの説明を聞き、驚愕の声を上げた高梨さんが身を乗り出した。

「な、何枚くらい作るの！？」

「んー？　まだはっきり決まっていないけど、校門と昇降口は確定だろうし、階段の踊り場に設置するとしたら、階段は二つで三階だから計六枚。あとイベント会場になる校庭と体育館にも置くだろうから、最低でも全部で十枚かなぁ。あくまでも最低だよ。おそらくもっと増えると思う」

高梨さんの問いかけに、スラスラと流暢に語る砂庭さん。

「そんなわけで、パネルを作ることになったんだけど、あまねちゃんが責任者になったの」

「あまねのパネルを作るのに、あまねが責任者になったの？」

砂庭さんの説明に、高梨さんが不思議そうに首を傾げた。

自分で自分のパネルを作るとか、しかも責任者とか、ほんと変な話ですよね。

「そこで問題になったのが、パネルの作り方。作り方は百合園さんしか知らないんだよ。でも百合園さんは文化祭の実行委員長に就任予定だから、パネル作りの責任者になれない。と言うことで、百合園さんからパネルの作り方を教わるため、こうして泊まり込むことになったのです」

「なるほど」

砂庭さんの言葉に納得したように頷く高梨さん。

砂庭さん、わかりやすく説明してもらって助かりますけど、あなたはその話をいったい誰から聞いたんですか。

俺は話していないし、ありすも話していないと思う。

だとすると百合園さんか、もしくは生徒会長か。

生徒会長だとしたら、砂庭さんは以前から生徒会長と繋がっていたと言うことになる。

　俺が浮かれてバカみたいに走り回っていた頃、砂庭さんは静かに着々と水面下で地固めをしていたんだろうな。

　頼もしいけど恐ろしい。

「と言うことで、百合園さんからパネルの作り方を教わろうと思います」

　そう言ってにっこりと笑った砂庭さんが、寝転がりながらありすのお腹に顔を埋めている百合園さんを見た。

　チラッとジト目で砂庭さんを見た百合園さんは、ポフッと再度ありすのお腹に顔を埋めた。

「今日は気分じゃないです。明日にします」

　ありすのお腹に顔を埋めたまま、ふがふがと声を上げる百合園さん。

「あんたなにバカなこと言ってんのよ！」

　百合園さんのやる気の無い態度にイラッとしたのか、怒声を上げたありすが百合園さんの頭をポコポコと叩いている。

「そうだよ！　私に散々偉そうなことを言ったんだから、あんたもやる気を出しなさいよ！」

　ビキッとこめかみに血管を浮き上がらせた高梨さんが、身を乗り出して百合園さんを指さし、怒声を上げた。

　高梨さん、ごもっともです。

　高梨さんに対抗して生徒会長に立候補するだの、生徒会長になれなかったらどうするだのと散々偉そうなことを言っておいて、気分じゃないとか……。

「わかった！　あんたパネルの作り方を脅しの材料にして、あまねとありすをずっと家に泊まらせるのが狙いなんでしょ！」

　その高梨さんの怒りの叫びに、百合園さんがビクッと震えた。

　図星か。

もうほんとこの困ったちゃんは。

呆れて物も言えなくなったのか、ありすがジト目で溜息を漏らしている。

「それならそれで別にかまわないよ」

「え！？」

「え！？」

「え！？」

平然と声を上げた砂庭さんに、高梨さんとありす、そして百合園さんが驚きの声を上げた。

「ほ、本気ですか！？　あまねさんをモデルにするんですよ！　しかも私が作った超ハイクオリティなパネルを全校生徒が見ています！　それなのに今さら低クオリティなパネルを作ったりしたら、賞賛されるどころか反感を買いますよ！　それでもいいんですか！？」

別にかまわないと言われ、焦った様子の百合園さんがガバッと身を起こして叫んだ。

ああ、なるほど。砂庭さんの目論見が読めた。

砂庭さんは百合園さんがグズることを見抜いていたんだ。

そのための奏くんだったんだな。

「できれば百合園さんに教えてもらいたいけど、嫌だって言うのならオオクワ怪人から教えてもらいます」

「な、なんですかそのおおくわかいじんって！」

砂庭さんの言葉に問い返す百合園さん。

やっぱりそう来たか。

「そ、そのおおくわかいじんとやらは、私と同レベルのパネルを作れるって言うんで

すか！」

　百合園さんの叫び染みた問いかけに、砂庭さんがクスッと笑った。

「オオクワ怪人の親友であるくうちゃん、説明をお願いします」

　そう言って夜乃宮さんに話を振る砂庭さん。

「オオクワ怪人は凄いぞ！　デカいのに速いし、強いのに優しいんだ！　そしてなんでも作れるしダンスも上手いんだ！　立派な怪人なんだぞ！」

　瞳を輝かせて身振り手振りで説明する夜乃宮さん。

　その説明ではわからないと思うけど、可愛いからよし！

「続いてオオクワ怪人をよく知るあまねちゃん、コメントをどうぞ」

　夜乃宮さんに引き続き、砂庭さんが俺に話を振ってきた。

「アリスちゃんのパネルのクオリティは高いと思う。でもオオクワ怪人は違う。あの人は違うんだよ。次元が」

　そうジト目で答えた。

「な！？」

　俺の言葉を聞いて驚愕の声を上げる百合園さん。

「じゃあオオクワ怪人をよく知る人その二、ありすちゃんコメントをどうぞ」

　次いでありすに話を振る砂庭さん。

「オオクワ怪人ってあれでしょ？　あのバカでしょ？　ほんとバカだからなぁ、あれ。あのバカにお姉ちゃんのパネルなんて作らせたら、そりゃあバカみたいに凄いのを作ると思うよ。バカだから」

　ジト目で呟くありす。

　ありすよ、曲がりなりにもお世話になっているお兄ちゃんなんだから、もうちょっと

オブラートに包めませんか？

「な！？　みりすが認めるなんて！」

　バカだバカだと言いつつ、凄いのを作ると言ったありすに驚きを隠せない百合園さん。

　百合園さんが驚くのも無理は無い。

　なにせ極度のシスコンであるありすが一応認めているんだから。

「み、みりすは、みりすは私のパネルよりおおくわかいじんのパネルの方が凄いって言うんですか！？」

　明らかに動揺している百合園さんが、ありすの両腕を掴み、ゆさゆさと揺らしながら声を張り上げた。

「お姉ちゃんも言ってたけど、あれは次元が違う。その気になったらパネルどころか等身大のお姉ちゃんフェギュアとか作りそうだし。しかも本物そっくりのモノを」

「等身大！？　本物そっくり！？」

　ありすの言葉にいち早く反応したのは高梨さんだった。

「ほ、本物そっくりって、唇とか肌とか柔らかいのかな！？　手とか足とか動くのかな！？」

　真っ赤な顔で叫んだ高梨さんは、ハッとすると口元に拳を当て、コホンと咳払いをしている。

　もしかして欲しいんですか。本物が隣にいるのに？

　欲しがるなら本物を欲しがって欲しいんですけど。

　それはともかく、唖然として言葉を失っている百合園さん。

「オオクワ怪人は、きっと文化祭まで凄いパネルを仕上げてくると思う。だから百合園さん。私たちでオオクワ怪人のパネルを超えるモノを作らない？　百合園さんならきっとできると思う」

優しい微笑みを浮かべ、まるで子供に言い聞かせるように語る砂庭さん。

呆然としていた百合園さんは、砂庭さんの言葉を聞き、グッと拳を握り締めた。

そして赤い瞳が揺らめき、みるみる光が宿ってゆく。

「怪人だが大臣だか知りませんけど、やってやろうじゃないですか！」

そう叫びながら拳を振り上げる百合園さん。

そんな百合園さんを見た砂庭さんは、にっこりと笑ってピースをした。

奏くんをダシにして百合園さんをその気にさせ、パネルのクオリティを上げると共に、奏くんが作ったパネルも手に入れるという、まさに一石二鳥の策略。

「楽しそうだな！」

嬉しそうに声を張り上げる夜乃宮さん。

「結局よくわからないけど、パネル作りは面白そうだね！」

夜乃宮さんに続き、高梨さんが声を張り上げた。

「オオクワ怪人と勝負するのはやめた方がいいと思うけどなあ。想像の遥か上を行くとんでもないモノを作ってきそうだし……」

夜乃宮さんや高梨さんと違い、勝負に乗り気じゃないありす。

奏くんをよく知っていたら、勝負したくなくなるのもわかる。

「みりす！　ぜーったい私が勝ちますから！　勝ったら結婚ですからね！　約束ですよ！」

諦めムードのありすが、百合園さんをさらにやる気にさせたようだ。

しかし、百合園さんどころか、奏くんすら手のひらで転がすとは。

砂庭さん、あなたは本当に怖い人です。

「大学生って、高校受験できますか？」

　それまで黙っていたイリスさんが、へらっと笑いながら声を上げた。

「私、みんなの後輩になって、来年の文化祭を一緒に楽しむんです」

　遠くを見つめて語るイリスさん。

　そのへらへらとした笑顔は、あまりに痛々しかった。

　イリスさん、あとでいっぱい甘やかしてあげますから、ちゃんと大学に通ってください。

女の子になったら修羅場だった件 - 第九十七話　百合園さんの様子がおかしいけどそれどころじゃない件

　百合園さんがやる気になったことで、さっそくパネル製作の講習会が開かれることになった。

　と言うことで、俺達は今、百合園さんの部屋の前に立っている。

　ゴクリと唾を呑み込む。

　扉の奥にはいったい何があるのか。

　魔王城の城門の前に立っている気分だ。

「は、入っても大丈夫なの？」

　俺の隣に立っている高梨さんが、不安気な表情で呟きながら、そっと俺の手を握ってきた。

　高梨さんの細く柔らかな手の感触。

　怯えている。高梨さんが。

　俺がしっかりしなければ。

　魔王城、恐るるに足らず。

「どうぞ入ってください」

　そう言ってあっさりと扉を開く百合園さん。

「ふぁ！？」

扉の先に見えたのは、綺麗に整頓された落ち着きのある部屋だった。

俺の手を握りながらポカーンとしている高梨さん。

百合園さんの部屋だから、俺やありすのポスターが壁中にベタベタと貼られていたり、等身大パネルだらけだったり、等身大フィギュアとかがあると思っていたのだろう。

俺も思っていた。

ところがおかしなモノが全く無い。

あるのは机や本棚やベッド。そのどれもがシンプルであり、かつ高級感を漂わせている。

まさしくお嬢さまの部屋と言った感じだ。

これが百合園さんの部屋。

イメージと違いすぎる。

「想像していたのと違うねぇ」

頬に手を当てた砂庭さんが、笑顔ながらも残念そうに呟いた。

どうやら百合園さんらしい部屋を期待していたようだ。

「私も初めて見た時はびっくりしたよ。バカの部屋がこんなにまともだなんて信じられなかった」

百合園さんの隣に立っているありすが、俺を見ながら声を上げた。

そう言えばありすは百合園さんと一緒に寝たんだったな。

一緒に寝たのに部屋について何も言わなかったのは、特に問題が無かったからか。

「ここは本当にアリスの部屋か？」

　部屋の中をキョロキョロと見回していた夜乃宮さんが、首を傾げると百合園さんを見上げて問いかけた。

「アリスの部屋なのに、アリスの匂いとありすの匂いが同じくらいだ」

　トコトコと部屋の中に入った夜乃宮さんが、クンクンと鼻を鳴らしながら呟く。

　匂い？

「ちっこいの、お前にはこれを貸してあげます」

　そう言って、どこから取り出したのか、大きくて分厚い本を夜乃宮さんに差し出す百合園さん。

「おお！　昆虫図鑑！　見たことが無い図鑑だ！　凄い！　嬉しい！　ありがとうアリス！」

　瞳を輝かせた夜乃宮さんは、お礼を言いながら図鑑を受け取った。そしてその場にペタンと座り、さっそく図鑑を読み始めた。

　昆虫好きの夜乃宮さんに昆虫図鑑を貸してあげるなんて、百合園さんにも素直な所があるんだな。

「ふふ、なるほどねぇ」

　不意に砂庭さんが呟いた。

　振り返った百合園さんが砂庭さんを見る。

「さすがの百合園さんも、くうちゃんには弱いんだなぁと思って」

　百合園さんに見られた砂庭さんは、そう言って笑顔で肩をすくめた。

　そりゃあくうちゃんには誰だって弱いよ。だって可愛いもの。

　そう思いつつ、夜乃宮さんを見た。

　床に座り込み、瞳を輝かせながら夢中で図鑑を読んでいる。

はぁ、可愛い。

◆

「これがパネル用に買った大型プリンターです」

そう言って、巨大なプリンターをポンポンと叩く百合園さん。

百合園さんの部屋の壁際に置かれた巨大なプリンター。

ちょっと大きいなんてものじゃない。おそらく業務用の特注品だ。

「偉そうなことを色々と言いましたけど、ポスターの部分はパソコンに画像を取り込んで、このプリンターで印刷するだけだから簡単です」

ジト目で説明する百合園さん。

機械があれば誰でも作れる、と言うことをみんなの前で言いたくなかった様子だ。

「大変なのはポスターを張り付けるパネルの部分ですね。段ボールやスチレンを使えば加工が楽ですけど、強度は期待できません。アクリルを使えば強度は十分ですが、加工が大変です。と言っても、人数がいれば加工にそれほど時間はかからないと思いますけど」

強度が高いと加工しづらく、逆に加工しやすい物は強度が低いのか。

なるほどなぁ。

「問題なのは、以前私が作ったパネル以上の物は作れないと言うことです。オオクワ怪人がどんなパネルを仕上げてくるかわかりませんが、こちらはこれ以上クオリティを上げるのは不可能です。それでどうやって勝つか」

ジト目だった百合園さんは、キリッと表情を引き締めて力説している。

まあ、確かに。クオリティを上げるとしたら、画像の解像度とか、あとはプリンターの性能くらいだ。

そして現状、百合園さんが持っているパソコンとプリンターが最上だろう。

　つまり、百合園さんが言った通り、以前百合園さんが作ったパネル以上の物は作れないってことだ。

　それでどうやってオオクワ怪人に対抗するか。

「はーい、提案がありまーす！」

　ピンッと右手を上げた砂庭さんが、満面の笑みを浮かべながら声を上げた。

　嫌な予感がする。

「パネルの完成度を上げられないのなら、モデルに頑張ってもらえばいいと思いまーす！」

　その砂庭さんの言葉に、百合園さんと高梨さんがカッと目を見開いた。

「モデルに頑張ってもらうと言うことは、それすなわち！」

「色々とコスプレしてもらって写真を撮る！」

　百合園さんが声を張り上げ、続いて高梨さんも声を張り上げた。

　そして見つめ合った二人は大きく頷き合い、同時に砂庭さんを見た。

「砂庭江奈！」

「妙案だよ！」

　息ピッタリに声を上げた二人は、それぞれ砂庭さんの手をガッチリと握った。

「あとはみりすの同意を得るだけです！」

「そうだね！　ありすの了承が得られればこっちのものだよ！」

　お互いに声をかけ合った二人は、同時にありすを見た。

　ちょいちょーい、コスプレするのは俺ですよね？　それなのに俺の了承を得る気は無いんですか？

まあ、ここまで来たらコスプレくらいでグズる気は無いけどね。

そもそも俺が始めたことだし、俺にできることならなんでもするつもりだ。

でも、俺が良くても、妹様がダメと言ったらダメだろう。

確かにありすの了承を得る必要があるな。

そう思い、ありすを見た。

ジト目で口をへの字にし、腕を組んでいるありすは、みんなから注目されてふんっと鼻を鳴らした。

「お姉ちゃんを見世物にするのは正直あまり気が進まない。だけどお姉ちゃんの夢は凛ちゃんを生徒会長にすること。そのために進んで見世物になろうとしてる。なら私はお姉ちゃんの想いを尊重したい」

そのありすの言葉に、百合園さんと高梨さんが瞳を輝かせ、パアッと満面の笑みを浮かべた。

「ただし、条件があるよ。極端に肌を露出するようなコスプレはダメ、絶対。お姉ちゃんの肌を見られたくないって想いもあるけど、それ以上にそんなのお姉ちゃんらしくない。お姉ちゃんにコスプレをさせるなら、水無月あまねらしさを第一に考えること。それが唯一にして絶対の条件だよ」

ジト目だったありすは、表情を険しくさせると鋭い眼光で二人を睨みながら語った。

その瞳にも、その声にも、並々ならぬ意志を感じた。

「さすがみりす！　その通りです！　あまねさんが魅力的なのはあまねさんらしいからです！」

「そうだよ！　さすがあまねの妹！　あまねらしくないあまねなんてあまねじゃない！　あまねらしさ！　それこそがあまねの魅力を最大限に引き出すんだよ！」

ありすが出した条件を絶賛した二人は、ありすに駆け寄ると、それぞれありすの手をガッチリと掴み、ブンブンと振っている。

照れたのか、頬を染めたありすはふんっと鼻を鳴らした。

「上手くいきそうだねぇ」

聞こえた声に視線を向けると、いつの間にか隣に立っていた砂庭さんが、優しい瞳で三人を見つめながらにこにこと笑っている。

ありすがすんなり了承したのも驚きだけと、唯一の条件が俺らしさを第一に考えることだなんて。

俺に甘えてばかりだったありすとは思えない発言だ。

百合園さんと一緒にいることが多くなり、子供っぽい百合園さんの面倒を見ていることで、ありすはお姉さんになりつつあるのかもしれない。

「でもコスプレ用の衣装はどうする？」

不意に高梨さんが声を上げた。

「ああ、それなら私の部屋にありますよ」

高梨さんの言葉に答えた百合園さんは、なぜか笑顔のまま固まった。

どうしたんだ？

「部屋にあるって、クローゼットの中？　見てもいい？」

そう言ってクローゼットに近寄った高梨さんは、振り返ると百合園さんに問いかけた。

笑顔で固まったまま何も言わない百合園さん。

そんな百合園さんを見て首を傾げる高梨さん。

あ、まさか、クローゼットの中に見せられないモノが入っているのか。

部屋に何も無くて変だとは思っていたけど、そう言うことか。

「あんたまさか、クローゼットに変なモノを詰め込んでるんじゃないでしょうね？」

　俺と同じことを思ったらしいありすが、ジト目でそう言うとクローゼットに近付いた。

「お姉ちゃんの写真とかが詰まってたら没収だからね」

　そう百合園さんに言ったありすは、クローゼットの扉を開けた。

「ん？」

　扉が開かれたクローゼットの中には何も無かった。

　本当に何も無い。カラッポだ。

　固まっている百合園さんの頬を汗が伝ってゆく。

　百合園さんの様子が明らかに変だ。それにクローゼットの中に何も無いのも変だ。

「あ、ああ、あの！」

　不意に声が上がった。

　見ると、明らかに動揺しているイリスさんが一人であたふたしている。

　そう言えば、イリスさんはこれまでまったく喋っていなかった。

　怪しい。怪しいぞこれは。

　ありすと高梨さんも違和感を覚えているのか、ジト目になっている。

「お、お風呂！　お風呂に入りましょう！　今日は人数が多いから早く入らないと遅くなってしまいます！」

　あわあわしながら声を張り上げるイリスさん。

　必死に話をそらそうとしているのがみえみえだ。

　これはあれだな。イリスさんは何かを知っている。

「私はイリスさんとくうちゃんと一緒に入るから、凛ちゃんはあまねちゃんとありすちゃんと一緒に入りなよ」

「え！？」

　唐突に砂庭さんが声を上げ、ジト目だった高梨さんが一瞬で真っ赤になった。

　ちょ、高梨さんと一緒に！？

「い、いいい、いいの！？　あまねと一緒にお風呂に入っていいの！？」

　動揺を隠し切れない高梨さんが、砂庭さんに問いかけながらその肩をバシバシと叩いている。

　いやだから、なんで俺に聞かずに砂庭さんに聞くんですか。

「私はもうお風呂に入ったから。それより固まってるそのバカに聞きたいことがあるんだけど」

　ジト目で百合園さんを見ながら声を上げるありす。

　確かにありすはすでにお風呂に入っている。

　でもありすが一緒に入らないと……俺と高梨さんが二人きりで入ることになるのか？

　それはマズい！　嬉しいけどマズい！

「お姉ちゃんと一緒にお風呂に入りたかったんじゃないの？　それにお風呂に二回入っちゃダメ、なんて決まりは無いし。嫌なら別にいいけどねぇ」

　その砂庭さんの言葉に、ありすがピクンと反応した。

「入る」

　砂庭さんに煽られて意地になったのか、前言を華麗に撤回したありすがコクンと頷いた。

　ありすが頷いたのを見て、固まっていた百合園さんがホッと胸を撫で下ろし、ついでにイリスさんもホッとしている。

　砂庭さん、明らかに百合園さんを守ったよな。

　何か知っているのだろうか。

「じゃ、じゃあ、あまね……一緒にお風呂に入ろう？」

「え？　あ、うん」

　問いかけられて頷き、ハッとした。

　真っ赤な顔に上目使いで俺を見ている高梨さんが、恥ずかしそうにモジモジしている。

　そうだった！　百合園さんが気になって軽く頷いちゃったけど、高梨さんと一緒にお風呂とか！

　お、おお、落ち着け。ありすも一緒なんだ。ありすが一緒なら俺の理性が崩壊することも無いはずだ。

　大丈夫、きっと大丈夫だ。

　心臓が破裂しそうに激しく鼓動を刻む中、そう自分に何度も言い聞かせた。

女の子になったら修羅場だった件 - 第九十九話　女の子同士だからたぶん大丈夫な件

寝る支度が整い、誰が誰と一緒に寝るか、部屋割りをすることになった。

リビングに集結した七人。

誰が誰と一緒に寝るか。それを決める戦いの火蓋が今まさに切られようとしている。

とはいえ、戦いになりそうなのは主に二人。

睨み合っている高梨さんと百合園さんだ。

百合園さん曰く、ベッドがある部屋は三つらしい。

百合園さんの部屋とイリスさんの部屋、そして客室。

人数は七人。対してベッドは三つ。と言うことは、二人、二人、三人に分かれることになる。

何もベッドにこだわらなくても、布団を敷いて寝ればいいような気がするんだけど、そこを指摘したら百合園さんが喚き出しそうだから黙っておこう。

それはそうと――。

チラリと部屋の隅に視線を向ける。

一人離れた場所でせっせと押し花を作っているイリスさん。

部屋割りの話題が出た瞬間、逃げるようにその場を離れ、無心で押し花を作り始めたのだ。

明らかに逃げている。

たぶんあれだ。学校の班決めとか、体育の時間に二人一組にならなければならない時とか、一人だけ残っちゃう感じ。

それがトラウマとなり、そういった話題が出ると逃げるようになったと見た。

俺もぼっちだったから、そういった気持ちはわからないでもない。

放っておくのも可哀想だけど、俺が一緒に寝るって言うと黙っていられない人がいるし。

それで揉めるとイリスさんを争いの渦中に引きずり込んでしまいかねない。

そんなことになったら、イリスさんを余計に追い詰めてしまう。

最終的に三人、二人、二人に分かれるんだし、イリスさんがぼっちになることは無いんだから、ここは静観するのが吉かな。

「じゃあまずは三人組を決めようか」

パンと手を叩いた砂庭さんが、にこにこ笑いながら声を上げた。

押し花を作っているイリスさんがピクンと震え、その耳が赤くなった。

逃げたものの、班決めが気になって仕方がない様子だ。

イリスさんは二人きりになると異常に甘えてくるから困るけど、ここぞと言う時はへたれになるから割と無害だ。

だから一緒に寝てあげたいんだけどなぁ。そんなことを言ったら絶対揉めるからなぁ。

百合園さんがイリスさんと寝るって言ってくれれば丸く治まるんだけど、あのおバカさんには期待しない方がいいだろうなぁ。

「三人組はすでに決定しています！　私とみりすとあまねさんです！　私は今日、あまねさんとみりすのおっぱいに挟まれて眠るのです！」

真顔でバカなことを言い放つ百合園さん。

それを聞いてしゅんとしたイリスさんがクスンと鼻を啜った。

おいおバカさん、お姉ちゃんが泣きそうになってるぞ。

「なに勝手に決めてるのよ！　そんな勝手に決められたら、みんな納得できないわよ！」

百合園さんを睨み付けて声を張り上げる高梨さん。

みんなが納得できないとか言ってるけど、納得できないのは高梨さんですよね。

「釣り目のツインテツンツン女！　お前ちょっと可愛くてあまねさんから気に入られているからって調子に乗るなってんですよ！」

高梨さんをビシッと指さして声を張り上げる百合園さん。

可愛いって……貶しながら微妙に褒めている。

「んくっ」

可愛いと言われて反論しづらいのだろう。顔を真っ赤にさせた高梨さんが百合園さんから視線をそらした。

褒められると照れちゃう高梨さんが可愛い。

「異論は無いようですね！　なら決定です！　私は水無月姉妹と一緒に寝ます！」

胸を張った百合園さんが声を張り上げ、ハッとした高梨さんが百合園さんを睨み付けた。

「異論アリアリだって言ってるでしょ！　そんなんだから二大美少女のバカなほうなんて呼ばれるのよ！」

怒声を上げる高梨さん。

その高梨さんの反論に思わず納得してしまった。

二大美少女のバカなほう。

確かにその通りだ。

「ふふん！　能ある鷹は爪を隠すと言いますが、私は虎です！　だから爪も牙も隠さないのです！」

高梨さんからバカにされたのに、なぜか得意気な百合園さん。

爪も牙も隠さないでそれなら、根っからのバカってことになると思うんだけど……それでいいの？

「え？　どう言うこと？」

百合園さんの反論に混乱している高梨さん。

高梨さん、その子、たぶん何も考えていないから、考えたら負けだと思うよ。

「私は水無月姉妹と寝ます！」

「そんな勝手は許さない！」

「なんですかお前！　ケンカ売ってんですか！」

「ケンカ売ってるのはそっちでしょ！」

お互いに睨み合い、怒声を上げる二人。

予想はしていたけど、このままだと堂々巡りだな。

「なかなか決まらないようだねぇ。なら最高決定権者に意見をお伺いしようか？」

そう声を上げた砂庭さんはありすを見た。

言い争いを止めた二人は神妙な面持ちでありすを見る。

ジト目のありすは、腕を組むと口をへの字にした。

「私はお姉ちゃんと二人で寝る。あとは勝手に決めればいいよ」

そのありすの言葉に、高梨さんと百合園さんがしゅんとした。

さすが最高決定権者。二人とも何も言い返せないようだ。

「と言いたい所だけど、家に帰ればお姉ちゃんを独占できるし、こういう時くらいは身を引いてあげてもいいよ」

溜息交じりに呟くありす。

その言葉に、落ち込んでいた二人がパァッと満面の笑みを浮かべた。

「さすがみりすです！　さすみりです！」

「ありすは偉い！　偉くてかしこい！　さすがあまねの妹！」

全力でありすを褒め称える二人。

ジト目のありすは、二人に褒め称えられてポッと頬を染めた。

まんざらでもない様子だ。

「最高決定権者が身を引くと言うことで、なら司会進行役の私が意見を述べちゃおうかなぁ」

にこにこと笑っている砂庭さんが声を上げ、高梨さんと百合園さんが同時に砂庭さんを見た。

「三人組だけど、一つのベッドに三人は窮屈でしょ？　だからなるべく体が小さい人から順当に選んだ方がいいと思うなぁ」

その砂庭さんの意見は至極もっともだった。

三人で一つのベッドに寝るなら、体が小さい人を集めた方がいい。

小さいと言うと、まずは夜乃宮さん。次はありす。そして三人目は……。

「くうちゃんとありすちゃんは決定として、問題は三人目だけど、身長で言えばあまねちゃんか私だよねぇ」

俺を見て話す砂庭さん。

俺と砂庭さんの身長はだいたい同じくらいだ。ただしボリュームは圧倒的に砂庭さんが上である。

となると――。

砂庭さん、高梨さん、百合園さんが俺を見た。

小さい順なら夜乃宮さんとありすと俺で決定してしまう。

しゅんと俯く高梨さんと、涙目で嗚咽を漏らしている百合園さん。

百合園さんは泣くほどありすと一緒に寝たいんだろう。

そして高梨さんは……。

たぶん、恐らく、いや確実に……俺と寝たがっている。

「三人組はくうちゃんとありすちゃんとあまねちゃんで決定、と言いたい所ですが、一応あまねちゃんの意見を聞いてみようか？」

そう言って砂庭さんが俺に話を振ってきた。

一縷の望みを賭けたような瞳で俺を見る高梨さんと、涙で潤んだ赤い瞳で縋るように俺を見る百合園さん。

どうすれば丸く治まるか、答えは出ている。

俺としては、できれば夜乃宮さんとありすと一緒に寝たかった。それが一番安心できるメンバーだ。

でもそれを選択してしまうと、高梨さんと百合園さんを悲しませてしまう。

俺の安心のために二人を悲しませるわけにはいかない。

　そう思い、目を閉じると大きく息を吸い込んだ。

　今日は眠れぬ夜になってしまうと思うけど、仕方がない。覚悟を決めよう。

「ありす」

　目を開けるとありすに問いかけた。

「ん？」

　俺に問いかけられ、首を傾げるありす。

「今日はくうちゃんとアリスちゃんと三人で寝てもらえるかな」

　その俺の言葉に、えぐえぐと嗚咽を漏らしていた百合園さんがビクッと震えた。そして口を三角にしてプルプルと震えている。

「えー、またバカと一緒に寝るの？　んー、まあ、お姉ちゃんのお願いなら聞くけど」

　しぶしぶと言った様子で、それでもありすはコクンと頷いた。

「わー！　みりすー！　愛してますよー！」

　声を張り上げながらありすに向かって跳びかかる百合園さん。

「うざぁ……」

　百合園さんに抱き締められ、激しく頬擦りをされているありすがジト目でボヤいた。

　ごめんありす。今度いっぱい甘やかすから今は耐えてくれ。

「江奈ちゃんはイリスさんと一緒に寝てもらってもいいかな？」

　続いて砂庭さんにそう問いかけた。

　俺の言葉を聞いたイリスさんは、ビクッと震えると、押し花を作っていた手をピタリと止めた。

「はぁい！　やったあ！　私イリスちゃんと一緒に寝てみたかったのぉ！」

　俺の問いかけに砂庭さんは満面の笑顔で答えてくれた。

　その砂庭さんの答えを聞いたイリスさんは、勢いよく砂庭さんを見るとブワッと涙を溢れさせた。

「え、江奈さん、江奈さん、私と一緒に寝てもらえるんですか！？」

　泣きながら震える声を上げるイリスさん。

「もちろん！　イリスちゃんみたいに綺麗なお姉さんと一緒に寝れるなんて幸せだよぉ！」

　ピースをしながらイリスさんに答える砂庭さん。

　倒れるように床に四つん這いになったイリスさんは、泣きながらよちよちと床を這い、砂庭さんの足元に縋りついた。

「江奈さまー！」

　砂庭さんの足元に縋りつきながら叫ぶイリスさん。

　その場にしゃがんだ砂庭さんは、イリスさんをそっと抱き締めた。

　二人とも巨乳なものだから、抱き合うと凄い。

「よしよし、イリスちゃん。大丈夫だよぉ。私が色々と教えてあげるからねぇ」

　優しい声でそう言いながらイリスさんの頭を撫でる砂庭さん。

　色々と教えるって……。

　今さら止められないけど、あの二人を一緒に寝かせて大丈夫だろうか。

　イリスさんはへたれな上に世間知らずだし、砂庭さんから何を吹き込まれても真に受けそうで怖い。

　ていうか、砂庭さん、あなた最初からそれが目的だったのでは？

思い返すと砂庭さんからそれとなく誘導されたような気がしなくもない。

ジト目でそんなことを思っていたら、上着をクイクイと引っ張られた。

ハッとして視線を向けると――。

「っ！？」

うるうると瞳を潤ませた高梨さんが、燃えるような真っ赤な顔で上目使いに俺を見ていた。

「あ、あまねは誰と一緒に寝るの？」

上目使いのまま、甘えるように問いかけてくる高梨さん。

誰とって、残っているのは高梨さんと俺だけだから、言わなくても……。

「ね、ねえ、あまねは誰と寝たいの？」

追い打ちをかけるように高梨さんが甘い声で問いかけてくる。

言わなくてもわかっているのに、あえて問いかけているんだ。

うう、高梨さんは俺に言わせたいんだな。

あんまりイジメないで欲しいんだけど……。

「わ、私と、私と一緒に寝てもらえますか？」

顔が燃えるように熱くなるのを感じながら、そう高梨さんに答えた。

「はい」

蕩けそうな甘い声で返事をした高梨さんがコクンと頷く。

そんな声で、そんな顔で、そんな瞳で頷かれたら……。

「っ！？」

心臓が破裂しそうになっている中、恥ずかしそうに俯いている高梨さんが俺の

指に指を絡めてきた。

高梨さんの細くしなやかで、それでいてとても柔らかい指の感触。

しかも高梨さんは今現在、Tシャツ一枚だ。そのうえノーブラである。

そんな姿で一緒に寝て、もし甘えられたりしたら……。

俺だって男だ。我慢にも限度がある。

でもあれだ。たとえ間違いが起きちゃっても、今の俺は女。

もし万が一耐えられなくなって間違いが起きちゃっても、女の子同士なら、その……赤ちゃんはできない。

どんなに激しい間違いが起きても赤ちゃんはできないんだ。

だから大丈夫だ、うん。

……大丈夫だよね？